



## 神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

マリアはイエスと共に成長する

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。守るべき大祝日である御降誕と神の母聖マリアの祭日は、ミサの依頼を發表しませんので、依頼された方のミサは、あらためて次のミサで發表いたします。また、本日の神の母聖マリアのミサの終わりに、新成人を迎えた方の祝福式をおこないます。皆さんで、新成人をお祝いしましょう。

昨年末に茨城県に住んでいる妹が、妹の子を連れて里帰りしていました。半年前と比べてどれくらい成長しているだろうかと実家に様子を見に行きました。半年前は1歳9ヶ月、何かを話しているのですがまったく聞き取れませんでした。

それが、2歳3ヶ月ですっかり変わって、飼い猫を見れば「ねこ」と呼びながら指さしましたし、「こんばんは」のようなあいさつもオウム返しですが返せるようになっていました。「へえ、話せるようになるんだ」と当たり前のことを妹に聞いたら、「最近はやちよち歩きじゃなくて、走り回って困るの」と成長ぶりを聞かせてくれました。

成長していく子供もそうですが、母親となった妹も、子供と一緒に成長しているのだなあと思います。わたしとは10歳離れていますが、結婚し、母となったことが本人を成長させてくれているのだと思います。

さて、世界中どこでも新年のミサは「神の母聖マリア」を祝います。今年は、母として成長するマリアの姿に注目してみました。マリアも、大きな使命を託されて、立派に成長していったのでした。当時はとても早く結婚していたでしょうから、マリアがイエスの母となったときは、10代の後半から、20代にかけてのことだったでしょう。すると、一人の人間として、まだまだ成長途上にあっただけだと思います。

マリアの成長は、マリア一人だけで積み上げていったのでしょうか。わたしは、御子イエスがそばにすることで、マリアは成長し、完全な者となっていったと思います。マリア一人では理解することも受け止めることもできないようなたくさんの出来事がマリアの一生涯には起こりましたが、彼女が「出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19) この姿勢で何事も受け止めることができたのは、イエスがそばにおられたからなのです。

つまり、マリアはイエスを産み、神の母になるという恵みをいただいたことで、すべての女性の模範、すべての母の模範となるほどに成長し、完成されていったのです。神の母聖マリアはいつもイエスと共に成長していきました。マリアが登場する場面には、つねにイエスの姿があります。

神の母マリアの称号は、もちろんイエスの母マリアにのみ与えられる称号です。ですが、神の母マリアの生涯の歩みは、わたしたち皆にも模範として示されています。マリアが神の母であるのは、神の子を宿し

たった一人の女性であるからですが、同時に、イエスを大切に育て、イエスから離れずに暮らし、イエスのどんな小さなしぐさも見つめながら生きておられたからでもあります。

すると、わたしたちはイエスの母になることはできませんが、イエスの近くにおいてイエスと共に暮らし、イエスの小さなしぐさも見つめながら生きることは可能なのではないのでしょうか。マリアは、イエスと共に歩む中で神の母聖マリアとして成長し、完成されていきました。

同じように、わたしたちが新しい年をイエスと共に歩むなら、マリアのように成長することができます。神の母聖マリアを称えるわたしたちは、神の母聖マリアが成長していった歩みに倣って、わたしたちのさらなる信仰面の成長を願うことができます。

今年一年、わたしたちがより良い年であることを願うなら、それは神と共にある生活を願うのがいちばんの近道です。どのようにして神が共にいてくださる生活を積み重ねていけるか、それぞれ考えましょう。今日こうして礼拝に集まったように、ふだんから教会に足を運ぶことも神と共にある生活を維持する力になります。

礼拝に集い、祝福を受け、派遣の言葉に送られながら、今年一年、また成長していきましょう。神の母聖マリアの取り次ぎを願いながら、イエスと共に生きる決意を確かめ合うことにしましょう。

主の公現(マタイ 2:1-12)



## 主の公現 (マタイ 2:1-12)

イエスを指し示す星は、すべての人に輝いている

主の公現の祭日を迎えました。馬小屋をご覧ください。占星術の学者たちが幼子の元に到着しています。子供たち、馬小屋に学者たちが置かれているのを見たら、「イエスさまがすべての人にご自分を現す日がやってきた」と知って欲しいと思います。

今週の説教の要点は、「イエスを指し示す星は、すべての人に輝いている」というものです。これからわたしの主日の説教は要点を先に示してから始めたいと思います。

徒歩巡礼に向けて、今年初の練習をこなしてきました。昨年末、浜串から神ノ浦の往復に続き、鯛ノ浦港から有川港までを往復してみたのですが、今回さらに距離を伸ばして、「浜串入り口」バス停から、「奈良尾港ターミナル」までを往復しました。距離は 18km、かなり疲れしました。

何人か顔見知りの人と会いました。まず子供連れの家族に会いました。次に奈良尾港を折り返し、奈良尾病院前で 20 代のギャル 4 人組に会いました。実は彼女たちの前でしようもない嘘をついてしまいました。ギャルに会ったときは 5 時までに帰ろうという計画がずれ込み、ちょっとだけ走って時間を稼ごうとしていた矢先だったのです。

4 人組のうちの 1 人は浜串教会の目の前に住んでいる人でした。「神父さま。浜串から走ってきたんですか？」と言われ、そこでつい「うん」と言ってしまったのです。本当に浜串から走ってきていたら、折り返せるはずがありません。それなのに、ギャルの手前嘘を言ったのです。

バカだなあと思いつつ、彼女たちの姿が完全に見えなくなるまでしばらく走り続けました。そのせいで、国道に出る頃には完全に息切れして、座り込んでしまいました。正直に「歩いてきたんだよ」と言って、ペースを乱さずに歩き続けたらどれだけ楽だったでしょう。

復路、高井旅でシスターに会いました。名前は伏せておきますが、そのシスターが「送らしましょうか？」と誘ってくるのです。乗りたいのは山山ですが、誘惑に負けたら訓練が台無しになります。心を鬼にして申し出を辞退し、何とか出発地点のバス停まで帰ってきました。

あの日、わたしの心の中には、わたしを動かすいくつもの動機が生まれていました。「奈良尾まで歩いて往復します」と宣言したこと。「浜串から走ってきたんだ」と調子に乗ってしまったこと。「訓練ですから」と申し出を断ったこと。こうした心の支えがあったから、18km の道のりを歩き通せたのだと思います。

18km もの距離を何となく歩くというのは不可能です。少なくともわたしはそう思います。何か、自分を支える目標がなければ、自分を鼓舞する動機がなければ、足は前に進まないのではないのでしょうか。

今回わたしの体験は、占星術の学者たちが東の国からはるばるやって来てイエスを礼拝したことを黙想するのに役立ちました。彼らにとっ

てユダヤの国までの旅を決断させる重要な意味を持つ星が現れた。だから占星術の学者たちははるばる「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」（2・2）を拝みに来たのです。

危険を伴い、それ相応の費用を負担して、しかも非常に高価な贈り物を携えて旅をするのですから、それに見合う重大な動機が必要です。占星術の学者たちは、現れた星が、どんな困難を押してでもそれ以上に価値がある、そして贈り物を届けに行く価値があると理解しました。

星は、ユダヤに入ってヘロデ王にあいさつに行くとは一旦見えなくなっています。しかしまたしばらくして、「当方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった」（2・9）とあります。それは、自分の人生の旅を導いてくれる星に出会い、いったんはその星を見失うことがあっても、再び星は現れて、人生の最後まで導いてくれる。そのことを教える出来事となりました。

占星術の学者たちは、幼子イエスに黄金、乳香、没薬を贈り物として献げます。彼らの人生を照らす偉大な星に出会って、どんなに高価な贈り物を献げても惜しくないと考えたからです。また彼らは、ヘロデのもとへは立ち寄らず、「別の道を通って」（2・12）自分たちの国へ帰って行きました。もはやヘロデは自分の人生に必要な人ではなくなっていたのです。自分の人生のすべてを照らす星に出会ったので、ヘロデに別れを告げ、救い主に照らされて生きるという別の人生を歩み始めました。

占星術の学者たちは、わたしたちにさまざまなことを教えてくれます。王としてお生まれになった方の星は、わたしたち皆に現れたのです。わたしたちの人生全体を照らす価値ある星です。わたしたちはある時期その星を見失うかも知れません。けれども再び人生を照らす星を探し求めるなら、星は人生の歩みに先立ち、イエス・キリストを土台として生きるように指し示してくれるのです。

人生を最後の最後まで照らし、導いてくれる星に出会った人は、道を逸れる必要を感じません。経済優先の社会、国の秘密が個人よりも優先されると思わせる社会、いざとなったら武器を手にして自衛すると声高に主張している今の日本社会にあって、別の道を通って歩くカトリック信者がいることを、わたしたちは生き方で示せると思っています。

巡礼のためのトレーニングは、今のところいろんな人の声に後押しされていますが、本番では誰も知っている人とは会いません。大浦教会から今村教会までの巡礼の道を照らすのは、最後はやはりイエス・キリストという星だと思います。もちろん練習中も忘れないでいたいと思います。

「別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。」（2・12）占星術の学者たちはそれぞれ自分たちの国、自分たちの生活に帰りました。自分たちのもとの生活に戻っても、星は輝き続けています。わたしたちはどうでしょうか。ミサに集い、星の輝きを確かめて生活に帰りますが、星は輝き続けているのでしょうか。その星があなたの生活を照らし、導いてくれているのでしょうか。またヘロデのもとへ戻ったりはしていないのでしょうか。まっすぐに、星が照らす道を歩いて行きたいと思います。

主の洗礼(マタイ 3:13-17)



## 主の洗礼 (マタイ 3:13-17)

水の中から上がり、天に向かって歩く

主の洗礼の祝日を迎えました。イエスが洗礼を受ける姿から、わたしたちがいただいている洗礼の恵みをもう一度振り返る機会といたしましょう。さらに振り返りにとどまらず、洗礼を受けていない人に洗礼を呼び掛けるきっかけにもしていきましょう。

今週、大曾小教区の跡次教会でも主日のミサをささげました。確か跡次教会でのミサは初めてのことだと思います。ただ、大曾小教区の黙想会をずいぶん昔に務めたことがあって、その時黙想会に参加した人にとっては、およそ20年ぶりに一緒にミサをささげる機会となりました。

主の洗礼の祝日の説教をまとめると、「水の中から上がり、天に向かって歩く」ということになります。イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けると、すぐに水の中から上がられました。これから宣教生活が始めるためです。そして、イエスに向かって天が開きました。イエスは天の御父に向かう道のりをまっすぐに歩き始めます。これらはそのまま、わたしたちに生き方を示すものでもありました。

当時の洗礼の儀式は、水に体を沈めておこなっていましたが、教会はこれを、これまでの罪に染まった生き方に死に、死んだ自分を神によって引き上げられて、新しい神のいのちに生きるしるしと考えています。わたしたちキリスト者が今生きているのは、罪に染まった生き方に生きているのではなく、洗礼を通して与えられたいのちに生きているのです。

イエスは、洗礼を受けて生き方を改める必要はありませんでしたが、人として、わたしたちの生き方を指し示すために洗礼をお受けになりました。わたしたちキリスト者にとって、イエスの前に道はなく、イエスが歩いたあとに、わたしたちの歩むべき道が開かれるのです。イエスは、人が歩むべき道のりのその最初の一步からわたしたちに模範を示し、「わたしについてきなさい」と招いているのです。

私事ですが、上五島地区の5人の神父さまが、2月に計画している大浦教会から福岡県の今村教会までの徒歩巡礼のために、現在自主トレを続けております。つい最近の1月7日にも、わたしが卒業した東浦小学校から、江ノ浜の龍馬像を設置している公園まで、歩いて往復してきました。24kmくらいあったと思います。

歩くという移動手段は、最も遅い移動手段です。自転車、バイク、車、お金に糸目を付けないなら、空を飛ぶ乗り物で移動するならもっと早いでしょう。最も遅い移動手段ではありますが、移動する区間の情報を最も手に入れることができるのは歩くということだと思います。

鳥の鳴き声、草むらに潜む動物の音、途中通過していく集落に住む人々の何気ない会話、これらすべてを体験出来るのは、歩くという移動手段だけです。わたしもこの前の長時間の徒歩訓練で実感しました。

イエスも、道を歩いて移動しました。ご自分に託された救いの道を最後まで歩き通しました。十字架にはりつけにされるその場所へも、三

度倒れながらも歩いて行きました。それは、歩くという手段が、人間の思いのすべてを受け止める最高の手段だったからだと思います。イエスを愛している人の思いも、イエスを憎んでいる人の思いも受け止め、ゆるして救いに導くために、道を最後まで歩き抜かれたのでした。

イエスが取った行動は、わたしたちが受けたものを振り返る物差しであり、わたしたちへの生き方の模範です。イエスはあえて洗礼をお受けになりました。人が、罪な生き方を捨てて、神のいのちに生きることがを教えるためです。わたしたちは洗礼を受けていますから、わたしの生き方は今どうなっているだろうかと考える必要があります。わたしたちが恵みに感謝することもなく、神の招く方向を気にも留めないで生きているとしたら、それはいまだに罪な生き方をしているのです。

さらに、イエスの取られた行動は、わたしたちに新しい取り組みへと促します。罪な生き方を捨てて、恵みに感謝し、神の招きに信頼して生きる。こんな新しい生き方があるよと、周りの人にも知らせに行くことです。わたしたちが自分を振り返るところで考えた、罪な生き方を何も気付かずに続けている人が何と多いことでしょうか。

イエスが示す生き方をまったく理解しない人にとって、最後に生き方を決めるのは自分自身ということになります。わたしの判断はそんなに信頼できるのでしょうか。人は皆、開かれた天に向かって歩いているのですが、この世に生まれたときから人生の最期を迎えるまで、自分自身の判断だけで開かれた天に向かって歩を進める力があるのでしょうか。

わたしは、イエスが示された道を歩むのが正しい生き方だと思います。最後を自分で決めるのではなく、イエスに委ねて生きる。この生き方を、自分自身も貫くし、イエスを知らない人にも示してあげる。それが、イエスの洗礼の姿がわたしたちに教えていることだと思います。

歩みが遅く感じられる人もいるでしょう。イエスの模範もいただいたし、わたしたちの進むべき方向も分かった。それなのになぜこの人は前に進もうとしないのか。遠回りをしたり、本来の歩むべき道を逃げ回ったりするのか。そのように見える人もいるかも知れません。

もちろんそのような人は心配だと思いますが、「歩みの遅い人はたくさんさんの情報を手に入れる」という体験から学んだことを思い出しましょう。心配している相手が投げやりな人でなく、壁に当たってもがいている人であるなら、きっとその人は貴重な学びを得ながら、遠回りに見える道を歩いているのだと思います。いつかその人も、ゴルゴタの丘まで十字架を担いで歩いたイエスにたどり着き、追い付くことでしょう。

洗礼を受けるという最初の一步から始め、十字架上での最期の時まで歩き続けたイエスが、わたしたちの人生の歩み、信仰の歩みの模範です。歩くのをやめないでください。どんなに遅くてもいいから、歩き続けてください。まだたくさん、歩かないと気付けない体験が待っています。前を歩くイエスを見つめながら、これからも開かれた天に向かって歩を進めていきましょう。



## 年間第 2 主日 (ヨハネ 1:29-34)

「見よ」と証しされた方に聞き従う

主の洗礼の祝日を終わると、教会の暦はしばらく年間の主日に移ります。教会の暦の仕組み、なかなか把握するのは難しいと思いますが、暦の始まりは待降節で、御降誕とそれに伴う祝祭日、年間を少し挟んで四旬節、聖週間があって復活節、聖霊降臨以降の一連の祝日、そして王であるキリストまで続く年間の季節と移っていきます。

季節を感じながら生活すると、生活にリズムができます。一度覚えてみることをお勧めします。参考のために、典礼暦を図で示したプリントを少し置いてますので、興味のある方は持ち帰ってください。

ただ今、黙想会の説教師を交渉しているところです。若手の神父さまに日程を2通り示して相談しています。まずは主任神父さまに相談をと思って、お願いの FAX を 10 日前に送ってみたのですが、うまく連絡が届いていなかったようでまだはっきりした返事をもらえていません。これ以上遅くなってから他の神父さまにお願いするのは難しいので、もし交渉が上手くいかなかったら、中田神父が自前で黙想会をすることになります。違う神父さまの話が聞きたいでしょうから、自前でするのは避けたいと思っています。

そんなことを考え考え説教を準備していると、ちょうどお願いしていた教会の主任神父さまから電話が入りまして、「助任司祭を説教師に派遣するのでよろしく」ということでした。これで心配事が一つ減りました。日程は3月中旬になると思います。

福音の学びに入りましょう。今週の学びを短くまとめると、「『見よ』と証しされた方に聞き従う」ということになります。当時洗礼者ヨハネの証しを受け入れた群衆がいたように、わたしたちもヨハネの証した方に向きを合わせて、聞き従うのです。

洗礼者ヨハネは、たった一つの使命のために命を削っていました。それは、「神の子、イエス・キリスト」の到来に人々を準備させるということでした。水で洗礼を授けていたのも、「聖霊によって洗礼を授ける人」(1・33)を指し示すためです。

そして、その時がやって来ました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(1・29) 洗礼者ヨハネが指し示すお方はイエスただ一人です。その方は自分よりまさっている方、自分よりも先におられた方です。「神の小羊」という言い方は、わたしたちのふだんの生活では使わない言葉ですが、三つの意味合いが込められています。

一つは、黙示録にある(7・17、7・14) 終わりの日にこの世を裁く小羊という意味、一つは旧約のイザヤ書 53 章で羊の姿で描かれる「苦しむ僕」で、人間の救いのために苦しみを受ける方。もう一つは、過越祭にほふられる羊の意味で、来たるべき方もほふられる羊となる方です。

このような姿を合わせ持つ方が、目の前に現れました。そこで洗礼者ヨハネは、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と言ったのです。

ところで洗礼者ヨハネはイエスを「この方こそ神の子であると証しした」(1・34)わけですが、ヨハネが人々に「見よ」と言い、「この方こそ神の子である」と証ししたのはなぜでしょうか。

もちろん、人々の心をイエスに向けさせ、イエスの声に聞き従うように促すためです。わたしたちにも、洗礼者ヨハネの「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」という声が、「この方こそ神の子であると証しした」という声が、響いているのでしょうか。

もし、今日の出来事を自分にも向けられていると受け止めて、洗礼者ヨハネの「見よ」という声、「この方こそ神の子である」という声に耳を傾けているなら、今の社会にあってどのようにこの招きに答えたらよいだろうかと考える必要があります。

なぜなら、わたしたちは「見よ」というその方を見ることができませんし、「この方こそ神の子である」というその方とじかに接することもできません。何かの形で、似たような体験を積む必要があります。

わたしには、自分に向けられた声で今も思い出される声があります。以前もそのような話をしたことがあるかも知れません。その一つに、滑石教会の助任をしていたときの体験があります。滑石教会は、ふくれあがった信徒数に対して教会堂が手狭になり、信徒数に見合った教会堂を建てる必要が生じていました。

わたしが奉仕していた時代にも真剣にそのことが話し合われていましたが、実現したのはそれから10年経ってからでした。当時の主任神父さまは口酸っぱく、次のようにわたしに話していました。「教会はどうやって建てるか分かるか？教会は、祈らなければ建たないんだぞ。」

実際には方言丸出しだったのですが、その声は今でもわたしの中で響いています。あの時からすでに16年が経過していますが、当時の主任神父さまの声は、今もはっきりと聞こえ、わたしに何かを実行させようとするときに聞こえてくるのです。「その計画のために、あなたはどれだけ祈っているか？またその教会の信徒はどれだけ祈っているか？」と。

ですから、わたしたちが洗礼者ヨハネの「見よ」と指さした場所はどこだろうか真剣に考えるならば、その指さした場所にきっと気がつくと思います。その場所にはイエス・キリストがおられ、そこで「わたしについてきなさい」という招きを見つけるのではないのでしょうか。

たとえばそれは、黙想会の機会かも知れません。黙想会に参加することで、「見よ」という方向をしっかりと示していただけるかも知れません。わたしでなくても、家族が気付いて、何をすればよいのか理解するかも知れません。すると、今の時代にもヨハネの声は響いていて、イエス・キリストの方向を向くことができるし、イエスに聞き従うことができるということです。

洗礼者ヨハネが指し示した方はただ一人、イエス・キリストです。わたしたちが聞き従うべきも、イエス・キリストただ一人です。この基準に生活を合わせていきましょう。そのために必要な知恵を、ミサの中で願いましょう。

## 年間第3主日 (マタイ 4:12-23)

イエスと出会うためにあなたは何を選ぶか



年間第3主日に入りました。灰の水曜日から始まる四旬節までの、短い年間の期間です。今週の福音朗読から、「イエスと出会うために、あなたは何をしますか」ということを考えてみたいと思います。

皆さんは方向感覚に自身はおありでしょうか。わたしは方向音痴のようで、全く自信がありません。高校卒業してすぐに佐世保の親戚の家に下宿し、自動車学校に通いましたが、自動車学校の入学手続きをしに行った初日に迷子になり、真夜中に親戚のおじさんおばさんに見つけてもらったことがありました。大変心配をかけました。

苦い経験から学んだことがあります。待ち合わせをするとき、相手とうまく合流できないこともあるでしょう。合流できないのは2つの場合が考えられます。その1つ、自分が場所を指定して相手がたどり着けない場合、相手の人に「動かずに待っていてください」とお願いします。

反対に、相手が場所を指定していて、わたしがそこにたどり着けないときは、わたしのいる場所を伝えてわたしが動かないことにします。こうすれば、時間はかかるかもしれませんが、きっと迷子の側は見つけてもらって、合流できるはずです。

さてイエスは、イスラエル北部のガリラヤからご自分の活動を開始されました。今日の朗読によると、ガリラヤ周辺の町は、「暗闇」とか「死の陰の地」と表現され、そこに住む人々もマイナスのイメージで受け止められていたようです。

そこへ、イエスが光として現れてくださいました。光であるイエスと出会うことで、「暗闇に住む民」「死の陰の地に住む者」に光が射し込みました。イエスと出会うことがなければ、この地の民にいつまでも光は射し込まなかったでしょう。預言も実現しないままになります。

ですから、イエスと出会うことが、すべての始まりでした。それは、わたしたちも同じことなのだと思います。そして、イエスと出会うために、わたしたちは何かを選ばなければならないのです。この際、初めに考えた日常の体験が役に立つと思います。イエスと出会うために、わたしたちが行動に打って出るか、わたしたちの方はじっとしてイエスに見つけ出してもらおうか、どちらかを選ぶということです。

宣教開始を語る今日の朗読箇所は、イエスが積極的に動いて回る様子が描かれています。「悔い改めよ。天の国は近づいた」(4・17)と声を上げ、四人の漁師に声をかけるのもイエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられましたし、「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」(4・23)と結んでいます。積極的に動いて回って、見つけてもらわなければならない人々を見つけて出しているのです。

一方で、イエスはじっと待っていることもあります。サマリアの女が井戸に水を汲みに来て、イエスに声をかけられ、イエスとの出会

いを手にした話（ヨハネによる福音書第4章）を、皆さんご存じかもしれません。この女性は、井戸に佇んでいるイエスに出会って、いのちの水をいただきました。

また、黙示録では「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」（黙3・20）とあります。イエスはあるときは戸口に立って、心の扉を開いてくれるのをずっと待っています。

または、イエスが十字架にかけられ、いのちをささげる場面も、ご自身は全く動くことなく、すべての人を引き寄せて救いにあずかせようとしています。百人隊長はこの十字架上のイエスの姿を見て、「本当に、この人は神の子だった」（マタイ27・54）と言い残しました。

イエスは、わたしたちと出会うために、あらゆることをなさいます。ガリラヤで伝道を始め、四人の漁師を弟子にして、おびただしい病人をいやしました。あるときはこのように動き回ってわたしたちと出会おうとします。またあるときは、わたしたちが通るであろう道の途中に立って、じっとそのときを待ち、出会ってくださいます。

イエスはあらゆる手段を尽くしてくださいますが、わたしたちはどうでしょうか。イエスに出会うために、「動いてみよう」と考えるでしょうか。あるいは「じっと待とう」と考えるでしょうか。

人がイエスと出会うためにどちらを選ぶかは、その人の向き不向きや、置かれた生活に左右されます。わたしはどんなに準備をしても迷子になったり失敗するので、じっと待った方がイエスに出会えるかもしれないと思っています。じっと待っているといっても、何もしないのではなく、自分の生活を続けながら、心に響く声に深く耳を傾けて、語りかける声を拾うと言ったらよいでしょうか。

ある人は、積極的に打って出ることでイエスと出会えるかもしれません。大胆に、イエスのことを人々に話して聞かせる中で、イエスがそばにいてくれて、自分を力づけたり、励ましたりしてくれるのを感じる場面があるかもしれません。こんな人は、動き出すことでイエスと出会える人だと思います。

どちらの場合も、イエスと出会うことは何より大切なこととなります。イエスと出会うことで、わたしたちは光に触れ、光を感じ、光に照らされるからです。イエスという光がわたしたちに射し込むことで、わたしたちは照らされて生きる光の子になれます。

イエスはいよいよ、人々と出会い、救いを告げ知らせる宣教に打って出ました。わたしたちも自分にできる行動に打って出しましょう。心静かに待つことを選んだ人は、毎日の生活を重ねながら、「主よ来て語りかけてください」と願いましょう。活動の場に飛び込もうと決めた人は、そこで待っておられるイエスと出会わせてくださいと願いましょう。わたしたちの生活はいつも、イエスと出会うことで輝きを増すのです。



## 主の奉獻 (ルカ 2:22-40)

主の奉獻に倣ってわたしたち自身を奉獻する

主の奉獻の祝日を迎えました。今週の福音を「主の奉獻に倣ってわたしたち自身を奉獻する」とまとめたいと思います。イエスの神殿奉獻から、わたしたち自身に求められる態度を拾うことにしましょう。

今回この説教を準備していて、「主の奉獻の説教って毎年準備していたかなあ」と思って調べていたら、説明が「カトリック中央協議会ホームページ」に掲載されていました。次のようにあります。

「主の奉獻の祝日は、イエスが生まれてから 40 日後に律法の定めに従って両親によって神殿でささげられたことを記念します (ルカ 2・22-40、レビ 12 章参照)。これに基づいて、主の降誕の祭日 (12 月 25 日) から 40 日目の 2 月 2 日に祝われています。(以下省略)」納得できました。2 月 2 日と日曜日が重なった年だけ説教を書いていたわけです。

ちなみに 11 世紀からは、この日にろうそくの祝福が加えられたとあります。今年は忘れましたが、来年覚えていたら、「主の奉獻の日に、合わせてろうそくの祝福をします」と呼びかけたいと思います。

昨年末に生活習慣病予防検診を受けましたが、その結果が最近郵送されてきました。病気を 3 つもらいました。「肝機能障害」「高脂血症」「高尿酸血症」です。精密検査に行くようにと紹介状も添えられていました。「あーしょうかい」と思いました。今回の病気の原因は、食べ過ぎと運動不足です。原因は明白ですから、課題を克服したいです。

歩くということでは、以前よりもはるかに歩くようになりました。「あそこは歩いて行ける場所ではない」と思っていたような場所にも、歩いて往復するようになりました。先日は、浜串教会から佐野原教会まで歩いて往復しました。途中のエネルギー補給のために「かんころ餅」を持って歩き、20km ちょっとなりましたが、4 時間で往復しました。

福音の学びを得ることにしましょう。わたしが注目したのは、「イエスの両親がモーセの律法に定められたことを果たすために行動し、その中でまったく予想もしなかった光景を目にした」ということです。

ヨセフとマリアは信仰篤い人でしたので、律法で定められていることを忠実に果たそうと神殿に赴いたのでした。律法に定められた通りにわが子を主に献げ、いけにえとして動物を献げました。定められたことを忠実に果たした 2 人にとって、予想通りに出来事は終わるはずでした。

ところが、ヨセフとマリアが抱いて連れてきたイエスをシメオンという預言者が腕に抱き、予想もできない言葉で神をたたえるのを聞いたのです。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」 (2・29-32)

預言者シメオンは「正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメ

シアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。」  
(2・25-26) という人物です。

彼が「イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた」のは、イスラエルが救われるのを待ち望んでいたということでしょう。彼もまた、律法の定めを忠実に果たす中で救いを待ち望んでいたのですが、両親に抱かれたイエスと出会い、まったく違う道を知ったのです。「律法によって救われる道」ではなく、「イエスによって救われる道」です。

シメオンは「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた」とあります。律法の定めに従ってわが子を神殿に奉献する親子はこれまで数え切れないほどシメオンの前を通り過ぎたことでしょう。けれどもそうした親子によってはシメオンが慰めを得ることはなかったのです。

ところが聖家族がやってきたとき、「まことの救い」を見たのです。彼には聖霊がとどまっていました。両親の腕に抱きかかえられているイエスによってイスラエルの民は救われる。イスラエルの民だけでなく、異邦人を含む万民が、イエスによって救われると確信したのです。

イエスの両親、マリアとヨセフの驚きについても考えてみましょう。両親は、幼子についてのシメオンの言葉に驚きました。2人は幼子に、律法の定めを果たしに神殿に来ました。彼らも、律法によって人は救われるという「律法によって救われる道」しか知らなかったからです。

けれどもシメオンの言葉によって、「わが子イエスによって救われる道」があることを知ったのです。しかも、「イエスによって救われる道」しか、シメオンを慰めることはできなかったことを知ったのです。

わたしたちも、今日の主の奉献を通して、慰め多い人生について考える必要があります。わたしたちに与えられている掟はさまざまありますが、「掟によって救われる道」だけを考えると、シメオンのように慰められる日をいつまでもいつまでも待たなければなりません。

そうではなく、「イエスによって救われる道」をわたしたちが受け入れるなら、わたしたちの手に慰め多い人生が与えられることとなります。「イエスによって救われる道」は、時としてゆるせない人をゆるしたり、愛せない人を愛したりすることが必要となります。

もちろん、「イエスによって救われる道」を固く信じていても、わたしたちの確信を揺さぶろうとする試練は何度も訪れるでしょう。シメオンも「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています」(2・34)と預言しているからです。

それでも、わたしたちは「イエスによって救われる道」を選ぶべきです。イエスはわたしたちの希望を裏切らないからです。イエスはわたしたちのために、ご自身によって救われる道を完成させようと神殿でみずからをいけにえになさったのです。

「イエスによって救われる道」をまっすぐに見つめて信仰生活を続けましょう。掟に縛られないイエスの愛に倣って生きていきましょう。この生き方が、神に対するわたしたちの奉献生活なのだと思います。

年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)



## 年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)

わたしたちの持つ「塩」は社会に化学変化を起こす

今週は「わたしたちの持つ『塩』は社会に化学変化を起こす」とまとめたいと思います。中学校高校時代、わたしはにずっと疑問に思っていることがありました。「今勉強していることは、大人になっても使わないのに、なぜ勉強しなければならないのだろうか」ということです。

教会の主任司祭になって、1千万円以上のお金を管理することも出て来ましたが、それでも連立方程式とか因数分解とか、予算決算を立てるにあたって必要ないといえれば必要ありません。また外国人と会話することがなければ、英語もほとんど必要ないです。英語の弁論大会とか、聞いている生徒のほとんどが理解していないのにバカげている、とさえ思っていました。目標もない勉強は無意味だと思ふことがありました。

ところが、48歳になろうとしている今、さまざまな体験を積む中で、どの分野の勉強も無駄ではないと分かりました。いつかハウステンボスに行くことがある中学生高校生に、一つの体験を紹介しておきます。

わたしがハウステンボスのあるお土産品店にいたときのことです。アジア系の観光客が「英語話せますか」と聞いてきて、「このカメラで、この店の様子をバックにわたしを撮影してほしい」とお願いされたのです。やりとりはすべて英語です。

そこでわたしは、「構いませんよ」と答えて、そのアジア系の外国人をカメラで撮影してあげました。この出来事の中には、3つのことが含まれています。1つは彼がわたしのことを「この人は英語が話せるだろう」と思ったことです。2つめは「この人は自分が英語で要求していることを、聞き取れるだろう」と考えたことです。最後は、「自分の求めを拒否しないで引き受けてくれそうだな」ということです。

外国人は、まったく頼めそうにない日本人には声を掛けないでしょう。少なくとも「話せそうだな」「聞き取りができそうだな」「要求に応じてくれそうだな」この3つをわたしに見て取ったので、声を掛けたのです。これは英語の問題だけでなく、数学の因数分解でもあります。この体験から最低限これだけは取り出せる、その技術も役に立ったわけです。

さらに今日、化学（かがく・ばけがく）についても話したいと思います。高校時代に、これこそ無駄の真骨頂だと思ったのが化学（かがく・ばけがく）でした。社会のどこに化学が存在するのか？わたしにはまったく理解できなかつたからです。

けれども、司祭になって自炊してすぐに気づきました。料理は言わば化学です。釣りたての魚が、今日食べるのがおいしいか、明日まで待って食べたほうがおいしいか。化学変化がそこにはあるのです。調味料も化学変化を起こす魔法の道具です。たとえば塩は、料理に対してほんのわずか、ひとつまみに過ぎない量しか加えなくても、おいしさを引き立てるのです。1グラムの4分の1とかで、化学変化を起こすのです。

こんなことを考えるようになって、「あー、学校で勉強しなかつた

ことが、今になって必要になるなんて」と後悔しています。教科書通りに必要になるとは限りませんが、数学も化学も物理も、わたしが遠ざけてきたものが身近なところで物事を考える役に立つのだなあと思うと、学生時代何とまあ無駄な過ごし方をしたのだろうと思うのです。

福音朗読では、「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」と言っています。わたしたちがこの世に対して「塩」であるなら、社会に対して「化学変化」を起こせるということになります。1グラムの何分の一、もしかしたら一万分の一であっても、わたしたちの行動は社会に化学変化を起こす力を持っているということです。

水は爆発しませんが、水を電気分解して発生する水素は爆発します。水素と結合している酸素も、物が発火するのに欠かせません。わたしたちカトリック信者は、二万数千人の上五島の人口の中で何分の一に過ぎないかも知れません。けれども、化学変化を起こすには十分な人数です。

日本の人口に対して、カトリック信者の数はそれこそ百分の一とか、それ以下かも知れません。けれども、わたしたちは地の塩であり、かならず、味を感じさせることはできるはずなのです。もっと言えば、日本人全体に化学変化を起こす力を十分持っているはずなのです。

その、化学変化を起こすための条件を、イエスは教えてくれています。「塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられようか。」(5・13)「塩気を常に保ち続けること」これが、対象となる物に対して化学変化を起こす条件だということです。

わたしたちカトリック信者が、カトリックでない人々に対して塩気を感じさせるとはどういうことでしょうか。何でもまかり通る世の中であって、神はこのような生き方や振る舞いをお認めにならないと、きっぱり言うことのできる人々がそこにいるということです。

ほかに、「いのちは大切である」と知っていても、日本では「いのちの始まりから大切だ」とは言いません。日本の法律も、「いのちの始まりからいのちに手をかけてはいけない」と書かれていません。そんな日本であって、「いのちはその始まりから大切だ。神がいのちを授けてくださったからだ」ときっぱりと言うことのできる人々がいる。それはカトリック信徒でない日本の人々に、塩味を感じさせることなのです。

わたしたちがカトリック信者としてイエス・キリストの望みに生活で応えようとするなら、もっと大きなことが起こるかも知れません。カトリックでない人の中に、「何でもまかり通るわけではないのだな」とか「いのちは、始まりの瞬間から大切なのだな」という実感が湧いてくるようになれば、それはわたしたちの働きが大きな化学変化を起こしたことになるのです。

化学工場の爆発はとてつもない被害を及ぼしますが、わたしたちカトリック信者が起こす化学変化、爆発は、とてつもない良い影響を及ぼすのです。わたしたちに与えられている「イエス・キリスト」という大切な塩を用いて、社会に変化を与える人となりましょう。そのための恵みを、このミサの中で祈りましょう。



## 年間第 6 主日 (マタイ 5:17-37)

イエス・キリストというピースを埋めて人の一生は完成する

今週の福音朗読のまとめとして、「イエス・キリストというピースを埋めて人の一生は完成する」としたいと思います。(わたしたちの人生に起きるさまざまな場面はどこかできちんと繋がっているのですが、人生をパズルにたとえるなら「イエス・キリスト」というピースがあって初めてすべに説明がつき、すべてが意味あるものになるということです。)

いよいよ、およそ 100 キロの徒歩巡礼が明日から始まります。このあと鯛ノ浦 11 時発の船で長崎に移動し、明日の朝、国宝大浦天主堂で巡礼に参加する神父さま 6 人でミサをして、朝 8 時に大浦を出発します。予定では 3 日かけて福岡県三井郡大刀洗町にある今村教会に到着となっています。無事に帰ることができるように、お祈りください。

教会入り口に貼り付けた巡礼コース表は御覧になったでしょうか。浦上のキリシタンが自分たちの信仰をプチジャン神父に「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ」と表明した 2 年後の 1867 年に、浦上キリシタンたちは今村のキリシタンを確かめに行きました。彼らは「長崎ではフランス人宣教師が入っている。宣教師の居留地内には教会も建てられている。宣教師から教えを受けることもできるし秘跡を授けてもらうこともできる」と伝えに行ったのでした。

今村のキリシタンにも、長崎のキリシタン同様正統信仰が誤りなく保たれていたのですが、外国に港を開いた長崎は外国人居留地に宣教師がやってきて、正統信仰を確認してもらうことができたのに対し、その他の地域では宣教師は移動が制限され、入ることは叶いませんでした。

もし勇氣あるキリシタンが長崎の状況を伝えに行ってくれなかったら、外国人居留地から遠く離れた人々はカトリック教会に復帰できなかったかも知れません。命がけで守り抜いてきた人々の信仰を宣教師が正しいものと確認する。この 1 つの作業、1 つの部品が欠けるだけで、260 年もの間奇跡的に守り抜いてきた信仰がバラバラになってしまう危険もあったのです。

今週選ばれた朗読箇所ではイエスは律法について次のように仰いました。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、とってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」(5・17)

イエスが律法を完成させるとはどういうことでしょうか。わたしは、イエスが律法と預言の書すべてをつなぎ止める鍵を持っておいでになった、というふうに考えてみました。

つなぐものがなければバラバラになる。材料をつなぐのにどうしても必要なものがあるように、イエスは律法と預言書がバラバラにならないようにつなぎ止めるのに必要な鍵として、おいでになったのです。

イエスが宣教活動をしていた当時、律法はバラバラになりかけていました。それぞれの掟が、どのように結びついて、全体として人を神へ

と向かわせるものなのか、あるべき姿を失っていました。そのことを見事に表しているのが律法学者の次の質問です。

「そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。』」（マタイ 22・35-36）どれが第一となって、律法がしっかり組み合わされてわたしたちを活かす掟となっているのか、彼らは見失っていたのです。

今日の福音朗読の中にも律法がバラバラになっているさまがあちこち見られます。「殺してはならない」という掟は理解していても、それが「兄弟に腹を立てる」「ばかと言う」「愚か者と言う」それらと実は繋がっていることは理解していなかったのです。それに似たことが今週の朗読にいくつも紹介されています。

これに対し、イエスははっきりと、ご自分が律法と預言書の要の石、すべてを一つにつなぎ合わせる鍵であることをお示しになりました。しかも、とてもわかりやすい言葉でお示しになりました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」（同 22・37,39）イエスが、律法のすべてをつなぐ鍵となってくださり、律法は完成されました。

もっと言えば、イエスはすべてのものを一つにつなぎ合わせ、完成する鍵です。わたしたちの人生の一つ一つの出来事を意味あるものにつなぎ合わせてくれるもの、それは運命とか偶然とかではなくて、イエス・キリストなのです。都合の良い出来事には自分なりの意味を見つけるかも知れませんが、説明のつかないこと、ほかの人には降りかかっていない災難など、すべてを意味のあるものにしてくれるのは人間の力では到底不可能です。イエスはそれらをすべてにつなぎ合わせ、わたしの人生の中で意味のあるものにしてくださいます。

わたしは明日から、徒歩巡礼の旅に出ます。260年の迫害に耐えて信仰を密かに守り、子孫に伝えた苦労は、どんな言葉でも説明し尽くすことはできないと思います。ですが、「司祭が今わたしたちに与えられた。イエスはわたしたちの苦しみを忘れてはおられなかった」この体験は、浦上キリシタンの苦しみ、涙をつなぎ合わせ、意味のあるものにしてくれたのではないのでしょうか。そのことをだれよりもよく分かっていた浦上のキリシタンは、熱意に駆られて今村に飛んでいったのだと思います。100キロ近く歩いて、わたしも「苦労をすべて意味のあるものにつなぎ合わせるのはイエス・キリストしかいない」ということを学んで帰ってきたいと思います。

皆さんお一人お一人の人生も、何かでつなぎ合わされて一つにまとまるのだと思います。あなたの人生の喜びや悲しみをつなぎ合わせるものは何でしょうか。お金や出世やそのほかの優越感でしょうか。それらはいつかわたしにとって意味のないものになるのではないのでしょうか。イエス・キリストこそ、わたしの人生を完成させるかけがえのない要石であることを確認しましょう。そして「完成させるためにやってきたイエス」を、人々に告げ知らせる勇気を、このミサの中で願いましょう。



## 年間第 7 主日 (マタイ 5:38-48)

イエスの教えは困難な道を選んででも伝える価値がある

無事に、国宝大浦天主堂から福岡県大刀洗町の今村教会まで徒歩巡礼を終えてきました。わたしの体はけっこう頑丈なようで、100キロの徒歩巡礼から戻って金曜日にはミニバレーに参加できるくらいに回復していました。

そうは言っても、ちょうど時の悪天候で、初日と二日目は雨と風にずいぶん苦しめられました。雨対策でカッパを着て歩いたのですが、正面から雨が当たって体温が奪われ、宿泊先に着くまでみんな必死の思いで歩を進めました。

初日こそおしゃべりしながら歩いていましたが、二日目からはだれも一言も口をきかず、黙々と歩いたのです。かかとの内側におせちの黒豆くらいの靴擦れができて、内心は痛い痛いと言えたかったのですが、それぞれ何かしら痛みを抱えて歩いている中で、だれにも訴えることができませんでした。そもそも、足の痛みを主張してもだれも相手にしてくれなかったかも知れません。

まあそんな中で歩き通しましたが、三日目の30キロを超えたあたりで、今回の計画を立てた先輩の神父さま（この人が今村教会の前任の主任神父さまです）から「もうすぐだよ」と教えてもらったときにはどんなにありがたかったことでしょう。みんな元気を取り戻しました。

ところが、もう少しと声がかかってからなお2キロほど歩くと、広い田んぼの道に入りまして、「あれが今村教会」と言われた方角を見るとたしかにレンガ造りで二つの塔がそびえ立つ壮麗な教会が見えました。しかし、広い田んぼの中で見えた教会にしばらく歩いても近づきません。場所が分かっているのに歩いても歩いても近づかないのは、長い距離を歩くよりもはるかに疲れました。

到着すると、今村教会では100人くらいの人が出迎えてくれました。平日にもかかわらず、こんなにたくさんの方が五島の神父たちを出迎えてくれたことが嬉しくて、歩いてきてよかったなあ実感しました。

国宝大浦天主堂を出発するとき、ミサをささげて出発しましたが、到着した今村教会でも、無事にたどり着けたことを感謝して、集まっている信徒やシスターとミサをささげました。巡礼が、ミサに始まってミサに終わるといえるのはすばらしい体験です。

余談ですが、もし何か話をする場面が与えられたらどう言おうかと、三日目の巡礼中考えながら歩いていました。「わたしたちは何のために、この巡礼を計画し、実行したのか」ということです。それは、約150年前の浦上キリシタンが何のために今村まで歩いたのかを考えることでもありました。

今週の福音にその答えを求めてみました。何のために今村まで歩いたのか。それは、イエス・キリストのみことばが真実であることを知らせるためです。260年間、キリシタンたちは「敵を愛し、自分を迫害す

る者のために祈りなさい」(5・44)とのみことばに生きてきました。その態度が間違っていなかったことを、今こそ知らせるために、浦上のキリシタンたちは今村へ行ったのだと思います。

「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。」(5・46)「自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。」(5・47)自分を愛してくれない人を愛し、すべての人に平和があるように挨拶して今日まで生きのびてきたことが間違っていなかったと、浦上の人々は知らせに行ったのだと思います。

では振り返って、一日30キロずつ歩いたわたしたちは、今村教会にたどり着いたときに何を知らせに行ったのでしょうか。キリスト者として現代に生きることは間違っていないと、伝えることができたでしょうか。

当時の人々とまったく同じではないかも知れませんが、「わたしたちは、迎えてくださった今村の皆さんと同じ信仰を持っています。」そういう気持ちは伝えることができたかなと思います。

あるいはこう言い換えることができるかも知れませんが、「三日前に、大浦天主堂でミサをささげましたが、100キロ歩いて今日は今村教会で皆さんと一緒にミサをささげることができます。」迫害を生きた先祖をもつ者同士、敵をも愛してきた者同士、同じ祈りで、同じ礼拝で感謝をささげることができる。その喜びは分かち合うことができたと思います。

今回今村教会まで巡礼して、皆さんにこうして説教の中で話しながら、どうしても一つ足りないと思いました。浦上のキリシタンたちは今村に行って同じ迫害を耐え抜いた信仰の共を得たあと、また大浦まで歩いて帰ってきたのです。

わたしたちは、帰り道は車で2時間、あっという間に帰り着きました。もちろん国宝大浦天主堂に戻ってきて感謝の祈りをささげて解散しましたが、当時の浦上キリシタンは歩いて帰ってきたのです。しかも、長崎で起こっていること、フランス人宣教師が来崎していること、宣教師が建てた教会があることをその目で確かめてもらうために、今村のキリシタン2人を伴って戻ってきたのです。

それが来年実現できるかどうかは分かりませんが、少なくともわたしは、帰り道を帰ってきて、ようやくこの大きな計画は完成すると感じました。幸いに足の状態を含め体のどこにも故障が来ていませので、次は今村から出発して、国宝大浦天主堂まで歩きたいと思います。

大浦から今村まで車であれば2時間、あっという間に着きます。その距離を三日かけて歩いてみて、イエス・キリストを伝えることは、いちばん困難な方法を選んだとしても伝えに行くだけの価値があることを学びました。「復讐してはならない」「敵を愛しなさい」イエスが命じた戒めは、いちばん困難な道を選んだとしても伝える価値があります。あなたはそれを、だれに伝えますか。わたしは、出会った人すべてに、少しでも伝わるように、人生のすべてを賭けて生きてみたいと思います。



## 年間第 8 主日 (マタイ 6:24-34)

あなたは、神と富とに仕えることはできない

長崎教区にとって、また個人的には中田神父にとって恩人である道向 栄神父さまが 2 月 26 日肺炎で亡くなりました。87 歳でした。今週の福音朗読と重ね合わせながら、今日は恩人の神父さまを偲びたいと思います。

郷里の鯛ノ浦教会に残されている台帳を調べると、わたしに洗礼を授けてくれたのは山内 豊神父さまでした。けれども、わたしの記憶の中には、山内神父さまのことは何もなくて、小さい頃の神父さまというよりは、この亡くなられた道向神父さまということになります。

神父さまは鯛ノ浦にいたときは病院に通院するというので海上タクシーで若松に渡っていました。その時わたしも海上タクシーに乗せてもらったりした覚えがあります。

また侍者は、クリスマスにご褒美で 5 百円札をもらっていました。結婚式の侍者や葬式の侍者のときにも特別手当で 5 百円札をもらっていたと思います。そうやって機会があれば呼び出されて手伝いをしていたおかげで、神父さまという生き方に親しく触れることができました。

6 年生の時、2 通りの神学生の募集が回ってきました。1 つは、当時大分教区の司教さまだった平山司教さまが、上五島と下五島をくまなく回って募集していました。司教さまなんて滅多にお目にかかることはないわけで、「あなたもうちの神学生になりませんか」と、指輪をはめて赤い帽子と赤い帯をした立派な身なりをした人から誘われたものから、「いいなあ」と一瞬思いました。

そこへ道向神父さまが割って入りまして、「ダメダメ。この子は長崎教区の神学生にやるとやけん」と言っておられたのを覚えています。道向神父さまの賢明な判断があったと感じています。

その後、教区の神学校の校長先生が募集においでになり、当時の校長であった浜崎 渡神父さまから「ぜひ神学校においでなさい。これを学用品の足しにしなさい」と言われて、ここでも 5 百円札を受け取りました。最終的にこの 5 百円札が決め手となり、神学校に入学したのでした。

神学校に入学してからも、休暇に入ると司祭館に真っ先に挨拶に行き、休暇中は何があっても毎日ミサに行き、聖書朗読やそのほかの典礼の手伝いをさせられました。信心業についてはことさら厳しい神父さまでしたので、神学校にいるときよりも、休暇中に道向神父さまにしごかれるほうがきつかったかも知れません。

そうやって召し出しの最初の時期を過ごしましたが、道向神父さまはわたしが高校生になった年に、佐世保の鹿子前教会に転勤していきました。すると鯛ノ浦の神学生は長崎から佐世保経由で鹿子前に立ち寄ってから休暇に入るようになりました。さらに大神学院の神学生になっても、道向神父さまの導きをもらいながら育ったと言ってもよいと思います。その中に、今日の福音に繋がるさまざまなお話をいただきました。

たくさん学ばせていただきましたが、それはもしかしたら、「よく考えたら」という条件付きだったかも知れません。わたしが見た範囲で、道向神父さまが乗っていた車は晩年を除いてはマーク two でした。コマーシャルではないですが、「いつかはマーク two」と思ったものでした。

行った先行った先で司祭館を作り替えました。場合によっては教会とどっちが大きいかなあという司祭館に見えました。神学生は来客用の応接間ではなく、執務室に通されましたが、そのときどきの最新の家電がずらっと並び、圧倒されました。

ただ一方では、信心をおろそかにすることは決してありませんでした。その姿を見ながら、「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」(6・24) というみことばをしみじみ考えることになりました。

神学生として教会の手伝いを丸一日すれば、その間に司祭館で食事もいただくこともありました。司祭館の食事は、目を見張る内容で、「こんなの食べたことないなあ」と思いながら出されたものをほおぼりました。後で考えてみると、鯛ノ浦の時代から足が痛いと言っていたのですが、痛風の症状があったのかも知れません。

食事をいただくたびに驚きの連続でしたが、「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。」(6・25) というみことばは、わたしにとってはどこか遠い場所で起こっているのではなくて、すぐ目の前で起こっていることでした。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(6・33) このみことばで道向神父さまのことが偲ばれるのは、常に赴任した教会で信徒の動きを把握していたということです。当時パソコンもワープロもなかった時代に、ガリ版印刷で教会の全世帯の記録を印刷したものを資料として用意してわたしたちに見せてくれていました。どんなに小さな出来事でも、その資料を見れば一目瞭然でした。

神の国がどのようにこの小教区で根付き、育っていくのか。それぞれの信徒がどのような霊的状态にあって、どんなお世話を必要としているのか。いつも綿密に調べ上げて資料に残していました。大変に筆まめで、どんなことにも必ず返事をくださり、それはもうまねのできない細やかさでした。結論としては、すべてが神さまから与えられ、すべてを神さまに委ねていけばよいと、心から信じている神父さまでした。

「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」(6・34) 道向神父さま、ゆっくりお休みください。明日の長崎教区のこと、明日を担う世代が思い悩み、悩み抜いて舵を切ります。神父さまの今日までの苦労は、十分神さまに知られています。どうか、鯛ノ浦から送り出した出来の悪い後輩司祭のために、神さまに取り次ぎをお願いします。



## 四旬節第 1 主日 (マタイ 4:1-11)

「〇〇したらどうだ」に乗ってはいけない

灰の水曜日を経て四旬節に入りました。この期間を「神との絆を確かめる日々」とするため、朗読された福音に目を留めたいと思います。

2月の最後の週でしたか、長崎に出かけていたときのこと、司祭館からケータイに電話がかかって、賄いのシスターが「中田神父さまに用事のある人が来ています。電話を代わります」と繋いできました。電話に出たのは見知らぬ声の人で、「自分は船外機を買い取りに来た。9.8馬力の船外機を売ってください。」と話しています。

船外機を売ってくれと言う電話の相手は、わたしには最近はやりの「押し買い」にしか聞こえませんでしたので、「きっぱり断る」と伝えました。わたしの毅然とした態度に「交渉の余地がない」と思ったのか、すぐにその人は引き下がり、わたしが電話を切って終わりました。

これは間違いなく、わたしがボートをまったく動かさないからこのような隙を突かれるのであって、一刻も早く船を海に浮かべ、アラカブ（カサゴ）釣りに行かなければならないと感じました。それでご苦労ですが、この話を聞いたお父さんたちの中でどなたか、わたしのボートを降ろして係船場に繋いでおいてほしいと思います。天候を見て、すぐに今年の最初の釣りに出かけたと思います。よろしくお願いします。

四旬節第 1 主日は、A B C 3 年周期のどの年もイエスが悪魔から誘惑を受ける場面が選ばれます。悪魔は三度、イエスを試みるわけですが、その誘惑の言葉は、共通した特徴があるようです。

マタイ福音書第 4 章、悪魔の最初の誘惑は「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」(4・3) となっています。二度目の誘惑は「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」(4・6) です。三度目は「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら」(4・9) と言っています。

共通する特徴があると言いましたが、共通点にお気づきになったでしょうか。わたしが共通すると見て取ったのは、「悪魔の誘惑に、自発的に応答させようとしている」という点です。悪魔は巧みにイエスを罠に引きずり込もうとしますが、この誘惑によってイエスがもし過ちを犯すとすれば、自発的に応答したときだということです。

このやりとりは、わたしたちにも当てはまります。わたしたちが罪を犯し、悪に引き込まれるのは、自発的に誘惑に応答したときなのです。イエスは今日の誘惑の場面で、いっさいの自発的応答をしませんでした。石がパンになるように命じなかったし、飛び降りなかったし、悪魔をひれ伏して拝むこともしなかったのです。

ついでの話ですが、悪い事柄を、悪いと知りつつ、自発的に行ったときに罪を犯すのであって、たとえば自発的にしなかった場合は罪が成り立っていないということをよくよく分かってほしいと思います。

具体的に言いますが、具合が悪くて日曜日のミサに行きませんでしたとか、入院していて日曜日のミサに行きませんでしたというのは、罪

として成り立っていないのです。浜串小教区に来て、告解場に座って皆さんの告白を聞きながら、「具合が悪くてミサに行きませんでした」「入院していてミサに行きませんでした」と耳にタコができるほど聞かされましたが、罪が成り立っていないのです。

深酒して、日曜日のミサに行けなかった。これは罪になります。度を過ぎた飲酒が、どんな結果をもたらすか、おおよそのことは分かっているが、それでもあえて深酒してミサに行けなくなっているからです。

通常の生活の中で、朝起きられないほど熱があつてミサに行けなかった。この人のどこが、悪いと知りつつ、自発的にミサに行かなかったことになるのでしょうか。詳しく説明したのですから、今日以降に「具合が悪くて・・・」と告解場と言う人がいるなら、それこそ具合が悪くなるくらいの量の祈りをわたしが命じます。覚悟しておいてください。

もう一度福音朗読に戻りましょう。悪魔はあえてイエスに三度も誘惑を仕掛けました。それは、イエスから、御父との絆を自発的に断ち切らせようとするためです。悪魔の誘惑に、自発的に応答する態度を引き出させて、御父と御子の絆を断ち切らせようとしているのです。

イエスは、悪魔の罠にいっさい手を染めませんでした。イエスが見せた姿は、ご自身の御父に対する揺るぎない信頼を示すためだけではありません。わたしたちに、それぞれの生活の中で神との絆を断ち切ってはいけない、その模範を示すためでもありました。

急に体調をこわして日常の信仰の務めを果たせないといったことをこれまでに経験したかも知れません。いつも休まずにミサに通っていたのに、いつも欠かさずに朝夕の祈りを唱えていたのに、ミサに行けなかった、祈りを休んでしまった。そうしたことは気落ちする出来事、自信を失うショックな出来事かも知れません。

突発的な出来事は、わたしたちの神との絆を断ち切ることは決してないのです。しかしもし、どんなに小さな出来事であっても、それが悪いことと知りつつ、自発的に行うなら、神との絆を断ち切る罪です。

わたしはタバコの投げ捨てを何よりも嫌う人間で、自分の前で信号待ちをしている車がタバコを車の外に捨てようものなら、降りて行ってわざわざ捨てたタバコを拾って車の中に投げ返します。心の中ですが、内心は投げ返してやろうかと思うくらいタバコの投げ捨てが嫌いです。

あの行為は、悪い事柄を、悪いと知りつつ、自発的に行っているのですから、神との絆を断ち切る罪なのです。いつだったか司祭館を訪ねてくる通路にタバコを投げ捨てた人がいたので、拾って洋服の中にねじ込んでやろうかと思うほど本当にムカッと来ました。

まあとにかく、お一人お一人の生活から、神との絆を断ち切ろうと悪魔はあの手この手を考えています。わたしたちは、決して挑発に乗って自発的に応答してはいけません。「神の口から出る一つ一つの言葉」により頼み、過ちがあればいつでも「退け、サタン。」というイエスの厳しいことばの前に身を砕き、へりくだりましょう。この四旬節中、神との絆を確かめながら、償いの精神に生きる日々といたしましょう。



## 四旬節第 2 主日 (マタイ 17:1-9)

山でイエスと一致して山を降りる

わたしは一度だけ、イスラエルを巡礼したことがあります。当時は島本大司教さまが、ぜひ青年たちを連れてイスラエルを巡礼したいと計画を発表なさり、各地区から全部で 30 人の青年が選ばれました。

この青年たちに加えて、各地区の若手の司祭たちが同行することになり、当時佐世保地区にいたわたしは、この地区の青年たちの引率として、エルサレムを初めイスラエルのあちこちを約 2 週間にわたって巡礼したのでした。

その中に、今週朗読に選ばれている箇所、主がご変容されたと言われる山が含まれていました。タボル山というのですが、わたしたち巡礼団は、グループに分かれて車に分乗し、山の頂上にある「ご変容の教会」を訪問しました。

イスラエル各地を巡礼する間、いつも欠かさずしていたことがあります。それは、巡礼地にたどり着くたびに、その土地にまつわる聖書の箇所を朗読し、それについて大司教さまが解説を加え、しばらく朗読箇所について黙想することです。

タボル山でも、まさしく今週朗読された箇所を当番の司祭が読み上げ、出来事に思いを馳せたのでした。巡礼に行った当時 30 代前半だったわたしは、ペトロや一緒にいた弟子たちがイエスの姿が変わる様子に息を呑んだように、単純に光景を思い浮かべることしかできませんでした。

もしもう一度、タボル山に登ってご変容の教会で朗読箇所を読めば、もうちょっと違った感想を持つと思います。なぜならイエスの姿が変わったのは、このあと山を降りて行くことと深く関係しているからです。山を降りて、群衆のいる平地での宣教活動に戻る弟子たちに、大切なことを教え、大切なものを与えるためのご変容だからです。

ご変容の瞬間、イエスはご自分の栄光の時が近づいていることを十分感じていました。「顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。」(17・2) その姿は、受難のあとにやって来る復活の栄光の姿でもあったからです。

のちの栄光の姿を山上で弟子たちに見せたのは、このあと弟子たちが山を降りて、これからも続いていく宣教活動、その時受けるであろう迫害、この困難をしっかりと担っていく力を与えたかったのではないのでしょうか。

先週わたしは、イエスが誘惑を受ける場面で、「悪魔の罠にいったい手を染めず」「神との絆を断ち切らないような生活を心がける」こうしたことを話しましたが、今週のイエスの模範はさらに踏み込んで、「神々しさを身にまとうほど御父と一致したわたしがあなたたちに近づいて触れるから、恐れるな」と呼びかけます。

先週はいわば「○○しないように」という消極的な呼びかけでした。今週はより積極的に、御父と深く一致して「顔は太陽のように輝き、服

は光のように白くなった」イエスが触れてくださるから、あなたは恐れることはない。そう励ましておられるのです。

イエスは山に登って御父と深く一致した姿を見せました。山に登るためには、地上での生活を脱ぎ捨て、体一つになって出かける必要があったと思います。また、一致するためには御父が自分のすべてとなる必要があります。この姿を、山を降りて行く弟子たちに見せて、山を降りてからも、イエスの声を聞き、イエスが弟子たちのすべてとなって宣教活動が続いていくよう望まれました。

今週わたしたちの小教区では、一人のお子さんが初聖体を受けます。初聖体は、イエスさまと一致する大切な日です。イエスさまは、御父と一致する姿を示して、わたしたちを招きました。初聖体を受けるお子さんも、イエスさまと一致するためにすべてを横に置いて、イエスさまの前にひざまずいています。

初聖体を受けるお子さんの姿は、わたしたちにももう一度思い起こしてほしい姿です。教会に来て御聖体をいただいてイエスさまと一致する。それは弟子たちがイエスと山に登った姿のようです。イエスと一致する場所である教会に集うために心と体の準備をし、イエスさまと一致した喜びを携えてお御堂という山を降りて、毎日の生活に戻っていくわけです。そこでは、イエスさまをいただいている喜びと感謝を、生活の中で現していくことが期待されています。

恐れている弟子たちに、イエスは触れてくださいました。初聖体を受けるお子さんにとっても、御聖体を拝領する瞬間は「イエスが触れてくださる」瞬間だと思います。イエスが触れてくださると、拝領する前に抱いていたすべての恐れや不安が取り除かれます。わたしたちもまた、御聖体を拝領することでイエスが触れてくださり、抱えている恐れを取り除いてくださるのです。

四旬節を進む中で、イエスはさらに信仰の歩みが進むように招いています。神との絆を断ち切る誘惑を退けることから出発して、今週はより積極的にイエスに一致した喜びと感謝を生活の中で保ち続けるよう期待しています。信仰の積極的な歩みを支えてくれるのはもちろん御聖体の恵みです。

初めて御聖体をいただくお子さんの喜びと感謝を、わたしたちも今週分かち合いましょ。イエスは御聖体にとどまってわたしたちと共にいてくださいます。この真理を生活の中で証しましょ。また黙想会を通して、イエスが共にいて力づけてくださることを体験することにしましょ。



## 四旬節第3主日(ヨハネ 4:5-42)

イエスはあなたに決定的な関わり方をしてくださる

先週は黙想会、ご苦労さまでした。わたしは、黙想会は信仰の畑を耕すまたとない機会だと思っています。黙想会でしっかり畑を耕して、生活に戻ってこれから信仰の種まきをすれば、きっと実を結ぶと思います。ぜひこれからの生活で黙想会の話を活かしてほしいと思います。

四旬節第3主日です。「イエスはあなたに決定的な関わり方をしてくださる」この点について考えてみたいと思います。ヤコブの井戸のそばでイエスは、サマリアの女に対して決定的な影響を与える出会いをなさいます。女性の負担の中でも特に重労働だったであろう水汲みに来た場面で、イエスは「生きた水」について語り始めます。イエスの言葉は、乾いた地に染み込む水のように、女性の心の中に染み込んでいきました。

イエスとサマリアの女の対話から学びを得る切り口として、わたしはサマリアの女の次の言葉に注目してみました。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」この女性はイエスが与えようとする生きた水を十分理解していたわけではないと思いますが、彼女の願う姿は、彼女が心の渴きを癒してくれる人を必要としていることがよく伝わると思うのです。

当時のパレスチナ地方の女性たちは、水くみはどうしても避けられない労働でした。井戸はしばしば遠く、掘られた井戸も深く、できれば避けたい重労働だったでしょう。しかも、この女性は1人の夫のためにこれまで水くみをしてきたのではなく、これまでに5人の夫がいて、その5人に水くみの苦勞を強いられてきたのです。彼女は水をくむ度ほどの渴きをいやしましたが、これまでの人生で感じていた心の渴きは、5人の夫をもってしてもいやしてもらおうことができなかったのです。

そこへ、決定的な形でイエスが関わってくださいました。見た目には、イエスは旅に疲れて、井戸の水をくむものも持たず、弱々しい姿だったのです。飲み水を与えませんでした。イエスは「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」(4・14)とおっしゃるのです。

人は、決定的な影響を与える人によって、どのような姿にでも変わることができます。イエスはすべての人にとって、決定的な関わり方を果たしてくださりました。ペトロには、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(マタイ 4・19)と言ってペトロの人生を決定づけます。罪深い人生にあった犯罪人でさえ、イエスは天の国に迎えられる人に変えることができます。

こうした決定的な関わりかたを、サマリアの女から始まって、地域の住民の多くが経験したのです。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」(ヨハネ 4・42)

わたしたちは、どこかで自分の歩むべき道を決定づける人に出会っ

て今を生きているのだと思います。だれにでも、忘れられない出会いがあって、その出会いの中で受けた影響を粹に感じて、人生を歩いているのではないのでしょうか。

この前、民放のドキュメンタリー番組で、肺の移植を専門にしている外科医が取り上げられていました。その外科医は、先輩医師が自分に言ってくれた言葉を心に刻み、いつも思い出していると話していました。それは、「将来1人でもいいから、あんたがおったから助かった。他の誰でもない、他の外科医じゃなくって、あなたがいたから助かったんですと言う患者が1人でも出来たら、君の外科医人生は大成功。外科医になった意味があったと思いなさい。」というものだそうです。

場面を観ながら、2つのことを思いました。わたしを決定的に導いてくれた人のことと、わたしはだれかに対して、決定的な影響を与える人になれるだろうかということです。まずわたしに決定的な影響を与えてくれた人は、高校を卒業して司祭になるまでの8年間、大神学院で指導をしてくださったカナダ人の司祭を挙げることができると思います。

この指導担当司祭にさまざまな導きを受けましたが、「神さまはあなたが思いもしない形ででもあなたを準備し、ご自分の道具にしてください」という言葉が特別に残っています。わたしが神の前にへりくだって、「わたしでよければ、どうぞお使いください」と心から思えるようになったのは、カナダ人指導司祭のあの言葉だったと思います。

一方で、わたしはさきほどの外科医が心に刻んだ言葉を自分に当てはめ、「ナカダコウジというカトリック司祭がいたから助かった」そんな司祭になれているだろうかと考えました。この部分は、恥ずかしい話ですが、自分からはまだ「この人だ」という人を思い出すことができません。「中田神父がいたから助かった」という人が1人でもいれば、司祭になった意味があったと言えるでしょうし、もしかしたら地獄の滅びからも免れることができるのかも知れません。

イエスは皆さんお一人お一人にとっても、決定的な関わりをしてくださるお方です。時代を超えて、場所を越えて、その事実は変わりません。わたしが知っている範囲でも、結婚した妻を通してイエスの決定的な導きを受けた人を知っていますし、命に関わる場面で司祭を呼び、秘跡を受けて死の淵から帰ってきた人も知っています。皆さんにとっても、同じようにイエスは人生の中で決定的な働きをしてくださっています。

もし、自分の中でイエスが深い関わりを持ってくださっていることに感謝しているなら、次はわたしが、だれかに対して決定的な役割を果たすお手伝いをしてみましょう。わたしが人を助けるとか人を救うというとらえ方ではなく、イエスがその人に決定的な関わりをもってくれるために、わたしが一役買うということです。

イエスのために一役買ってくれる人を、イエスはいつの時代にも必要としています。お役に立てるならと力を貸してくれる人がいるおかげで、イエスはいつの時代にもどんな場所でも、具体的なあの人この人に、救いのわざを届けておられるのです。



## 四旬節第 4 主日 (ヨハネ 9:1-41)

わたしたちはイエスに遣わされて主の思いを知る

四旬節第 4 主日、A 年は「生まれつきの盲人をいやす」物語でした。この中で、イエスが「シロアム『遣わされた者』という意味の池に行って洗いなさい」と言われた (9・7) この点に注目して「イエスに遣わされて主の思いを知る」というテーマで黙想してみたいと思います。

長崎大司教区の司祭異動がすべての長崎教区司祭に送られてきました。眼を皿のように見開いて読み返しましたが、わたしの名前は含まれていないので、今年も浜串小教区でお世話になります。

さて、選ばれた福音は長い長い朗読でしたが、この奇跡物語を考えるのに、他の奇跡物語を参考にしたいと思います。それは、ルカ福音書第 17 章の「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」物語です。両方に共通するのは、病人がイエスの指示された場所に行くという点です。

今日の生まれつき目の不自由な人は「シロアムの池」に行くように言われ、その通りにしましたし、比較するために紹介した物語では十人の重い皮膚病を患った人たちが祭司のところに行くように言われ、その通りにしています。この様子から、人はイエスに遣わされ、遣わされたその先で、イエスの思いに触れることが分かります。

3つの場面を取り上げたいと思います。1つ目は、通りすがりにイエスがこの生まれつき目の見えない人を見かけたという場面です。イエスはこの障害を抱えた人を導くために、「地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗り」 (9・6) シロアムの池に遣わします。ここで目が見えるようになり、イエスが奇跡をおこなう人であることを知ります。

2つ目の場面は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行かれた場面です。彼はまだイエスを見ていませんが、イエスのことを心から信じる人に変わっています。目が見えるようになって、重宝していることに感謝しているだけではなく、もっと踏み込んで、イエスはわたしたちと同じ罪の中にいる人ではない、神のもとから来られた方であると、考えるようになっていきます。

そして3つ目は、いやされた人が外に追い出されて、イエスと再び出会っている場面です。今度は、イエスを肉眼で見えています。そして「あなたは人の子を信じるか」とイエスに言われ、彼は答えて「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」と言います。

それに対してイエスは「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」と答えると彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずきました。生まれつき目の見えなかった人は、3つの場面を通して、大きく変化していきました。

取り上げた3つの場面は、わたしはこの障害を抱えていた人がイエスに遣わされた場面だと考えています。1つ目の「シロアムの池」は明らかに派遣されていると分かります。けれどもその後の2つの場面は、ファリサイ派の人々のもとに連れて行かれ、そこから外に追い出されて

と、迫害の中にあるわけです。それでもあえて、彼はイエスに遣わされてそこに置かれていると考えたいのです。

迫害が予想される場所に出向いても、先に大きな体験をしたので、迫害に屈しませんでした。彼は肉体の視力を回復して、それで終わりとはならず、自分をいやしてくれた人に誠実にふるまいました。肉体の視力を奪われていたときは、生きるために人の言いなりになっていたかもしれません。彼はその状態を抜け出して、自分が今あるのはイエスのおかげだから、イエスに背を向けるようなことはしないと決めたのです。彼はイエスに誠実に生きるという新しい生き方に目が開かれたのでした。

さらに、彼はファリサイ派に追放された後にイエスに出会います。彼は誰にもはばからずに「主よ、信じます」(9・38)と言ってイエスにひざまづく人に生まれ変わりました。肉体の目を開かれ、新たな生き方に目を開かれ、さらに信仰の目が開かれたのです。

比較のために紹介した、十人の重い皮膚病を患った人たちも、同じ段階を経ています。重い皮膚病から解放され、新しい生き方に招かれました。ただし、イエスへの信仰に目が開かれたのは十人のうち一人、外国人として差別されていたサマリア人だけでした。

わたしたちに当てはめてみましょう。イエスのなさり方は、人を遣わし、遣わした先でご自分の思いに触れさせるのでした。わたしたちも同じ体験をすることで、イエスの思いに触れます。言い方を変えれば、当たり前に見えているものも、イエスに遣わされて初めて物事がよく見えるようになり、その意味を深く学ぶのではないのでしょうか。

一つ、紹介したいと思います。わたしたちは日曜日に集まって、主日のミサに参加しています。当たり前かもしれませんが、見方を変えて、わたしたちが一人一人イエスに遣わされて、この場に集まっているとも考えることができるのではないのでしょうか。

ミサは、みなさんの考えによれば、司祭が一人でささげるものと考えているかもしれません。しかし祭司の務めを果たすのは、主任司祭一人ではないのです。洗礼を受けたすべての人は、共通の祭司職を委ねられていて、一人一人が信徒の立場で、祭司の務めを果たすのです。

ですから、ミサに集まっているわたしたち一人一人は、実はイエスに遣わされて、ミサをささげるために集まっているのです。司祭が「主は皆さんとともに」と招くとき、一人一人が「また司祭とともに」と答えてミサをささげているのです。「また司祭とともに」という応答は、ミサの中で皆さんがささげている部分なのです。決して、司祭が一人でささげているのではないわけです。

今日も、わたしたちはイエスに遣わされて、遣わされた先でイエスの思いに触れます。今日わたしたちは、単にミサに参加するためではなく、ミサをささげるために集まっているのです。日々、イエスに遣わされることで、イエスの思いに触れることにしましょう。当たり前に見えていることの中に、イエスに遣わされているという見方を当てはめて、イエスの思いをより深く学ぶことにしましょう。



## 四旬節第 5 主日 (ヨハネ 11:1-45)

ラザロの生き返りにわたしたちの復活を見る

四旬節第 5 主日、いよいよ典礼の頂点である主の受難と復活も近付いてきました。受難の週を迎える心の準備として、典礼の A 年は四旬節第 5 主日に「ラザロの死とよみがえり」の出来事を取り上げています。「ラザロの生き返りにわたしたちの復活を見る」そのつもりで与えられた朗読に目を向けることにしましょう。

ここ数日、人生でいちばんたくさん種類の薬を飲み続けています。尿酸値を下げる薬、コレステロールを下げる薬、風邪症状を抑える薬、扁桃腺の薬、痰を出しやすくする薬、喉に痛みが出たら飲む薬です。朝昼晩、飲む薬の種類は色々ですが、朝は今並べた薬を全部飲んでます。薬だけでもちょっとした朝御飯です。

薬をまじめに飲んだおかげで、一週間つらい思いをしていた風邪の症状も今は楽になりました。今日は一週間遅れの釣り大会です。お世話係をしてくれる高井旅の海で、今年は魚を探してみたいと思います。

福音朗読に入りましょう。ヨハネ福音記者は、ラザロがイエスにとってどういう人であるかをさまざまな形で紹介しています。4つ拾ってみました。まず、姉妹のマルタとマリアが「あなたの愛しておられる者」(11・3)と紹介します。福音記者も、「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」(11・5)と証言しています。

次にラザロは、「わたしたちの友」(11・11)とあります。イエスの愛しておられる人、イエスやその弟子たちの友なので、何を置いても彼の元に駆け寄ります。

一方でラザロは、「墓に葬られて既に四日もたっていた」(11・17)とあります。この世の人々とのつながりはもはや断ち切れ、自分たちから遠く離れた人として扱われています。このラザロをイエスは生き返らせて、この世の人々とのつながりをすべて回復させようとします。

最後に、ラザロのためにイエスは涙を流されました(11・35 参照) 悲しみを分け合い、その人のために涙を流すのは、ラザロがイエスにとってどれだけ重要な人であったかを偲ばせます。

これらの部分をつなぎ合わせると、ラザロはイエスにとって放っておけない人、イエスの心を揺り動かす人、できるすべてのことを果たしてあげたいと思わせる人でした。

さて、ラザロについてこのようにまとめましたが、イエスが放っておけない人と考えているのは、本当にラザロだけなのでしょう。わたしは、ラザロを通して、イエスがすべての人を同じように考えていると理解します。

イエスがラザロを生き返らせたのは、すべての人を、ラザロと同じように思っている、放っておけない人として、心を揺り動かされる人として、できることをすべて果たしてあげたい人として見ておられる、そのしるしだと思うのです。

ところで、一人ひとりに置き換えたとき、本当にラザロと同じ接し方をしてもらっているだろうかという疑問を持つかもしれません。わたしの家族は亡くなった。そもそも生き返らせてもらった人など聞いたことがないと。

もちろん、ラザロと同じ体験は起こらないでしょう。けれども、イエスは誰一人放っておくことができなかつたので、十字架にかけられていのちをおささげになりました。イエスの右と左には犯罪人が十字架にかけられていましたが、何とかしてその人をも救おうとされました。

そしてイエスは、復活してご自身にできるすべてをわたしたち皆のために果たしてくださったのです。イエスがラザロを生き返らせたのは、イエスを信じるすべての人を復活させるしるしでもあったのです。

もう一度、ラザロの描写を振り返ってみましょう。ラザロはイエスの愛しておられた者です。わたしたちもイエスの愛しておられる者です。ラザロはイエスの友でした。わたしたちも、どんなときにもイエスは友としてそばにいてくださいます。

ラザロは葬られて、四日もたっていました。わたしたちも場合によっては罪の闇に葬られ、既に自力では立ち帰れなくなっている時もあるでしょう。それでもイエスは、わたしたちを起こしに来てくださいます。

イエスはラザロのために涙を流しました。同じくイエスは、わたしたちの悲しみに寄り添い、涙してくださるのです。ラザロとは、イエスがどんなお世話でも果たしてあげたい、わたしたちすべてのことです。

イエスがラザロに果たしてくださったのは、この世の命の生き返りだけではありません。イエスはマルタに「あなたの兄弟は復活する」(11・23)と言われました。そして続けて、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」(11・25-26)とも言われました。

ラザロのことだけでしたら、後に続く言葉は必要なかったでしょう。これは、ラザロのことをきっかけにして、イエスを信じるすべての人に、復活への希望を持たせる招きとなったのです。わたしたちもイエスを信じているから復活に招かれると、ラザロの出来事は教えています。

わたしたちは出来事をより真剣に見つめるとき、イエスの働きが、働きかける目の前の人のためばかりではないことに気付きます。今ここでこのような働きをなさって、すべての人に同じ喜びを届けるしるしとしてくださっているのです。ラザロ一人を生き返らせる働きではなくて、イエスを信じるすべての人は、イエスによって復活の喜びにあずかれる。今はそのしるしを示しているのです。

2週間ほどすると、わたしたちもイエスのご受難とご復活の場面に立ち会うこととなります。イエスはわたしたち皆が、かけがえのない人、一人も滅びてほしくない人、救われるために十字架にはりつけになることも厭わない人であることを証明してくださいます。感謝して、これからの聖週間の典礼にあずかることにいたしましょう。



## 受難の主日 (マタイ 27:11-54)

かたくなな心の壁を壊す

キリスト教の典礼の頂点、核心の部分である聖なる一週間を迎えました。受難の主日は、復活の主日までの一週間を先取りします。「かたくなな心の壁を壊す」というテーマで黙想したいと思います。

全体はイエスの受難と死を描いていますが、「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った」(27・51-52)とあって、イエスの復活を予感させる出来事が織り込まれています。

ですから、今日の典礼は、聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭の聖なる三日間すべてに参加するのが難しい人にも、イエスの死と復活によってすべての人に救いがもたらされたことを黙想させます。

もちろんより確実にイエスの死と復活を黙想するには聖なる三日間の典礼に参加することが望ましいのですが、今日の受難の主日にも大まかな要素が盛り込まれています。

今年の受難の朗読は、マタイ福音書から選ばれています。2つの点を指摘しておきます。1つは、キレネのシモンのほかはイエスについて行く人が登場しないということです。母マリアも、イエスの愛しておられた弟子も、ベロニカという女も、誰も登場しません。もう1つは、マタイ福音書の中ではイエスの死は復活を前提としているという点です。

2つの点を指摘したのは、人間の心のかたくなさとつながりがあります。イエスにつき従う人がいないということは、そのまま、弟子たちをはじめとしてもともとイエスに従っていた人たち、そしてイエスを理解しない人たち、すべてが心を固く閉ざしている様子を描いています。

マタイの受難の場面には、イエスを死に追いやる人々が強調されていますが、背後に隠れているイエスを信じる人も、受難の場面ではともに心を固く閉ざしたのです。そんな中でイエスは十字架の上で命をささげます。ベロニカも、母も、イエスの愛しておられた弟子も、一緒にはりつけにされる犯罪人も、わたしたちが予想しているような出来事は何も起こらずに命をささげるのです。

これは、1つのことを強調しているように思います。それは、「かたくなな心の壁を壊す」ということです。ただの一人も、イエスを心配し、イエスについて行く人がいません。そんな中で、イエスのご自分の命を、十字架の上で粉々に砕いて、おささげになるのです。わたしたちのかたくなな心の壁を壊すためです。

聖なる三日間、イエスはわたしたちのかたくなな心の壁を壊し、悔い改めを促し、復活の喜びへと招いてくださいます。かたくなな心を自分ではどうしても打ち砕くことができない弱いわたしたちを、イエスが命をささげて救ってくださいます。感謝の心で、この聖なる一週間を過ごすことにいたしましょう。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)



## 聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

イエスに従うために限界を設けない

シモン・ペトロはイエスに言いました。「わたしの足など、決して洗わないでください」(13・8)。「決して洗わないで」とは、たいへん強い言葉です。福音書を調べると、「決して」という強い言葉は、ほとんどの場合イエスの用いている言葉です。イエスが強い言葉を使うことができるのは、イエスにはすべての言葉に確信があるからです。

ところでペトロも「決して洗わないでください」と言ったのですが、ペトロにとってもこれからイエスがなさろうとすることは決してあってはならない、そのような行為は絶対に受け入れられないという確信があったはずです。

ペトロは戸惑い、混乱したのではないのでしょうか。それでもイエスは、ペトロの足元にかがみ、足を洗います。ペトロにとってあり得ない行動を、イエスは何のためらいもなく実行します。ペトロの中で、「自分の先生であるイエスはこうあるべきだ」という姿が完全に壊れました。

イエスは、ペトロの心の変化に十分気付いていたことでしょう。イエスは、「自分はここまでは変わることができても、これ以上は変わらない」という壁が、まだあったのだと思います。イエスはその壁を壊し、ご自分が救いの計画の完成のためにすべてを与えつくす方であることを示そうとしたのです。

イエスが弟子の足を洗う姿は、どこまでも自分を与えつくす姿です。それは十字架上の姿、また最後の晩餐で制定された聖体の秘跡を予感させます。イエスをご自分を与えつくすのに、「これ以上は決してできない」という壁を作りませんでした。十字架上の死は、尊厳を一切奪われる最期です。ご聖体は、ご自身の姿が消えてなくなる秘跡です。何も残さず与えることを、イエスはためらいもなく実行なさいます。

弟子の足を洗い、わたしたちの食べ物となってくださり、尊厳も投げ捨てて十字架に向かわれるイエスは、わたしたちに「これはできない、これ以上は決して受け入れられない」というさまざまな壁を壊してご自分に倣うように招いています。

わたしたちは日々、イエスに倣って生き方を整えてきています。その中で、「これ以上は決して受け入れられない」という限界を作っていないのでしょうか。わたしたちの心の中にある壁は、よりイエスの招きに答えていくのに、妨げになっていないのでしょうか。

もしわたしたちに、自分で作った限界や壁があるなら、イエスにその壁を壊していただきましょう。今日イエスは、すべての人の前にひざまずき、限界の壁を壊し、より自由にイエスに従う人になれるように導いてくださいます。イエスの導きに自分を委ね、壁を置かずにイエスの声に聞き従っていく恵みと勇気をミサの中で願いましょう。



## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスの憐れみにすべての人がより頼むように

「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは、「違う」と言った。ペトロははっきりと、イエスとの関係を否定しました。マタイ福音書によると、彼は直前まで「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」(26・33)「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(26・35)と言っていたのです。それなのに、「わたしはイエスを知らない」と言ったのです。

ペトロが「違う。わたしはイエスの弟子ではない」と言ったことは、その言葉だけでしたら、ゆるされるかもしれませんが、けれども、言葉の意味している内容は、もっと深刻なのではないでしょうか。

イエスはいつも、希望のない人に希望を与える人でした。場合によっては、命をよみがえらせて絶望の淵にある人に希望を与えました。ですから、「わたしはイエスの弟子ではない」と言った時、それは「わたしはイエスに希望を置いていない」と言っているようなものなのです。これまで目にしてきたイエスの姿を、完全に否定したことになるのです。

ペトロが事の重大さを分かっていたかは分かりませんが、結果的に彼はイエスの予言の通り、鶏が鳴く前に三度イエスを否定したのでした。三度、希望を与え続けてきたイエスを否定したのでした。

ペトロの罪は、ペトロだけの罪ではないと思います。大事な場面で責任から逃げ出してしまう弱さや、自分が助かりたいために人を蹴落とす醜さは、どんな人にも隠れています。ペトロと同じ場面に立たされたとき、わたしたちも同じ過ちを犯してしまうのです。

だからこそイエスは、すべての人の罪を背負って、十字架にはりつけにされました。「決してつまずきません」「知らないとは決して申しません」と言ってそれでも裏切ったペトロの罪も、「引き渡したらいくらくれますか」と言って自ら進んで裏切ったイスカリオテのユダの罪も、イエスは背負ってくださったのです。

弱さや醜さのために、背を向けてしまう人間をイエスは憐れに思い、いのちを投げ出して救ってくださいました。問題はその後です。弱さや醜さを認めてイエスに憐れみを願う。わたしたちを救ってくださる主に哀れな姿をさらけ出して感謝する。そこに一人ひとりが向かっていく必要があります。どんなに弱くみじめでも、絶望してはならないのです。

「決して裏切らない」と言ったペトロさえ、イエスにとどまることができませんでした。わたしたちは一人残らず、イエスの憐れみによってしか救われないことを認める必要があります。この後に続く十字架の礼拝では、すべてを委ね、救いのわざに感謝しますと態度に表わしましょう。一人ひとり十字架の前で動きを止めて、礼拝いたしましょう。



## 復活徹夜祭 (マタイ 28:1-10)

暗闇を打ち破られた主を、夜を昼にして祝いましょう

主のご復活、おめでとうございます。今年の復活のメッセージとして、「確かに、あなたがたに伝えました」という天使の言葉を選びたいと思います。

イエスが埋葬された墓のわきに現れた天使は、婦人たちに弟子たちへの伝言を残しました。「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あなた方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」 (28・7)

「確かに、あなたがたに伝えました。」この言葉から、2つのことを拾いたいと思います。1つは、天使の言葉の向こうには、さらにそれを伝えるように命じた神がおられるということです。神から託された言葉なので、「伝えました」という言い方になりました。

このことは、次の反応を引き出します。つまり、出来事の向こうにおられる神の働きを信じるかどうか、ということです。今目にしている出来事の向こうに、神が働いておられると直感した人には、次の段階が用意されています。しかし、神の働きを信じることができなければ、その人はもはやさらに踏み込んだ神との関わりには招かれないのです。

イエスの墓のそばで、主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座りました。この様子を墓の番人として命じられた番兵たちと、墓を見に来た婦人たちの両方が目撃しました。ところが番兵たちは、目の前で起こっている驚きの出来事の向こうに神が働いておられると、信じるができなかったのです。彼らは目の前の出来事に恐れをなし、死人のようになってしまいました。

婦人たちは、幸いに目の前の出来事だけに振り回されずに、その向こうに神の働きを見たので、天使の言葉を信じることができました。天使の言葉を信じた彼女たちは、同じ天使の言葉で次の段階に進みます。

「確かに、あなたがたに伝えました」天使の言葉はもう1つ、婦人たちに行動を起こすよう期待しています。行動を起こして、イエスの復活の証人になること。天使の言葉を信じた人が行動を起こすことで、さらに踏み込んだ神との関わりが用意されます。

「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って」(28・8) 行きました。すると間もなく、その行く手にイエスが立っていて、「おはよう」と言われたのです。天使の言葉を信じ、行動を起こした彼女たちは、もはや叶わないと思っていたイエスとの再会を果たしました。しかも、復活したイエスです。

墓に眠っているイエスしか想像していなかった彼女たちには、大きな恵みとなりました。死の暗闇に置かれていたイエスは、今暗闇を打ち破り、この世の光として婦人たちの前に現れます。イエスはご自分弟子の暗闇を打ち払われますが、婦人たちの心にあった暗闇も取り去り、婦

人たちを解放してくださったのです。イエスの復活は、死の暗闇からの解放です。イエスご自身のためだけではなく、出来事の向こうにある神の働きを信じた婦人たちの心も、暗闇から解放してくださいました。

婦人たちが体験したことは、復活を信じるすべての人も体験可能な出来事です。わたしたちは復活徹夜祭の光の祭儀で暗闇から光への「過越し」を目撃しました。この祭儀の向こうに、イエスを復活させた神の働きがあると信じました。

さらにわたしたちがこの驚くべきわざを告げ知らせる証人となるなら、証しするたびに、復活したイエスに出会うことができるのです。人間の死は、イエスの復活に飲み込まれた。イエスが暗闇を打ち破り、まことの光をもたらしてくださったと証言するなら、そこにイエスは現れてくださるのです。

最後に、行動を起こす人、復活の証人になるために、1つのことを付け加えたいと思います。今日のミサは、徹夜祭と呼ばれます。夜を徹して祝えと呼びかけています。文字通りに寝ないで祝うことも含まれていると思いますが、わたしたちにとっての「夜の部分」「眠っている部分」を見直すことも可能だと思います。

わたしたちの活動している時間の中で、自分がイエスの復活を信じるキリスト者であると人々に証しする時間はどれくらいあるのでしょうか。全くないとしたら、わたしたちは復活の承認としてずっと眠っているのに等しいのではないのでしょうか。

その、「眠っている時間」「夜に等しい時間」を、「起きている時間」「証しする時間」に変えなさいと、復活徹夜祭は呼びかけているのだと思います。もし、これまでの数十年が、復活したイエスを証しする時間となっていなかったとしたら、これから、夜を昼に変えて、イエスは復活し、わたしたちに復活の希望を与えてくださったと、証言したいと思います。

「イエスの復活を証言する人」は、自分の生活の一部を充てる人と、自分の生活のすべてを充てる人がいます。多くの方は、生活のある部分を用いて、イエスの復活と、自分自身も復活の希望を持っていることを証しします。

一方で、生活のすべてを充てて、イエスの復活の証人になってくれる人を、いつも求めておられます。イエスが復活し、イエスにかけた希望がわたしの持ち物のすべてですと言えるような人を探しておられます。もし、「自分も、イエスにかけた希望だけを持ち物にして生きていきたい」と願う人がいるなら、何かの行動を起こしてほしいと思います。

復活徹夜祭、夜を昼に変えて祝い、証しを伴わなかった生き方を証しをしながら生きる生き方に変えるまたとない機会です。行動を起こし、復活の証人になろうとする人のそばに、復活の主は必ずいてくださいます。一人ひとり、「確かに、あなたがたに伝えました」との天使の言葉を自分のこととして受け止めましょう。一歩前に入る勇気を、今日のミサの中で願いましょう。



## 復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

イエスの復活は人を新しい見方に導く

あらためて主の復活おめでとうございます。今年の聖週間、いちばん悔やまれるのは聖火曜日です。前もって聖週間のミサ日程を配って、聖火日に浦上での聖香油ミサに参加するので浜串の朝ミサは休みにしていました。

今年は聖木曜日を福見教会で行いましたが、ミサができた日を数えると、福見教会は月曜日、木曜日、復活徹夜祭で、浜串教会は聖火曜日を休みにした関係で水曜日と復活徹夜祭しかミサができませんでした。

今年のような典礼当番の年は、聖火曜日は絶対に休まないほうがいいと思いました。次回以降の反省として、活かしていきたいと思います。もちろん、その時までわたしが居れば、という条件付きです。

では福音朗読に移りましょう。今年の学びを得るために、「見る」という動作について考えてみたいと思います。3つ取り上げます。マグダラのマリアが、「墓から石が取りのけてあるのを見た」（20・1）これが1つ、次にシモン・ペトロが「墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た」（20・6）という場合、そして最後にイエスが愛しておられたもう一人の弟子も墓に「入って来て、見て、信じた」（20・8）この3つを振り返りましょう。

マグダラのマリアが墓から石が取りのけてあったのを見たのは、遠目から見て、あまりにもびっくりして引き返したと想像できます。彼女は慌てていて、よく考えると墓の中は見なかったのに「主が墓から取り去られました」（20・2）と言ったのかもしれない。

次にペトロは、墓に入り、亜麻布を見ました。亜麻布はイエスのご遺体を包んでいたものですから、何かが起こったことを予感させます。けれども、まだこの時点でペトロはイエスの復活に思い至りませんでした。

最後に、イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、「入って来て、見て、信じた」のでした。ここで見落としてはいけないのが、「何を見たのか」が書かれていないということです。状況からして、墓の様子を見て、信じたということでしょうが、ヨハネ福音記者はわざと、「何を見たのか」を示さず、最後の場面は特別な「見る」であったことを読者に考えさせているわけです。

特別な「見る」とはどのようなものでしょうか。それは例えば、人が人に「眼で合図をする」そういう場合に似ています。「こちらに来なさい」とか、「次はあなたの番だ」とか、相手に目を遣るだけで、相手が理解することがあります。お互いに目が合った時、目に何か書いているわけではありませんが、相手はその意図を汲み取るのです。

それは、「見る」ということが「理解する」ということと同じ働きをしているとも言えます。イエスが愛しておられたもう一人の弟子の「見て、信じた」というさまは、「すべてを理解し、そして信じることがで

きるようになった」ということだったのです。

イエスは復活し、墓から出て行かれました。墓に向かった人々は、イエスを見ませんでした。けれども空の墓を通して、復活したイエスはこの人たちを「ちらっと見る」段階から「よくよく見る」段階へ、そして最終的に「すべてを理解し、信じる」段階まで導いてくださるのです。

それはわたしたちにとっても同じことです。イエスの復活は、わたしたちの生活に起こる出来事を、「なんとなく見る」状態から「よく見詰め直す」状態へ、そして最後に「出来事の意味を理解し、その出来事を通してイエスを信じる」ところまで導いてくださるのです。

わたしたちには、簡単には理解できないことがいろいろ生じます。家族を失うこと、人生の大きな挫折を味わうこと、取り返しのつかない失敗などです。こうした深い闇、悩みを、「見る、さらによく見る、そして意味を理解し、イエスに感謝できる」そこまで、復活したイエスは導いてくださるのです。

ここまで導いてくださる復活したイエスが、わたしにとって大切な方であるなら、自分ひとりにとどめず、イエスを知らない人に告げ知らせるべきです。出来事の意味を見いだせず、途方に暮れている人に、意味を理解させてくださるのは復活したイエスだと知らせに行きましょう。イエスの復活は、わたしたちを行動へと駆り立てるものなのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)



## 神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

「見ないのに信じる人」になるために

今週は復活したイエスがトマスに現れる場面です。「見ないのに信じる人は幸いである」というイエスの言葉に耳を傾けたいと思います。

最近、玄関にオレンジの紙に「エホバの証人お断り」とメモを書いて貼り付けました。去年の流行語をもじって「お・こ・と・わ・り」と書いてみました。去年のご復活のころに訪ねてきたので、先回りです。

25日(金)に、今年的人事異動で旅立つ神父さまと、新しく来られる神父さまの見送り・出迎えをしました。旅立つ神父さまには「新しい任地で頑張ってください」と、お迎えする神父さまには「ようこそ、そして一緒に上五島の教会を盛り立てていきましょう」という気持ちになりました。

前任者とタイプの違う神父さまがやってくるたびに、司祭同士、司祭と信徒で、どんな化学反応が起こるか、楽しみでもあるし気にもなります。たいていは楽しみのほうが多いです。

直接の司牧には関係ないですが、ソフトボールのチーム編成で考えると、今年上五島に赴任してくる3人の神父さまのうち、2人はかなりの戦力補強ですが、1人はわたしの知る限り運動音痴です。まあそれも含めて、違った化学反応を楽しみにしています。

さて福音朗読では、弟子たちのもとへ復活したイエスが現れて、大騒ぎになっていました。トマスはその場に居合わせなかったのですが、やはり出来事に乗り遅れたという感じがあったのではないのでしょうか。

トマスは何か当てつけのように「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」(20・25)と言い張ります。

そんな意地悪なことは言わず、すぐに信じたいという気持ちも彼の中にはあったかもしれません。けれども、トマスの心の中の何かが邪魔をして、弟子たちの喜びの輪の中に加われなかったのです。

もし、このまま出来事が終わって、イエスがトマスに現れなかったとしたら、不幸な結末になっていたかもしれません。イエスの復活を信じられないまま、弟子たちの一団からも離脱していたかもしれません。

もはやだれも、トマスの心を開くことができなくなっていたところに、復活したイエスが再び現れてくださいます。イエスはトマスにいつくしみを示し、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(20・27)と諭してくださったのです。

トマスは「わたしの主、わたしの神よ」(20・28)と答えました。わたしは、ここで話は終わっているのだと思っています。この時点でトマスは復活したイエスに心を開き、信じる人に変わっているからです。

すると、そのあとに続くイエスの言葉「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20・29)は、トマスにだけ向けられた言葉ではなく、後の人々、わたしたちも含めてイエスを信じようとするすべての人々のために向けられた言葉だと思うのです。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」イエスは、何を「見ないで信じる」と言っておられるのでしょうか。もちろん、復活したイエスを見ないで信じるということがまずありますが、その意味だけでしたら、ほとんどの人が見ない人に含まれます。

すると、「見ないで信じる」という意味は、もう少し考える必要があるでしょう。朗読の中から、トマス自身にも、わたしたちにも当てはまりそうなものを拾ってみたいと思います。意外に思われるかもしれませんが、トマスは、彼がいない間にイエスが弟子たちに息を吹きかけながら言われた言葉の意味、これを見ていないのではないのでしょうか。

「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(20・22-23)

これだけでは分かりづらいかもかもしれません。少し言葉を補うと、イエスが聖霊を送り、罪を赦す権能をお授けになると約束したのは、その場に居合わせた弟子たちだけを考えていたのではないということです。イエスは、トマスも含め、11人の使徒すべてに権能をお授けになったのです。トマスはそのことを見抜き、信じることができませんでした。

イエスは、確かにトマスも含めて、聖霊を受け、罪を赦す権能を受けることになるとお考えでした。それは例えて言えば、卒業式の日、風邪を引いて欠席者がいるようなものです。学校の校長は卒業証書を手渡ししながら、出席している人だけ卒業したと考えるのでしょうか。むしろ、出席できなかった生徒を気遣いながら、式を進めていくと思うのです。

そのように、イエスのご自分がお選びになった弟子すべてが聖霊を受けることになる、罪の赦しを与える者となると考えておられたのです。トマスはそのことが信じられなかったので、もう一度トマスにも現れ、神のいつくしみを示されたのではないのでしょうか。

復活したイエスは、ご自分の11人の使徒に対してだけでなく、イエスを信じるすべての人にも、同じ体験を用意しておられます。かつてイエスはニコデモに、「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」(3・5)と言われました。

これは洗礼を暗示していますが、わたしたちにも同じことを言っているはず。そこで問われているのは、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20・29)ということなのです。

わたしたちも、トマスと同じように、自分のためにも約束してくれた、そういう恵みを信じるのが求められていると思います。最後の晩餐でご自分をお与えになると約束しましたが、今イエスは復活なさって、わたしたちにもご自分を与えてくださるのです。わたしたちはそこで、「見ないのに信じる」という信仰のわざが求められています。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」イエスの約束に、わたしたちを加えてくださいと、このミサの中で願うことにいたしましょう。



## 復活節第 3 主日 (ルカ 24:13-35)

エマオに向かう弟子たちの体験を積ませてください

復活節第 3 主日は、復活したイエスがエマオで現れる場面です。二人の目が開け、イエスだと分かった様子から、「復活したイエスは今も、わたしたちの目を開き、わたしたちを宣教へ駆り立てておられる」とまとめたいと思います。

復活祭を無事に終え、浜串のお父さんの手ほどきで生まれて初めてルアーフィッシングに行きました。正直な話「釣れるの？」と疑ってかかっていたのです。一緒に連れて行ってもらった日、大きなアコウを釣って帰りました。

それでも、「先生の手ほどきがあったから釣れたのだ」と、なかなかルアー釣りそのものを信用できなかったのです。そこであらためて、連れて行ってもらったおおよその場所に一人で行ってみました。辛抱して続けていたら最初の魚が掛かりました。そして、ついに 50cm を超える鯛が掛かりまして、この釣り方は可能性があると実感しました。何回か続けてみようと思います。

さて、人間だれしも、何かで迷ったり自信をなくしたりすると、自分を取り戻す場所を訪ねるものです。わたしは釣りに行って、やることなすこと結果につながらないと、とっておきの場所に行ってみます。するとそこで何かを思い出して、自信を取り戻したりするわけです。

皆さんも、自分を取り戻すその人なりの場所があると思います。うまくいっていたことがうまくいかなくなったときに、もう一度自分を見つめ直す場所です。自分の今を作り上げてくれた場所、そういう場所は、困難に直面するたびに力になってくれるのだと思います。

今週の福音で登場する 2 人の弟子たちも、自信を失ってエルサレムからエマオに向かっている途中でした。イエスが 12 人の弟子たちと宣教している姿に強く惹かれ、この 2 人もイエスの弟子であることを自負していたはずですが、しかし、イエスが十字架にはりつけにされ、みじめと思える最期を遂げたとき、かれらはもはやエルサレムにとどまる理由がなくなり、都を後にしたのでした。

そんな 2 人にイエスが現れ、彼らと共に歩き始めます。共に歩いておられるのに、彼らにはそれがイエスだとは分かりませんでした。彼らの目は遮られていました。イエスはかまわず彼らと共に歩き、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」(24・27) のです。

2 人の弟子たちは、知らず知らずのうちにイエスによって導かれていたのです。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか。」(24・32) 彼らの心を燃やし、心の目を開いて下さった目の前の人が復活したイエスだと分かったのは、「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」(24・30) その時でした。

この2人の弟子たちとイエスとの一連のやり取り、整理すると何かに気づくかもしれません。そのためにも、まず一連のやり取りを整理してみましょう。中心にあるのは2つのことです。エマオに向かう弟子たちに復活したイエスが現れ、まず聖書を説明し始めます。それからパンを取り、賛美の祈りを唱え、割いて弟子たちに与えました。すると、復活したイエスだと気づいたわけです。

この一連の流れに、皆さん何か気づかないでしょうか。イエスが聖書を説明し、賛美の祈りを唱えてパンを割いて与えてもらう。実はこの体験、わたしたちはすでに味わっているのではないのでしょうか。

そうです。わたしたちが今集まっているミサ聖祭は、イエスが聖書を説明してくださり、パンを割いてわたしたちに与えてくださる出来事の再現なのです。あの、気を落としながらエマオに向かっていた弟子たちが一日かけて体験したことを、ミサ聖祭の約一時間の中で、典礼という形でわたしたちは体験しているのです。

エマオに向かう弟子たちが体験したことは復活したイエスに出会っただけでは終わりません。イエスの姿はもはや見えなくなりましたが、彼らは時を移さず出発して、エルサレムに戻りました。聖書を説明してくださり、パンを割いて与えてくださる復活したイエスを体験した彼らは、自分たちが体験したことを喜んで告げ知らせる人に変えられたのです。

実は、わたしたちが気づかっているミサ聖祭も、わたしたちを変える力を持っています。みことばの朗読と聖体のうちにおられる復活したイエスは、わたしたちの食べ物となってくださり、わたしたちを復活のイエスの証人に作り変えるのです。

ミサ聖祭にあずかるたびに、わたしたちはエマオに向かう弟子たちの体験を積み重ねます。イエスがみことばを説明し、ご自分を食べ物として割いて与えてくださり、わたしたちの目が開かれて、喜んで復活したイエスを証言する。この一連の出来事を繰り返し体験するのです。

最後に、エマオに向かう弟子たちのすばらしい体験を、今まさに長崎教区全体が必要としています。来年の信徒発見150周年記念に合わせて、本日から3日間、教区代表者会議の第一会期が開催されます。

長崎教区が教区民一丸となって「参加し・交わり・宣教する」共同体となれるよう、教区長が効果的な方針を立てるための提言をまとめようとしているのです。実効性のある提言を示すために、選ばれた50人くらいの代表者がこの3日間力を注ぎます。

この3日間にも、イエスが聖書を説明してくださり、ご自身をパンとして割いてお与えくださり、行動する人に作り変えてくださるようにと願っています。わたしも、福見のミサを終えたらすぐ鯛ノ浦から長崎に渡り、代表者の意見の書記を務めることになっています。

信徒の皆さん。皆さんも「教区代表者会議・会期中の祈り」を唱えて、この集まりが意味のあるものなるようお祈りください。長崎教区の方角性がしっかり定まるように、恵みを願うことにいたしましょう。



## 復活節第 4 主日 (ヨハネ 10:1-10)

イエスの声に聞き従う信徒に育つために

復活節第 4 主日の福音朗読箇所から、「羊は羊飼いの声を聞き分け、羊飼いについて行く」とまとめたいと思います。また、今週の福音朗読を補強するために、直前のヨハネ福音書第 9 章「生まれつき目の不自由な人のいやし」の物語にも触れたいと思います。

教区代表者会議の第一会期に参加してきました。わたしは会議の書記として呼ばれていたもので、会議で発言することはありませんでしたが、会議の流れを見守っておりました。真剣な討議がなされまして、これからあと 3 回、同じように会議を積み重ねていくこととなります。

教区代表者会議の雰囲気味わってきて、この会議がそもそもどんな会議だったのかを理解しました。この会議は、長崎教区が直面している危機感・停滞感を共有し、今手を打たないと手遅れになる問題点を見つけ出し、大司教に提言して「参加し・交わり・宣教する」長崎教区へ真の生まれ変わりを目指すものです。それは同時に、信徒発見から 150 年目を迎える来年に向けて、長崎教区が再出発をするふさわしい準備にもなる。わたしはそう理解しました。

この教区代表者会議に先立って、中央委員会が教区民へのアンケートを通してまとめた 12 の提言案が、「カトリック教報 5 月号」に掲載されています。この提言案については教区シノドスの代表者だけでなく、教区民皆が、目を通して問題点を共有してほしいと思います。

多方面にわたって問題点が指摘されているのですが、それらすべてに共通するのは、「今手を打たないと、手遅れになる問題だ」ということです。そしてわたしは、12 の提言案を突き詰めると、「イエス・キリストの呼びかけを自分のこととして受け止め、生活にあてはめることのできる神の民になること」これが長崎教区民すべてに求められている「今手を打たなければ、手遅れになる」問題ではないかなと思っています。

福音朗読に入りたいと思います。朗読の前半部分は、ファリサイ派の人々に話されたのですが、彼らはその話が何のことか分からなかったとあります。ファリサイ派の人々は律法の教師として、指導的立場にありました。ところが、イエスによると彼らは偽善者であり、民衆を父なる神のもとへ正しく導いてなかったのです。

イエスは民を父なる神のもとへ導くまことの羊飼いとして現れ、彼らよりたやすく聞き従うことができるように、模範を示し、先頭に立って歩かれます。

偽善者とまことの羊飼いとの違いは明らかで、民はイエスの声を聞き分け、ついて行きました。ファリサイ派の人々は自分たちがよもや盗人や強盗、偽の羊飼扱いされる存在だとは理解できなかつたのです。

「羊は羊飼いの声を聞き分ける」(10・3 参照)とあるのですが、それは具体的にはどのような姿を表しているのでしょうか。この説明のために、直前のヨハネ福音書第 9 章の物語が役に立ちます。そこでは生

まれつき目の不自由な人がイエスによっていやされました。そこへ事情を把握しようとファリサイ派の人々が来て、「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか」(9・17)と追及します。それに対して彼は「あの方は預言者です」と言いました。

さらに「あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」(9・33)ときっぱり答えるのです。いやされたこの人は、自分を父である神のもとへ導くまことの羊飼いはイエスであると理解し、その声を聞き分け、従う人になっていました。

ファリサイ派の人々は、目が見えるようになった人の毅然とした態度に逆上します。「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」(9・34)と言いつ返し、彼を外に追い出しました。

「外に追い出した」とは、単に家の外に出したということだけでなく、共同体からの追放、日本語で言う「村八分」を意味していました。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのです。

そんな圧力を受けても、いやされた人は屈することなく、イエスの声に従う道を選んだのでした。この、第9章で描かれた生まれつき目の不自由な人のいやしを前置きして考えると、今週の朗読個所の第10章は生き生きと読み取れると思います。

「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのだから、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」(10・3-5)

羊が、まことの羊飼いの声を知っているという姿は、もう少し踏み込んで考えてよいかもしれません。イエスは、ご自分の命をパンとして割いてお与えになり、羊を養います。羊は、羊飼いであるイエスが十字架上で命をささげ、復活して豊かに命を与えることを知っています。知っているだけではなく、まことの羊飼いやイエスを愛しているのです。

わたしたちも、イエスの招きを自分のこととして受け止めましょう。生まれつき目の不自由な人がいやされて、「あの方は神から来られた方です」ときっぱり答え、イエスの声に従うことを表明しました。当時の雰囲気は、イエスを信じる者は村八分になることも覚悟しなければならなかったのです。そんな圧力にも屈せず、イエスを信じることに意味と価値を見出していると言いつ切りました。

わたしたちは、いやされたあの人と同じ信仰を言い表すことができるでしょうか。5月の連休から始まった「教区代表者会議」は、まさにこのような司祭・修道者・信徒が育たなければ、手遅れになると感じて、代表者を集めたのでした。「羊はその声を聞き分ける」「羊はその声を知っているのだから、ついて行く」わたしたちはイエスの呼びかけを、自分への呼びかけと受け止め、生活の中でどのように当てはめたらよいか考えようとしているのでしょうか。そのような司祭・修道者・信徒が長崎教区に育ってきたとき、代表者会議はその役割を終えるのだと思います。



## 復活節第 5 主日 (ヨハネ 14:1-12)

聖母からイエスへ、イエスから御父へ

浜串教会は本日、岬にある希望の聖母像まえからロザリオを唱えながら聖母行列をおこない、聖母月の総仕上げとして聖母をたたえました。わたしたちが今日復活節第 5 主日の典礼を聖母行列から始めたことは意義深いと思います。今週の福音の学びとして、「聖母からイエスへ、イエスから御父へ」というテーマでまとめたいと思います。

ロザリオの祈りは、皆さんよくご存じのように、「喜びの神秘」「苦しみの神秘」「栄えの神秘」「光の神秘」という各神秘に 5 つの黙想があり、合計 20 の黙想をするようになっています。黙想の進め方は、黙想への招きを唱え、続いて主の祈りを 1 回、アヴェ・マリアの祈りを 10 回、結びに栄唱を唱えます。

今日は特に、ロザリオの祈りを唱えながら行列を行いました。行列は当てもなく移動しているではありません。希望の聖母像から、浜串教会聖堂に向かう行列でした。それは、言い換えれば、イエス・キリストの生涯を黙想しながら、聖母マリアからイエスへと向かう歩みだったわけです。

聖母マリアをたたえるロザリオの祈りは、黙想に示された招きを考えれば考えるほど、わたしたちの心がイエスに向かうように導かれていきます。なぜ、聖母マリアをたたえる祈りなのに、イエスに導かれていく内容になっているのでしょうか。それは、マリアの生涯がイエスに導かれていく生涯だったからです。

マリアはその生涯を通して、イエスに起こるすべての出来事を心にとめて生きられました。多くの場合、マリアにとって理解するのが難しい出来事の連続でした。それでも、すべてのことを心にとめて、思い巡らしたのです。

わたしたちはロザリオの祈りを通して、聖母マリアに心を合わせるように努めます。するとその行いはそのまま、マリアからイエスに心を合わせることに向かうのです。

ですからわたしたちはロザリオの祈りを唱えるとき、マリアからイエスに心が向かっていきます。マリアの中に、イエスがおられると言ってもよいでしょう。わたしたちがマリアに心を合わせるなら、それがそのまま、イエスに心を合わせることになるのです。

聖母行列が、わたしたちに今日の復活節第 5 主日のイエスのみことばをよりよく黙想する助けを与えてくれます。ロザリオを唱えながらの行列で、マリアに心を合わせるとき、マリアの中にイエスがおられ、わたしたちもマリアを通してイエスに心が向かっていきました。

イエスは「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい」(14・11)と言われました。わたしたちがイエスに心を合わせようと努めるとき、「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる」とのみことばにたどり着けるのだと思います。

実際に、マリアの生涯がイエスのみことばの意味を説明しています。マリアはイエスによって、父なる神の人類を救う計画が一つ一つ実現していくのを見ました。そこでイエスが「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる」ことの見えるしるしだと悟ったのです。

ところで、三年間イエスと共にいる弟子たちに、そこまでの理解はなかったようです。トマスはこう言います。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」(ヨハネ 14・5) フィリポはこう言います。「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」(14・8)。

イエスの答えはこうです。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。」

(14・9) 3年間イエスと寝食を共にするというのは、イエスにとっては相当に長い期間であり、イエスのことを分かっただけで十分な時間だったのでしょうか。

しかし、弟子たちが必ずしもイエスの期待に応えられているとは限りません。三年間寝食を共にしていても、何を見て、何を考えていたか、またイエスが話されたことを一つも聞きもらさずに聞いたかと問われると、だれ一人完全に応えることのできた弟子はいないでしょう。

「こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。」弟子たちはイエスの期待するところまでたどり着いていませんが、この弟子たちにイエスはどのように接していかれたのでしょうか。情けない弟子たちだと、投げやりになったのでしょうか。

むしろイエスは、弟子たちが最後の最後にイエスの期待にたどりつけるように「業」を準備してくださいました。それはイエスの死と復活です。イエスが、人間の救いのためにご自分のいのちさえ投げ出してくださいましたことで、イエスの内に御父がおられ、イエスは御父の内におられることを弟子たちは信じることができました。

弟子たちの理解は、すべてを心に納めて、思いめぐらしたマリアのように深くはありませんでした。けれども弟子たちも、マリアを通してイエスにたどりつき、イエスを通して御父を見ることができました。

弟子たちの道のりは、そのままわたしたちの道のりです。わたしたちも、マリアのようにすべてを心に納めて、思い巡らす境地にはたどり着いていませんし、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません」としか言えない信仰者です。

それでも御父はわたしたちに、マリアを通してイエスにたどりつく道を与えてくださいました。またイエスを通して、御父に至る道を与えてくださいました。今日わたしたちは、聖母行列とミサ聖祭を通してその両方を体験しています。

マリアを通してイエスに至る道、イエスを通して御父に至る道を知るわたしたちは、この世にしか歩く価値を見いだせない人々に、救いに至る道があることを知らせましょう。わたしの歩く道を見てくださいと言えりような生き方ができるように、ミサの中で恵みを願いましょう。



## 復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:15-21)

イエスはすべての人をみなしごにはしておかない

最近 NHK で何度も取り上げられたニュースですが、皆さんは御覧になったでしょうか。認知症で家に帰れなくなった女性が保護され、施設に預けられている様子を NHK の特別番組に取り上げたところ、女性が 7 年間行方不明になっていた妻だったという話です。

警察や自治体に名前を間違っ引き継いだりした不運が重なり、迷子になったその日に保護されていたのに 7 年も見つけ出すことができませんでした。その間に認知症が進み、7 年ぶりに再会したご主人は、厳しい現実と向き合うことになったのでした。

原因は人為的ミスだと思います。それをとやかく言うつもりはありませんが、人の犯したミスで、家族が 7 年も目の前から消える。情報がこれだけ共有される今の日本でこんなことが起こりうるということに衝撃を受けました。

昨年度の統計によると、平成 24 年度、認知症やその疑いで行方不明になった人が 9600 人いて、そのうち 350 人くらいは亡くなっています。だれにも見つけてもらえずに亡くなっていく人のことを思うと、胸が痛みます。他にも、何年も行方が分からないままの人がいるのだろうと思います。

今週、復活節第 6 主日に選ばれたヨハネ福音書の朗読で、イエスは弟子たちに「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」(14・18)とおっしゃいました。

わたしは、日本で行方不明になる約 1 万人の方々のことを、重ね合わせて考えました。彼らに、イエスのことばはむなく聞こえるでしょうか。むしろわたしは、だれにも見つけてもらえずにいる人々にも、「あなたがたをみなしごにはしておかない」とのイエスのことばが届き、そして弁護士、真理の霊が与えられるに違いないと思うのです。

7 年間身元が不明だった女性は、NHK の報道によってたくさん情報が寄せられ、それがきっかけでご主人との再会を果たしました。自分がだれであるかを何も話せない状態になって、NHK が報道したとは言え、見つけてもらえたというのは、やはり「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」このイエスの約束が、社会を動かしたのだと考えています。何も話せない人であっても、御父が遣わしてくださった弁護士が、この人に代わって証言し、守ってくださったのだと思うのです。

わたしたちにみことばを当てはめてみましょう。イエスは、無条件で「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」と約束してくださる方ですが、イエスを信じるわたしたちは、イエスを知らない人以上にみことばを信じて生きる必要があると思います。

つまり、イエスが無条件で「みなしごにはしておかない」と言ったからといって、自分から何も行動しないのではイエスを知らない人と変わらないと思うのです。イエスのみことばに信頼している証しとして、

イエスの掟を守って生きることが期待されています。イエスの掟とは、「心を尽くして神を愛し、隣人を自分のように愛する」ということです。

掟を守って生きると、何が明らかになるのでしょうか。イエスを知らない人にも無条件で「みなしごにはしておかない」というのであれば、イエスの掟を守って生きるキリスト者にはなおのことイエスの約束がとどまるということです。

そしてわたしたちの証しを、御父から遣わされる弁護者、真理の霊は支えてくださいます。イエスが示された愛の掟を守って生きるキリスト者が身近な場所で確実に目に留まるようになれば、愛の掟を与えてくれたイエスを知り、イエスにたどり着く人がもっと増えるでしょう。

そのときわたしたちは、「かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におり、あなたがたに分かる」このみことばに触れることとなります。

愛の掟を守るわたしたちの生き方が、多くの人に知られますように。愛の掟を守るキリスト者の中にイエスがとどまっておられ、聖霊がキリスト者の証しを支えていることを多くの人が認めますように。

イエスは、ご自分を信じる人をみなしごにはしておかず、ご自分を信じる人を通して、イエスを知らない人もみなしごにはしておかないお方なのです。

主の昇天(マタイ 28:16-20)



## 主の昇天 (マタイ 28:16-20)

イエスはわたしたちといつも共におられる

主の昇天の祭日を迎えました。イエスが天に昇られたことを、弟子たちを含めすべての人が喜ぶために、出来事をどのように理解するか、少し考えてみましょう。今週のまとめとして、「天に昇られたイエスはすべての人を見守ってくださる」としたいと思います。

最近釣りに行っています。これまではもったいないなあと思われるほど、ボートも遊んでいることが多かったのですが、今年は割合よく使っていると思います。先週は浜串地区の定置網から少し沖に出たところで、50cm くらいのマゴチを釣りあげました。

おもしろい夢も見ました。ミズイカを釣り上げている夢です。わたしは浜串小教区に赴任してから一度もイカ釣りに行ったことが無いのに、なぜあんな夢を見たのでしょうか。ミズイカが逃げようとしてグイグイ引っ張っている感触もありましたし、慎重にタモ網ですくい上げる感覚もありました。不思議な夢でした。

さて、主の昇天について、2つのことを考えたいと思います。1つは、天に昇られたイエスをわたしたちはどのように思い浮かべたらよいかということです。もう1つは、天に昇られたイエスとわたしたちは、どのような関係にあるのかということです。

まず、イエスが天に昇られたことをどのように理解したらよいのでしょうか。さきほどわたしが見た夢のことを話しましたが、人間は実際には実現不可能なことまで想像したり夢を見たりすることができます。その能力を最大限発揮して、ご昇天の出来事を思い巡らしてみましょ。

わたしたちの住むこの地球は、とても大きいので、ふつうであればその大きさを把握することはできません。ところが、宇宙飛行士は、地球から何万キロも離れるため、地球の大きさを実感することができます。わたしたちも宇宙飛行士が撮影した映像を見ることで、彼らが見ているものに近い地球の姿を想像することができるわけです。

人類の知恵のおかげで、わたしたちは実際には見ていなくても、青い地球を想像し、見ることができます。ただし、人間の知恵は限界もあります。遠くから眺めた場合、どこまでいっても地球は半分しか見ることができないのです。見えている反対側は、見渡せないのです。

天に昇られたイエスに思いを向けてみましょう。イエスが天に昇られたということは、天のすべてを見渡しているということになります。天とは、地球だけを指しているのではなく、神が造られたすべてのもののことです。天におられるのですから、太陽も月も星も、この地球も、すべてを見渡すことのできる姿でおられるのではないのでしょうか。

わたしたちはつい、イエスが天に昇られたというとき、何かわたしたちと背格好が同じイエスを考え、そのイエスがどこか遠い場所まで昇られたことを考えがちです。もっと大胆に考えてよいのではないのでしょうか。この地球も、太陽も月も星も、今は天に昇られたイエスの手の中

にある。そう考えれば、わたしたち人類すべてがイエスの見守りの中にあることも理解できるのではないのでしょうか。

次に、天に昇られたイエスとわたしたちは、今どのような関係にあると考えるべきでしょうか。朗読されたマタイ福音書第 28 章、弟子たちを派遣する場面がその理解を助けてくれます。イエスは弟子たちにこう言われました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28・20)

これまでわたしは、天に昇られたのに、いつもあなたがたと共にいると言われるその意味が今一つ掴めずにいました。けれども、イエスが天と地の一切の権能を授かっている、天と地のすべてを見渡していると考えてみたときに、天に昇られたイエスがもっと近くに感じられたのです。

今、イエスがこの地球を包み込むように見守っておられるとすれば、それは確かに、世の終わりまで、いつも共にいてくださると言えます。

「どこにイエスはおられますか」とイエスを探す必要はありません。イエスは天におられ、すべてを治めておられますから、わたしたちと共におられるのです。

イエスが共におられることをより身近に感じられるようになったとき、わたしたちの目は次の目標に向けられていきます。わたしたちは洗礼によってイエスの弟子、イエスの友とされたのですから、すべての人にわたしたちの生き方を示し、イエスに導かれて生きる道に招く必要があるのです。

わたしたちに託された使命は、イエスが共にいてくださることで実現可能になります。もし、今年主の昇天を思いめぐらしたことでイエスが共にいてくださることがより近く感じられるようになったなら、今年託された使命を果たすまたとないチャンスかもしれません。

イエスが共にいてくださる生き方、イエスの導きに心を開いて生きる道が、あなたにとって意味と価値があるなら、わたしたちの生き方に意味と価値を見出す人も必ず現れると思います。その人に巡り合えるように、また同じ価値観を分かち合える人を教会に招くことができるように、天に昇られたイエスに、聖霊の恵みを願いましょう。

わたしたちが願い、まもなく与えていただく聖霊は、より確実に、イエスが共におられることを感じさせてくださいます。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 20:19-23)



## 聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまる聖霊

聖霊降臨の主日を迎えました。出来事に親しみを持てるよう学びを得ることにしましょう。聖霊降臨の主日説教をまとめるテーマを「分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまる聖霊」としたいと思います。

6月に入りました。月が変わった途端に梅雨に入りました。6月、長崎教区の信徒が意識してほしいことが1つあります。深刻な話ではないのですが、毎年6月に入る予定です。お分かりでしょうか。

答え合わせをしましょう。6月は、長崎教区司祭が黙想会に入る月です。それと関連して、シスターさんが賄いをしていている場合は、そのシスターも6月のうちに黙想会に参加することが多いです。

どういうことが起こるのでしょうか。期間中は、皆さんの平日のミサができなくなります。よほどのことがない限り、司祭は戻りません。ちなみに最近の教区司祭黙想会は前半日程と後半日程に分かれています。

わたしも含め、上五島地区のほとんどの司祭が、再来週からの後半日程に参加します。どなたかお亡くなりになるとか、そういうことでもなければ、黙想会を抜け出すことはありませんので、第4週は司祭が1人もいなかった迫害の時代のように、各自で信仰を守り抜いてください。

6月は賄いをしてくださるシスターも黙想会に行ってしまう。桐修道院から通っているうちの賄いシスターは11日から20日までの10日間黙想です。皆さんには直接影響はないのですが、家庭で奥さんが10日間留守にするのと同じことが司祭館でも起こることになります。

わたしの場合、食事が問題です。毎年、女性部に食事作りでご迷惑をかけているので、今年こそは女性部の手を煩わせずに過ごそうと思っています。その代わり、頻繁に魚を釣りに行きたいのでお許しください。

さて先週、主の昇天の祭日の説教で、天に昇られたイエスは、天と地の一切の権能を持っておられるので、天のすべてをご自分の手の中に納めておられるように見守っておられると話しました。天におられるイエスは遠くに行ってしまったのではなく、むしろいつも共にいてくださると感じられる姿に移られたということでした。

そのイエスは、ご昇天の後十日目、五十日祭の日に聖霊を注いで、いつも共にいてくださることをより感じられるようにしてくださいます。第一朗読、使徒言行録によると、「霊」は「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」(使2・3)とあります。「一人一人の上にとどまった」とあるのが、出来事を身近に感じさせます。

弟子たちは、聖霊を受けた後にあらゆる国の人々にイエスの福音を宣べ伝えなければなりません。実際の宣教では、弟子たちが出かけて行った先で、それぞれの弟子たちにそれぞれの問題が待ち受けていることでしょう。その時に、一人一人の上にとどまってくださる聖霊が、イエスの話したみことばをことごとく理解させ、勇気を与えてくれるわけです。一人一人違った問題に直面していても、その一つ一つに聖霊が適切

に助けをくださるので、弟子たちはイエスがいつも共にいてくださると強く感じたのではないのでしょうか。

聖書の中で、聖霊はどのような助けを与えてくれるのでしょうか。第一朗読の使徒言行録では、「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした」とあり、話を聞いた人々は「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っている」（2・11）のを目撃したのです。

これは、聞く人が分かるように、神の偉大な業を語る力が与えられるということです。人は、わたしたちの信仰に興味を持った時に、「あなたの信じている教えはどんなものか」と尋ねることでしょう。けれどもわたしたちの言葉はつたなく、十分に伝えることができないかもしれません。聖霊はわたしたちを強めて、聞く人が分かるように、言葉を授けてくださるのです。

福音朗読のヨハネ福音書では、聖霊を受けると、赦しを与える力を受けるとイエスは教えます。今日の場面で「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」（20・19）とあります。十字架にはりつけにされているイエスを置いて逃げ出し、自分の命惜しさに隠れていたのです。彼らはイエスに何重にも過ちを重ねていたことになります。

けれどもイエスは、彼らを責めず、お赦しになりました。しかも、弟子たちがイエスの約束した聖霊によって、人を赦す権能を受けることになったのです。イエスが共にいてくださるとは、まずあなた自身が赦されているという実感を得られる体験であり、先に赦されたことを感謝して、人を赦す。赦しの恵みが周りの人に広がる体験でもあります。弟子たちは、赦されるはずのない過ちが赦され、さらに人を赦す道具として使ってくださいることを知って、イエスが共にいてくださることを実感したのです。

わたしたちにも、弟子たちの体験は繰り返されます。イエスの教え・生き方を伝えるのにつたない言葉しか見つからなくても、聞く人がそれを理解してくれる。そこにイエスが約束された聖霊が働いています。とても赦してもらえないような過ちが赦されて、さらに人を赦してあげる力をいただいたと感じるなら、そこに聖霊が働いているのです。

今この時代にも、イエスが約束された聖霊は働き続けます。神の言葉を届けることや、赦された者として人を赦して、聖霊が今も働いていることを人々の前に証ししましょう。特に堅信の秘跡でいただいた聖霊の七つのたまものが、わたしたちの中で十分に働くように、このミサの中で取り次ぎを願いましょう。



## 三位一体の主日 (ヨハネ 3:16-18)

わたしたちの言葉で三位一体の神を伝える

三位一体の主日を迎えました。「わたしたちの言葉で、三位一体の神を伝える」ということについて学びたいと思います。

ここ数週間小学生高学年と中学生に、主の昇天からの一連の祭日を覚えさせようと口を酸っぱくして言い続けています。一連の祭日は、「主の昇天・聖霊降臨・三位一体・キリストの聖体・イエスのみ心」です。

ところが、子供たちは頭は柔らかいので覚えるのは簡単に覚えるのですが、覚えたことがなかなか定着しません。来年まで覚えているかといえば、おそらく全滅だろうと思います。覚えたことを、忘れないでもらうためには、どうしたらよいのでしょうか。

それに比べると、高齢者は一度覚えるとなかなか忘れません。新しい祈りが示されればそれを忠実に覚え、もはや祈祷書を開かなくとも、一生涯唱え続けることができます。その能力には頭が下がります。

きっと高齢者の方が復活されたイエスについての一連の祭日を覚えると、一生涯忘れないのだと思います。もしかしたら、高齢者の皆さんに先に覚えてもらって、高齢者から小学生中学生に教えてあげるほうが、子供たちは身につくのかもかもしれません。

小学生中学生にも、高齢者にも当てはまらない年齢層の方々がおられます。わたしもそうかもしれません。この中間の年齢層の方々の特徴は何でしょうか。特徴は、どのようにしたら記憶することができるか、見つけ出すことができる人々だということでしょう。

わたしが、頭の柔らかい時代をもはや過ぎてしまってから記憶したものが2つあります。旧約聖書・新約聖書の全巻の書名と、ニケア・コンスタンチノーブル信条です。どちらも、もっと頭の柔らかい時代に覚えていたならば苦労はしなかっただろうにと思いますが、必要に迫られて、40代になってから苦労して覚え、暗唱できるようになりました。

もしも、中間の年齢層の方々が、さまざまなことを苦労の末に理解し、覚え方を見いだしてくださるなら、教会はもっと発展するのではないだろうかと思います。小学生・中学生までの頭の柔らかい世代、高齢者の世代、そして中間の世代。この3世代がそれぞれの特徴を生かして教会の教えを身につけ、切れ目なく信仰を生きてくださるなら、教会の未来は明るいと思うのですが、どうでしょうか。

福音の学びに移りましょう。朗読された部分は、ニコデモというファリサイ派の議員が夜にイエスのもとを訪ね、イエスの教えを受ける場面で語られていたものです。イエスは、ご自分の父である神の、世に対する深い愛をニコデモに語って聞かせました。イエスが、父である神について語るとき、そこには必ず三位一体の神の神秘が示されていると考えるべきです。つまりイエスが父なる神について語るとき、そこには「父と子と聖霊」の三位のお姿が読み取れるのです。

けれども皆さんは不思議に思うでしょう。「神は、その独り子をお

与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(3・16)確かに御父と御子は読み取れるけれども、聖霊は読み取れない。聖霊はここでは示されていないのではないか。そう思うかもしれません。

聖霊はどこに示されているのでしょうか。それを知るために、聖霊の働きをもう一度思い起こしましょう。イエスは弟子たちのもとを去る前に、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」(ヨハネ 14・26)と語られました。

御父が御子をお与えになったほどにこの世を愛しておられると教え、理解させてくださっているのは、実は聖霊の働きです。ですから、弟子たちを含めすべてのキリスト者が御父の世に対する深い愛を知ることができたのは、そこに聖霊がおられ、働いてくださるからです。ですから、御子イエスが御父について語る場面には常に聖霊が共におられ、わたしたちにイエスの言葉の意味を理解させてくださっているのです。

それでもある人は言うでしょう。「眼を皿のように見開いても、聖霊の『せ』の字も認めることができません。」わたしはその人にこう言いたいと思います。この聖書は日本語に訳された聖書です。もともとイエスは、お住まいになっておられた土地の言葉で弟子たちに語られたはずです。その言葉はアラマイ語だったと言われています。

イエスの言葉が、福音記者によってギリシャ語で書き記されました。この時点で、ギリシャ語を理解する人々にもイエスの言葉が届くようになります。しかも、一字一句間違ふことなく、正確に届くのです。

正確に届くのは人間の努力でしょうか。そうではありません。確かに福音記者は最大限の努力を払ったでしょう。けれども最終的に、イエスの言葉を余すところなく伝えてくれたのは聖霊の働きだったのです。

そして時間が経過する中で、ギリシャ語の聖書はラテン語に翻訳されました。ローマ帝国がヨーロッパ全域に広まると、ラテン語の聖書も一気に広まりました。ギリシャ語からラテン語に翻訳するとき、イエスの言葉を漏れなく伝えたのは人間の最新の注意を払った上での、聖霊の働きです。その後も数限りない言語に翻訳されました。

日本語への翻訳にも聖霊が働いて、わたしたちにイエスの言葉を忠実に届けてくれたのです。わたしたちが手に取り、目にしている聖書は、御父が御子を与えるほどこの世を愛し、神の思いが聖霊によって全世界に誤りなく理解されていることの見えるしるしではないでしょうか。わたしたちが印刷された聖書を手に取り、イエスの言葉に耳を傾けると、そこには「父と子と聖霊」の三位一体の神がおられるのです。

わたしたちが信じる父と子と聖霊の三位一体の神を、わたしたちの言葉で人々に伝えましょう。「父と子と聖霊の皆によって。アーメン」と、日本語でためらふことなく十字を切りましょう。あなたが信じている神を十字架のしるしによって示す時、三位一体の神はわたしたちに働いて、見る人聞く人に神の神秘に触れさせてくださいます。恐れずに三位一体の神への信仰を表明する恵みを、このミサの中で願いましょう。

キリストの聖体(ヨハネ 6:51-58)



## キリストの聖体 (ヨハネ 6:51-58)

キリストの思いを分け合う者として生きよう

黙想会に行ってみます。皆さんの平日のミサができなくなるのでご不便をおかけしますが、前にも話した通り、迫害の時代に信徒だけで260年間信仰を守り通した、長崎のクリシタンの日々を思いながら、信心業を通して信仰を維持し続けていただきたいと思います。

わたしが黙想会に行くと、ホッとする生き物がいるはず。船隠しの沖と言いましょか、神ノ浦の沖と言いましょか、そこで悠然と泳いでいる真鯛は、一週間ほどは確実に生き延びることができるからです。ただし一週間だけです。

梅雨に入ってから、数えるのも面倒になるくらいの真鯛を釣りました。何人かは、お裾分けにあずかっているはず。釣れたのはほとんど真鯛でした。どうしてほかの魚は釣れないのかなと思っていたのですが、先週はその原因の一端に思い当たりました。

それは、仕掛けを巻き上げる速さに原因があるのではと思っています。そこで、海底から10mは、これでもかというくらいの遅い巻き上げを試してみました。すると、今まで食いついてこなかった魚があれこれ釣れました。あの釣りは言わばパン食い競争の進化したもので、ぶら下がっているパンは一定の速さで移動しています。足の遅い魚はいつまでたってもパンに食いつきませんが、真鯛は足が速いので、毎回食いついてくるのだと思いました。他の説明があれば、あとで聞かせてください。

魚のおすそ分けにあずかった人は、食卓の一部を、わたしの釣った魚で分け合ってくれた人々です。一つの食べ物を、多くの人で分け合うということは、多くの人、同じ一つの食べ物で、同じ喜びを味わうということになります。

食べ方はいろいろだったかもしれません。わたしは塩コショウをして、蒸し器で蒸して、ポン酢で食べました。皆が皆そうだったわけではないでしょうが、一つの食べ物が、多くの人に渡っていくと、喜びも大きくなる気がします。

今日はキリストの聖体の祭日です。イエスは、ご自分を食べ物として用意して、多くの人、その食卓にあずかれるようにしてくださいました。イエスがご自分を食べ物としてお与えになるとき、たとえば日曜日には、何億人もの人が一つの食べ物を食べ、喜びを分け合うのです。

わたしたちは、食べ物によって人間の体がある一定の方向に形作られることを知っています。肉を食べると言っても、鶏肉を中心に食べる人、豚肉を食べる人、牛肉を食べる人、それぞれが形作られていく方向は違ってくると思います。または、野菜を中心に食べる人、お米を多く食べる人、それぞれの体がある一定の方向に仕向けられていくわけです。

ではミサに参加して、聖体をいただく人々は、どのような姿に形作られていくのでしょうか。ご聖体は、小麦粉で作られたパンの小さなかけらです。ですから普通の食べ物のように、拝領したことで筋肉を作る

とか繊維質を摂取するとかそういうことではありません。けれども、キリストの御体と御血は、すべての人にとって同じ一つの食べ物ですから、きっとすべての人がある一定の方向に形作られていくのではないのでしょうか。それは、どのような姿でしょうか。

2つの考え方を示したいと思います。1つは、永遠の命を得、復活へと招かれていくということです。ご聖体をいただくことで、わたしたちの中には永遠の命が常に保たれ、この状態が保たれているので復活へと招かれることとなります。わたしたちは時間と場所の制約の中でしか生きられません、その有限の体に、永遠の命が保たれるのです。それは、「キリストの体がそこにある」ということなのだと思います。

もう少し踏み込んで言うと、聖体を拝領するとは、キリストの体の一部を持つと言えるかもしれません。さまざまな人がいます。職業も、置かれている環境も、健康状態もさまざまです。こうした人が同じ一つの聖体をいただき、キリストの体的一部分を持っているのです。理解できる人、どうしても理解できない人、受け入れることができる人、どうしても受け入れられない人、さまざまな人がいますが、同じキリストの聖体によって養われたキリストの体的一部分なのです。

もう1つの考え方は、キリストの聖体を受けたなら、「キリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように行い、キリストのように愛する」人に向かっていくのではないのでしょうか。

しかしながらこの考え方は、先の考え方よりも理解するのが難しいかもしれません。「わたしはキリストのように考えているけれども、あの人はそうではない」このように考えてしまうからです。わたしと正反対に行動する人、考える人が、どうしてキリストのように考え、キリストのように行動している人だと言えるのでしょうか。

正反対の考えや行動の人ですが、わたしたちは皆、イエスによってこの食卓に招かれました。そして間違いなく、この祭壇から、一つのパンをいただいています。それは、イエスが一人ひとりに、ご自分の御体と御血を分けているのと同じです。

イエスが食べ物となって、違う考えの人同士が一つの同じ喜びを味わえるようにしてくださったのです。イエスが可能にしてくださったことを、わたしのほうから「わたしとあの人が同じ喜びを分け合うなど、そんなことができるはずがない」とどうして言えるのでしょうか。

そこで今週は、お互い一つのことを思い巡らすことにしましょう。わたしたちは一つの祭壇から、同じ一つのパンを分け合っていますが、意見を出し合うと食い違うことがあります。対立することさえあります。どのようにしたら、同じ一つのパンを分け合った者同士、協力できるのでしょうか。そのことを考える週にしてください。

キリストの聖体を受けて、およそ一週間聖体を拝領できないかも知れません。聖体を受けて永遠の命を与えられ、復活に招かれました。さらにキリストの思いを分け合う者同士、一致して神の国のために働くことができますように、ミサの中で恵みを願いましょう。



## 聖ペトロ聖パウロ使徒 (マタイ 16:13-19)

使徒の生き方を鏡として生きよう

聖ペトロ聖パウロ使徒の祭日を迎えました。日曜日と、この日が重なるのは数年に1度しかなくて、わたしが司祭になってからの22年の間には今回で4回目です。

ちなみに次に回ってくるのは2025年なので、確実にこの場には立っていないと思います。両使徒の祭日にあたって、2008年の説教を参考にしながら「使徒の生き方を鏡として生きる」とまとめたいと思います。

黙想会に参加してきました。説教師は、フランシスコ会の桑田神父さまでした。近づきやすい雰囲気を持った神父さまで、共同の食事の時に近くの席に座って談笑しました。ふだんの黙想会でしたら、説教師の神父さまと雑談するなんてとんでもないことです。

小教区に戻ったので、これからゆっくり説教に耳を傾けるつもりですが、今パッと思い出せる内容を紹介しますと、黙想会を機に、わたしたちがどれほど神さまに愛されているかを考えなければならぬのだと思わせていただきました。

考えるヒントとして、桑田神父さまはこの人生を終えて神さまの前に立たされると、2つの巻物を見ることになるというたとえを話してくれました。巻物の1つは、「自分が果たせた善い行いを綴った巻物」です。そこには、自分が全く記憶していない善行まで綴られています。

もう1つの巻物は、「犯した過ちを綴った巻物」です。善行ですら、記憶にないことが綴られていたのだから、過ちはそれはもう思い出せない過ちが数限りなく綴られているに違いないと推測できます。そして恐る恐る、犯した過ちが綴られた巻物を開いてみると、イエスの十字架上の贖いによって、巻物には何も書かれていなかったというのです。

これは、どんなに感謝しても感謝しきれないことです。わたしたちはこんなに愛されているのだと、黙想会のようなゆっくりとした時間の中で考えることは必要なことだと思いました。

ではここから両使徒について学びを得ることにしましょう。まず福音朗読から聖ペトロについて考えてみましょう。ペトロに期待されている1つの特徴は、「イエスの呼びかけに答える」「イエスの問いかけに答える」ということだと思います。今週の福音朗読では、イエスの「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(16・15)という問いかけに対して、シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」(16・16)と答えています。

ほかにも、イエスが「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」(14・27)と話しかけた時に、「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」(14・28)と答えています。ペトロは、イエスに答えるという使命を受けた使徒でした。

ペトロはイエスの問いかけ、呼びかけに答えたわけですが、それはそのまま、イエスに最後までついて行ったということでもあります。た

だ返事をしたということではなくて、ペトロは困難を感じた時も、イエスに信頼を寄せて、最後までついて行ったのです。そのことが、最後にはペトロの殉教につながっていきます。言い伝えによると、ペトロはローマで殉教したのですが、イエスと同じはりつけの形は自分にはもったいないことだということ、逆さにはりつけになったとされています。

そこでペトロの姿から1つの模範を学びましょう。それはイエスの呼びかけ、問いかけに、わたしたちも答えるということです。何も優秀な答えをイエスが求めているわけではありません。呼びかけに、「はい」とか「引き受けてみます」と答えることが大切です。ペトロは常に、答えは不十分かも知れないけれども、問われれば自分の言葉で返事をしたのです。1人ひとり、「わたしはイエスに問われたら答えてみます」という気持ちをペトロに倣って育てていきたいと思えます。

次に、聖パウロについて、第2朗読を通して考えてみることにしましょう。第2朗読は「テモテへの手紙」ですが、選ばれている箇所からは殉教の時が近づいていることが分かります。「世を去る時が近づきました」（4・6）とあるからです。死を目前にしての手紙なのですが、落ち着いた、静かな心でその時を待っていることが伝わってきます。

人生の最期の時を、落ち着いた静かな心でいられるというのは、並大抵のことではありません。そこまでたどり着くためには、それなりの自信が必要でしょう。パウロはこれまでの歩みに自信があるので、静かな心でいられたのだと思います。「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走り通し、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです」（4・7-8）。

パウロは「義の栄冠を受ける」と言っていますが、「義の栄冠」とは何なのでしょう。殉教の後にあるものですから、それは「永遠の生命」ということになります。パウロは、なすべきことは果たしたし、「永遠の生命」が得られるので、心静かに過ごせるのです。

わたしたちは「永遠の生命が得られるので、心静かにいられる」ときっぱり言えるのでしょうか。本当に、永遠の生命への希望だけで不安なく過ごせるのでしょうか。わたしたちが迷いなくこの生き方を貫くには、日頃から永遠の生命が何にも代えがたい価値があると理解している、常々そう思っているものでなければパウロの心境にたどりつけませんでしょう。

実生活は、さまざまなものに価値を見て、「永遠の生命」だけを見つめて生きているとは言えないと状態です。ですから、残念ながら、パウロのような心静かな状態で人生の最期を迎えるのは難しいのではないのでしょうか。最後まで心残りに思うことがいろいろ浮かび、あーしておけばよかった、こうしておくべきだったと悔やむのではないのでしょうか。

聖パウロの生き方は、「永遠の生命」をしっかりと見据えた生き方でした。パウロから、わたしたちも同じ生き方を写し取りましょう。「わたしが持っているのは、棄てることができない教えです」ときっぱり答え、永遠の生命を見据えて生きていく。そのような信仰を目指して歩んでいきましょう。



## 年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

あなたの重荷を軽くしてくださるイエスに近づく

年間第 14 主日、これから待降節の前まで年間の主日が続いていきます。どうかするとあっという間に待降節、降誕節になってしまう危険もあります。各自で具体的な過ごし方を持ってこれからの年間の季節を過ごすきっかけをつかむことにしましょう。今週のまとめとして、「あなたの重荷を軽くしてくださるイエスに近づく」としたいと思います。

皆さまのご好意により、7月3日聖トマの霊名の祝いを本日用意していただきました。心から感謝申し上げます。だんだん機敏さが無くなり、思いついたことをパッと実行できなくなっておりました、皆さんもどかしい思いをしておられることでしょう。これからはわたしに本当にできることは何か、よく考えてそこに力を集中したいと思います。

さきほど、教会の暦に沿った具体的な過ごし方を考えましようと言いました。教会暦は待降節から始まります。一年を一回の登山になぞらえてみました。わたしは登山のことを実際には知りませんが、「準備」「訓練」「実際の登山で味わう苦しみ」「登頂した喜び」「無事に下山」という流れになると思います。

すると待降節は、登山の前に必要な計画作りや情報収集といった準備に当たります。信仰生活の中では、わたしたちが信ずべきこと、守るべきことの再点検などにあてはめられます。降誕節は、訓練です。イエスも宣教活動を開始するまで、ヨセフとマリアのもとでお暮しになりました。わたしたちも信ずべきこと、守るべきことにどんな質問をされても何かしら答えられるように訓練をします。

準備と訓練を経て登山がはじまりますが、当然苦しみも味わうことになります。山が高ければ高いほど、酸素は少ないし、足場は悪くなるからです。わたしたちの信仰も、誘惑を受けたり、同じ信仰の人が全く教会に足が向かわないのを見て無力感を覚えたりするでしょう。その苦しさを乗り越えなければ、「信仰していて良かったなあ」という気持ちにはなれないと思います。

登山は苦しみの連続ですが、登頂し、そこから眺める景色はすべてを忘れさせるでしょう。イエスの復活、昇天、聖霊降臨の恵みは、これまでの試練や苦難を忘れさせる素晴らしいひと時です。この喜びがあって、わたしたちは信仰を続けていけるわけです。

そして登山は無事に下山して完成します。登頂しても、帰り着くことができなければ、その登山は失敗です。登頂して味わった達成感と喜びを携えて、慎重に、かつ大胆に行動する必要があります。わたしたちの信仰の歩みで、復活節を終えてからの年間の季節は、この下山にあたる部分です。復活によって神の栄光を表したイエスを心に携え、復活の喜びを告げ知らせるために、人々が住む社会に派遣されていきます。この一連の繰り返しで、わたしたちは典礼暦の一年を過ごしているのです。

福音に入りたいと思います。イエスは「疲れた者、重荷を負う者は、

だれでもわたしのもとに来なさい」(11・28)と言い、「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(11・30)と励ましてください。わたしがこのことを考えるきっかけをいただいた経験をお話しして、皆さんと分け合いたいと思います。

長崎教区には約100人の教区司祭がいます。教区司祭が亡くなると、できる限りすべての用事を横に置いて葬儀に参列します。わたしは22年前に司祭になりましたが、それから5年くらいは亡くなった司祭を納めた棺を聖職者墓地まで担いで行き、土葬していました。感じとしては、浜串教会から後ろ浜串のバス停まで担いでいくような感じでした。

おもに、亡くなった司祭と関わりのある司祭が棺を担ぐのですが、担ぎ手の司祭の身長がばらばらだったりしますと、ある司祭にはより棺の重さがかかったり、ある司祭はあまりに背が低くて、担いでいると言うよりもぶら下がっているようなこともありました。

わたしも何度か棺を担ぎましたが、たいてい亡くなった先輩司祭たちは自分たちより体が小さいのに、なぜか棺には重さを感じました。わたしはその重さは体の重さだけではない、なにか年数から来る存在の重さのようなものを感じたものです。

時には、「少しぐらい手を抜いても、ばれないだろう」という気持ちが起こることもありました。ところがそういう時に限って、「しっかり担げ。気を抜くな」というお叱りの声を受けたのです。必ずしもわたしに言ったものではなかったかもしれませんが、だれかが気を抜くと、それが全員に重さとして伝わり、厳しさを教えるために注意する司祭もいたわけです。

棺に寄り添い、真剣に棺を担ぐ中で、わたしはこう考えました。イエスが「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」(11・29)と言ったのは、真剣に事に当たってみてようやく分かるものなのだとすることです。棺を担ぐのは決してやさしいことではありませんが、気を抜かずに真剣に担ぐなら、負いやすいものになり、重たいはずのものが軽く感じられたのです。

司祭になって6年目くらいには、長崎市から土葬の許可は下りなくなりました。それからは聖職者墓地にご遺体の棺を担ぐことは無くなりましたから、今の40代後半までの司祭が、この経験をした最後の世代だったことになります。現役の司祭が亡くなった司祭を担ぐという体験が、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」という呼びかけになっていたのだと思います。

肩に食い込む重みは、今でも忘れません。その重みを感じながら、これからも司祭としての務めを果たしていくつもりです。それは希望のない重荷ではなく、むしろ喜びをかき立てる重荷です。信仰の歩みは、時として肩に食い込む重荷ですが、その荷が負いやすいもの、軽いものとなるのは、真剣にその重荷を担う時です。それは、真剣にイエスに近づくことでもあります。わたしたちがより真剣にイエスに近づこうとするとき、イエスがわたしたちの重荷を軽くしてください。



## 年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

辛抱強く御言葉に耳を傾ける

今週の福音朗読では「種を蒔く人」のたとえが選ばれました。今週のまとめとして、「辛抱強く御言葉に耳を傾ける」としたいと思います。

子どもたちの夏休みも近付いてきました。夏休み入ってすぐに、ドッジボール大会が待っています。今日午後1時半から、参加教会が集まって対戦チームの抽選会があります。中田神父も抽選に加わるので、できるだけ強くないチームが当たるように、小学生とその保護者の皆さんはお祈りしておいてください。

練習に参加した子供、試合に参加した子供にはごほうびとして「大村市民プール」を予定していますが、たとえば3試合して3戦全敗だったら、「愛らんどプール」ということもあるかもしれません。中田神父が「なるほどこれなら連れて行ってもいいなあ」と思う結果を出してほしいと思います。そのためにはまずは練習です。

福音の学びに移りましょう。イエスはたとえを用いて語りました。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。」(13・3)何をたどっているのでしょうか。2つの方向から考えてみました。1つは、良い土地に落ちた種だけに価値を置いて話をしたという考えです。もう1つは、道端に落ちた種、石だらけで土の少ないところに落ちた種、茨の間に落ちた種、良い土地に落ちた種、どれも同じ価値でとらえているという考えです。

どちらがこのたとえを理解するのに適しているかは、当時の農夫たちの種蒔きの仕方を知ると見えてくるとと思います。イエスが人々と共に暮らしたパレスチナではまず種を蒔き、その後で耕していました。刈り入れ後の農閑期に村人が行き来すればそこには道ができました。しかしその「道」も、種を蒔けば耕されて農地に変わります。

そうした習慣があったので、農夫は「道」にも種を蒔きました。また農閑期にいばらが生えても、いずれは耕すので、気にせず種を蒔いていました。すると、このたとえに登場する農夫は、どの種にも芽を出し、実をつけることを平等に期待していることが分かります。無駄になる種もあるかもしれないと分かっているはずですが、「この種は無駄になる種」「この種は実をつける種」と区別しているわけではないようです。

こうした背景を踏まえると、農夫は常に自分の蒔いた種が芽を出し、実をつけてほしいと期待していると理解したほうがよいと思います。つまり、どの種も同じ価値があるものとして見ているということです。

ではイエスがたとえに取り上げた「種を蒔く人」とは誰のことで、「種」は何を表すのでしょうか。いろいろな可能性を含めて話しているのでしょうか。わたしは、イエスの頭の中には、ただ一人の「種を蒔く人」が思い描かれていると考えています。それは、父なる神です。そして父なる神が蒔く種とは、「イエス・キリスト」のことではないのでしょうか。

「種を蒔く人」を父なる神、「蒔かれる種」をイエス・キリストとしてもう一度たとえの全体を読み返してみましょう。父なる神は、御子

イエス・キリストをこの地上に「種」として蒔いてくださいました。御子がお生まれになった場所は家畜小屋でした。ほとんど誰にも知られずに誕生の瞬間を終えたのです。

イエスはあちこちに出かけて神の国を告げ知らせました。心に深く根付かない人々にも、御言葉を土の中に埋めてしまって実を結ばない人々にも神の国を語りました。もちろん、御言葉を聞いて、思い巡らし、信じて受け入れる人々もいました。

イエスはあらゆる場所で、分け隔てなく御言葉を宣べ伝えたのです。すべての人、無駄になるかもしれない人も含めて、あらゆる人に豊かな実りを期待して御自分を御父から蒔かれた種として与え続けたのです。イエスを理解する人のためにも、理解せず、いのちを狙う人のためにも、御自身を種として、すべて与えつくしたのです。

朗読の終わりにたとえ話の説明が加えられています。これは、後の教会が付加と考えられています。今回のイエスのたとえ話を、マタイ福音書を読み聞きながら生きた共同体は、「種を蒔く人」は唯一のお方であり、蒔かれた種もイエス・キリストただ一人だと理解していたのです。

わたしたちはどのように受け取ればよいのでしょうか。父なる神は、すべての人に御子イエス・キリストを種蒔きしてくださいました。どんな環境にある人にも、実を結んでくれると期待して、分け隔てなく種蒔きは行われました。あとは、父なる神が蒔いた種である御言葉を、わたしたちがどのように扱うかにかかっています。

蒔かれた相手によって御言葉という種の価値が重かったり軽かったりするものではありません。すべての人に、同じ価値ある御言葉が与えられています。何か、工夫をして、受けた御言葉を実らせたいものです。

そこでわたしは、皆さんに「辛抱強く御言葉に耳を傾ける」ことを勧めたいと思います。どれくらい辛抱強く耳を傾けるかということ、心に留まった御言葉を、たとえば 30 回繰り返して読み込むくらい辛抱強く向きあってみましょう。すると、見えなかったもの、気づいていなかったことにたどりつけるのではないかと思います。

置かれた身分によっては、60 回繰り返して読む辛抱強さが必要です。もっと言うと、司祭は御言葉に決定的に触れるために、100 回繰り返して読む辛抱強さが必要かもしれません。ここまで辛抱強く御言葉と向き合えば、父なる神は必ず豊かに実をつけさせてくださるでしょう。

「耳のある者は聞きなさい。」(13・9) わたしは、御言葉に対してどのような準備ができているのでしょうか。この御言葉を 30 回繰り返すことでも、実を結ぶための辛抱強さが備わっているか、試されると思います。



## 年間第 16 主日 (マタイ 13:24-43)

忍耐によって、良い実を結ぼう

「僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言（った）」（13・28）。たとえ話の中で主人に毒麦を取り除くことを提案した僕は、主人が当然この意見に賛成してくれるものだと考えていました。けれども主人の思いは違っていました。

悪の芽をすぐに摘み取るべきだと進言する場面は、イエスと弟子たちの間でも見られました。「弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、『主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか』」（ルカ 9・54）。しかしイエスは二人の弟子を戒められました。

たとえ話の主人も、たとえを通して父なる神の思いを語るイエスも、最後まで悪の芽を忍耐しようとしめます。最後まで忍耐することがご自分の宣教活動の強さであるとおっしゃりたいのでしょうか。今週は、「イエスは忍耐によって宣教を完成させる」とまとめたいと思います。

学生の夏休みが始まりました。小学生には「夏休み中は侍者の当番の日だけではなく、ミサのある日は毎日来なさい」と強く勧めました。ドッジボール大会の抽選は強運を引き当て、これ以上ない組み合わせに入りましたが、それでも全敗する危険はあります。全敗すれば、歩いて若松東小学校脇の愛らんどプールに行って終わりになるでしょう。

けれども、全敗していてもミサに欠かさずやって来るなら、わたしは心を打たれて、大村市民プールに連れて行くこともあるでしょう。そのためだけではないけれども、忍耐する強さを養うために、欠かさず来なさいと言いました。保護者の方も協力をお願いしたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。「毒麦」のたとえを朗読しましたが、ある人々はこのたとえを生ぬるい活動の弁明だと考えていました。つまりイエスの宣教活動は、ある人々にとっては煮え切らないもの、生ぬるいものと映っていたのです。弟子のヤコブとヨハネの反応は、その1つの例でした。

けれども、イエスがあいまいな態度を取っているわけではないことは、違う場面の言葉で知ることができます。イエスが裏切られ、逮捕される場面で、「わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう」（マタイ 26・53）と弟子たちを戒めたことでも分かります。

イエスの宣教活動の受け止め方が二分してしまう原因は何でしょうか。それはわたしたちにあると思います。イエスを少しの疑いもなく神から来られた方、救い主と信じるなら、イエスの宣教の姿勢に疑問を持つことはないでしょう。

もしどこかで、単に偉大な人に過ぎないと考えているのであれば、人は間違える可能性があるのです。イエスの宣教活動に疑問が生じるかもしれませんが、問題は、わたしたちがどれだけ疑いを持たずにイエスを救い主と信じることができるかではないでしょうか。

けれどもイエスの計らいに一切の疑いを持たないというのは、簡単なことではありません。ふだんの生活で耳に入ってくる事件や事故のニュースは、神がきっと計らってくださると信じるのを難しくさせます。

世界は今も紛争が絶えません。イスラエルとパレスチナ自治政府の暴力の応酬を心配して、教皇さまも動きました。でもいまだに収まりません。先日はウクライナ東部で民間機が撃墜され、乗客 284 人とパイロット他乗務員 15 人全員の命が失われました。イエスがだれかを動かして、また国家を動かして、暴力を止めさせることはできないのでしょうか。

悲しいニュースを聞いて、それでもイエスを救い主と信じる。それはまずは司祭・修道者の召命を受けた者が担うべき使命だと思います。司祭・修道者は、イエスを信じるということでは、自分の価値を証明することができないからです。

司祭・修道者はイエスにしか拠り所が無いのですから、もう一度自分を奮い立たせて、「悲しい出来事の中にあっても、わたしは神の計らいを信じる」と声を上げたいと思います。もしわたしたちの声が理解されなくても、神の計らいは変わりません。

だれかが、神の計らいを少しも疑いなく信じるなら、社会の状況は変わると思います。イエスは、神がご自分をいけにえとしてこの世を救ってくださることを少しも疑わずに十字架にはりつけにされました。表面的には、みじめな最期でした。けれども神の計画は、イエスの死に至るまでの従順と忍耐によって完成したのです。

宣教は、忍耐によって完成するのだと思います。イエスの忍耐がわたしたちの忍耐の物差しです。さまざまな活動の中に毒麦が紛れ込みます。身近な人の集まりの中にも毒麦が蒔かれることでしょう。それでも、忍耐して良い麦の実を神に差しだしましょう。こうした忍耐の積み重ねが、いつか社会から毒麦を刈り取ることになるのだと思います。



## 年間第 17 主日 (マタイ 13:44-52)

あなたにとっての高価な真珠とは

「高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」(13・46) わたしが今週取り上げたい箇所です。わたしたちも高価な真珠を一つ見つけることにしましょう。

高価な真珠が一つあると、その人は持ち物をすっかり売り払うと言います。わたしはこれを、「何物にも代えられない価値観」のことではないかと考えました。価値観とは、ものの見方や考え方のことですが、わたしたちに何物にも代えられないものの見方が身につけば、それは他のどんなものを手放しても惜しくないと思えるようになります。

例を挙げてみましょう。まずは人に対する見方です。「どんな人にも、必ず良いところがある。」これは人に対する価値ある見方だと思います。イエスは、どんな人にも天の国に迎えられる価値があると呼びかけました。当時の宗教指導者が切り捨てた人々にも天の国に招かれることができるかと語りました。イエスのように、わたしたちもすべての人に心を開き、その人のよいところを見つけようとする見方は、なにものにも代えられない価値あるものではないでしょうか。

次に、「どんなことにでも感謝する。」これも、わたしたちの生き方をすっかり変えるものの見方だと思います。イエスはご自分の教えが指導者たちに受け入れられない中でも、父なる神をほめたたえました(マタイ 11・25 参照)。周囲の無理解の中でも、神に感謝することができたのです。

ある人にとっては今日一日が、これ以上ない辛い日と感じるかもしれませんが、そんな一日であっても、今日一日を神に感謝する。変わらずにこの態度を貫くことは、何にも代えがたい生き方ではないでしょうか。

最後に、「わたしは神に愛されている。」これも、わたしたちがほかのどんなものの見方を横に置いてよい考え方は、イエスはご自分を死に追いやる人々に対しても、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23・34) と祈りました。イエスは誰も裁かず、すべての人を愛してくださったのです。イエスがわたしを愛してくださっている。だからわたしも、人を愛することができます。

3つ、例を挙げてみました。あなたにとってのかけがえのない宝が、人生の中に必ずあるはず。神さまは必ずその宝に出会わせてくれると思います。その時を逃さず、ほかのものに目をやらず、神が示してくれた宝を手に入れたいものです。

今日、子供たちは 11 小教区が集まっての球技大会に参加します。試合ですから、勝ったり負けたりするでしょう。けれども、練習したことを試合の中で発揮できたら、勝ち負けの向こうにあるものの見方に触れるのではないかと思います。それは、しなければならないことをした上で、すべてを神さまに委ねるという態度です。毎回、この姿勢で

球技大会に臨めば、球技の結果とは別に、子供たちは高価な真珠を一つ  
見つけることになるのではないかと思っています。

年間第 18 主日(マタイ 14:13-21)



## 年間第 18 主日 マタイ 14:13-21

ここにしかない、食べ物がある

今週は福音朗読に「五千人に食べ物を与える奇跡物語」が選ばれました。「ここにしかない、食べ物がある」とまとめたいと思います。「パン五つと魚二匹しかない」その持ち物をイエスのもとに持っていくことで、何が起こるのでしょうか。

この奇跡物語を考えるために、20年以上前に出会ったある家族を紹介したいと思います。司祭になる一年前、助祭だった時に福岡で実習に通っていた西新教会に所属している家族でした。

この家族は日曜日 10 時のミサに参加するために、2 時間かけて通っていました。たとえばそれは、奈良尾に住んでいて、仲知教会のその先の米山教会に通うようなものです。高校生女子と青年がいる 4 人家族でした。しかも、ほぼ毎週この家族はミサに来ていました。

わたしは、一度だけこの家族の家を訪ねたことがあります。同じように、2 時間近くかかりました。福岡の中心部から 2 時間あれば、場合によっては長崎まで来てしまいます。そういう環境にあって、ほぼ毎週ミサに来るのは、よほどしっかりした考えがなければ続けられないのではないのでしょうか。

この家族が日曜日に教会に来ると、高校生と青年の 2 人は教会活動を積極的におこなって 1 日を過ごしました。あるときは気分転換でわたしたち神学生が呼びかけてボーリングに行くこともありました。

彼らにとって、日曜日の教会は 1 週間の中でかけがえのない時間だったのだと思います。どんなかけがえのないものが、日曜日の教会にあるのでしょうか。そのことを今週の福音は教えてくれます。

イエスを慕って集まった五千人もの人々は夕暮れになってもまだイエスのもとにとどまっていました。弟子たちは、食べ物の心配をし始めました。食べ物は、人里離れたこの場所ではなく、町や村にしか見つからないと考えたからです。

けれどもイエスは、「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」(14・16)と言いました。群衆が必要としている食べ物が、町や村ではなく、ここで用意できるということです。

日本語の聖書で、興味深い言葉遣いがあります。弟子たちは「ここは人里離れた場所で、もう時間もたちました」(14・15)そして「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」(14・17)とイエスに納得させようとしています。ところがイエスは、「それをここに持って来なさい」(14・18)と答えているのです。

弟子たちは「ここは何もない場所です」「ここには手持ちが何もありません」と言っているのに、その何もない「ここ」で、奇跡を始めるのです。イエスはあえて、人里離れた場所で、「わたしが五千人に食べ物を与える」という意思表示をおこなったのです。イエスがいる場所こそ食べ物がある場所、ここにしかない食べ物がある場所なのです。

教会に2時間かけてくるあの家族は、日曜日のミサの中に、自分たち家族の食べ物があることを承知していました。ここにしかない食べ物があることを、時間とお金をかけて、周囲の人々に証明していました。

わたしたちは、幸いに15分もかからない距離に教会があります。バス代も電車代もかけずに、歩いて15分でほとんどの人が日曜日のミサに集まることができます。わたしたちはなおさら、イエスがおられるこのみことばの食卓と聖体の食卓は、ここにしかない食べ物であると証しする必要があると思います。

今日、上五島地区の青年が、自分たちの青年キャンプの呼びかけのためにミサに参加してくれています。一泊二日のキャンプで、感謝のミサで締めくくられるようになっていきます。感謝のミサはわたしにお願いしてきました。

青年たちこそ、イエスのもとに食べ物があることを深く心に刻んでほしい世代です。青年キャンプに参加する青年は、浜串小教区にはもしかしたらいないかもしれませんが、ミサの後に募金箱を持って玄関に立つそうですので、青年キャンプの成功のために少しでも協力していただければ幸いです。

イエスは、群衆をご自分のもとに留めおいて、「ここにしかない食べ物がある」と教えてくださいました。わたしたちも、ミサに集まるたびに「ここにしかない食べ物」を確認しましょう。そして、かけがえのない食べ物に養われていることを、生活の中で証ししましょう。そのための知恵と力を、ミサの中で願いましょう。



## 年間第 19 主日 (マタイ 14:22-33)

イエスはわたしたちのそばにいて教育する

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」(14・31)。イエスはペトロの心の動揺さえも教育のために用いてくださいます。今週の福音朗読を「信仰の薄い者をそばで教育するイエス」とまとめたいと思います。

ここ十日間、車の運転中ずっと海を見ていました。ボートは陸揚げしているので海を眺めても仕方がないのですが、前も見ずにずっと海を眺めて運転していました。前を見ないで運転する技術が身に付きました。冗談の分からない人のためにあえて言うておきますが、冗談です。

福音朗読では湖の上を歩くイエスが現れます。弟子たちの乗った舟は、逆風のために波に悩まされていました。悩まされていた弟子たちとは、信仰をまっすぐに生きるのが難しい現代社会に置かれているわたしたちたちでもあります。

イエスは湖で突然弟子たちに現れたのではありません。2つの背景が添えられています。1つは、ひとり山にお登りになり、祈っておられたということです。もう1つは、イエスは夜が明けるころに湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれたということです。

次のように考えてみました。イエスが祈るのは、御父との深い一致を保つためです。もともと御父と御子イエスとは固く一致していますが、祈る姿は御父と御子の深い一致を見える形で示すものです。いかなる意見の違いもない、完全に御父と一致しておられる御子イエスが、弟子たちの前に現れたということです。

また、夜が明けるころとありますが、「夜」は「昼」に対立するものとして描かれ、太陽によってすっかり取り払われます。ここでは御父と完全に一致しているイエスが現れることで弟子たちの悩みが取り払われる、信仰をまっすぐに生きるのに困難を感じているわたしたちをも照らしてくださる、そういう意味合いが込められているのだと思います。

ただし、弟子たちはイエスの出現におびえました。すぐに安心したわけではなく、イエスが現れても自分たちの置かれている困難からまだ解放されずにいたのです。そんな中で、ペトロはイエスに依り頼もうとしました。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」(14・28)

ペトロは自分の言葉をそのまま実行すれば、「そちらへ行く」つまり御父と完全に一致している御子イエスのそばに、夜を取り払う太陽であるイエスのもとに行けるはずでした。けれども、ペトロの信仰は揺らいでしまうのです。「強い風に気がついて怖くなり、沈みかけた」(14・30)とは、御父との完全な一致を保っているイエスに依り頼みたいけれども、信仰を脅かす出来事に足元をすくわれる人間の弱さが映し出されています。人間は自分の力だけでは、イエスの保っておられる御父への完全な信頼にたどり着けないのです。

そこでイエスはすぐに手を伸ばしてペトロを捕まえ、「信仰の薄い

者よ、なぜ疑ったのか」(14・31)と言われました。ペトロを非難しているではありません。ペトロに「わたしは手を伸ばしてあなたを捕まえるくらいの場所にいつもいる。恐れずにこれからもついてきなさい」と呼びかけているのです。

もしかしたら、イエスがすぐに手を伸ばしてペトロを捕まえなかったら、ペトロはおぼれていたかもしれせん。人間の力では、イエスにすぎりつくことさえできなかったかもしれないのです。イエスはそれをよく御存知で、イエスのほうからすぐに手を伸ばして捕まえてくださいます。イエスにつき従おうとする歩みが沈みかけたとしても、イエスのほうから助けて、さらに信頼を寄せる者となれるように教育するのです。

信仰を簡単に言い表すと、イエスに信頼を置いて生きることだと思います。この生き方を常に最優先に生きようとする、さまざまな困難に悩まされるでしょう。まさにそれは水の上を歩いて、御父に完全に一致しているイエスのもとに渡ろうとするようなものです。気が付くと信仰に対する迫害や無理解に足元をすくわれ、おびえてしまうのです。

けれども、イエスはすぐに手を伸ばしてわたしたちを捕まえるくらい近くにおられます。このことを忘れてはいけません。現代がどれだけ逆風のただ中であつたとしても、イエスへの信仰に土台を置いて生きるわたしたちを完全に沈ませることはできないし、イエスはすぐに手を伸ばして捕まえることができるくらいそばにおられるのです。何度もこのような経験をくぐらせて、イエスはわたしたちを教育なさるのです。

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」(14・31)。イエスの言葉をあらためて聞き直すと、今度は力強い励ましに聞こえてくるでしょう。信仰を土台にしては生きていけないと自分の考えにとどまることは、生きる場所を最も危険にさらしてしまいます。

イエスの導きを固く信じて生きるなら、何度沈みそうになってもすぐ手を伸ばして捕まえ、歩を進める力を授けてくださいます。わたしたちの選ぶ道は明らかです。イエスがすぐ手を伸ばしてくださる場所まで、信じて歩み続ける。そのための力と助けを、このミサの中で祈り求めましょう。



## 聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

天の国に固く結ばれて生きる

聖母の被昇天のお祝いを迎えました。「天の国に固く結ばれて生きる」とまとめてみたいと思います。聖母被昇天の説教の前置きの話をします。先週木曜日平日のミサで、ペトロの信仰告白の場面が朗読されていて、福見での夕方のミサ、子供向け説教をでこんな話をしました。

「ペトロは信仰を告白した後に、イエスさまから『あなたに天の国の鍵を授ける』(マタイ 16・19)と言われました。この鍵は、『あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる』(同上)となっているので、つなぐための鍵です。たとえばそれは、自転車をガードレールにつなぎとめるチェーンロックのようなものです。」そういう話をしました。

チェーンロックは、たぶん日本の発明ではなくて、海外で発明されたものです。なぜかと言うと、日本人だと、自転車に鍵がかけられていれば持ち去ることはないと考えますが、海外ではいくら自転車に鍵がかかっているでも安全ではないと考えます。より安全な方法は、自転車を持ち去られない方法、たとえばガードレールと自転車をつなぎとめることを考えるわけです。そこからチェーンロックが生まれたのでしょうか。

こういう鍵の使い方を例に、イエスさまがペトロに授けた鍵は、「人々と天の国とをつなぎとめる鍵ですよ」と説明したわけです。この話、今日の聖母被昇天に使えるのではないかなあとあとで思いました。

マリアは、生涯にわたって、御自分を神につなぎとめて人生を歩まれました。平凡な生活から、突然神の母になることを告げられ、驚いた時も、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(ルカ 1・38)と答えて、神にしっかり結び合わされることを願いました。御子イエス・キリストの出来事で理解に苦しむ時も、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(ルカ 2・19)のです。神と固く結ばれて生きることを忠実に守られました。

こうして、生涯にわたって、神に固く結ばれて生きることを願い、その通りに生きたマリアが、いま体も魂も天の国に結ばれているということは、本当にふさわしいことだと思います。神は、生涯ご自分に固く結ばれて生きることを願ったおとめマリアを、体も魂も天の国に引き上げてくださったのです。

福音朗読に選ばれたマリアの賛歌も、神に固く結び合わされて生きることの幸せを高らかに歌っています。身分の低いのはしためであっても、主を畏れることでしか生きることはできない人も、飢えた人も、神に固く結ばれて生きることで、この世では幅を利かせていると思われる自分に依り頼んで生きる人々がたどり着けない幸せに招かれるのです。

マリアが生涯を通して貫いた生き方は、神によって体も魂も天の栄光に上げてもらうのにふさわしい生き方でした。天に上げられたマリアは、わたしたちも同じ生き方に倣うよう招いているのです。神に判断の

基準を置いて生きること。神が喜ぶことをすることが自分の喜びと考えること、人にしてもらいたいと思うことを人にすること。これらの生き方で、わたしたちは神に固く結ばれて生きるのではないのでしょうか。

だれよりも神に固く結ばれて生きたマリアに与えられた栄誉は、わたしたちをより一層天の国へのあこがれに招きます。神に固く結ばれて生きるために、少しでいいから、神に心を上げる時間を日々保ち続けましょう。

聖母マリアの国籍は天にあります。同じようにわたしたちの国籍も天にあります。わたしたちが神に固く結ばれて生きるとき、わたしたちの国籍がどこにあるかを世に対して示すのです。神に固く結ばれて生きる知恵を、聖母の取り次ぎによって願うことにしましょう。

年間第 20 主日(マタイ 15:21-28)



## 年間第 20 主日 (マタイ 15:21-28)

あなたの願いどおりになるように

イエスはカナンの女の信仰をほめました。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」(15・28) この女性のイエスに対する信仰は最初から立派だったのでしょくか。今週の福音朗読から、どのような人がイエスに「あなたの願いどおりになるように」と言ってもらえるのか探ってみましょう。

ひょっとしたらカナンの女性は、娘が受けている災難を取り除いてもらえればそれでよい、そんな身勝手な思いでイエスに近づいていたのかもしれない。イエスは珍しく厳しい態度でこの女性に向き合います。最初は彼女の願いに何もお答えにならなかったのです。

「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」(15・22)。叫び声を聞けば、イエスへの信仰を持っているようにも聞こえますが、人の本心は分かりません。うわべだけの言葉で、自分の願いをかなえてもらえればそれでよいという人かもしれない。

弟子たちも煩わしさから解放されたかったのでしょうか、イエスに取りなしをしています。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」(15・23) 面倒なことから逃れたいという気持ちが伝わってきます。

すると彼女はより真剣にイエスに取り合ってもらおうとします。今度はイエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」(15・25) と言うのです。もはや悪霊に苦しめられている娘が助かれればだれでもよいというのではなく、娘を助けてくれるのはイエスしかいないと考えるようになっていました。

そこにイエスのさらに厳しい言葉が待っていました。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」(15・24)。確かにイエスは、イスラエルの民のために遣わされていますが、彼女がイエスに失望して、悲しみながら去っていくことは考えなかったのでしょうか。彼女は何とか食いさかります。「主よ、どうかお助けください」(15・25)。

とうとうイエスは最後通告とも思える言葉を発したのです。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(15・26) 何をどう言ってもイエスは動いてくれそうにありません。娘の苦しみをさえ取り除いてもらえればあとはどうでもよいのであれば、これ以上踏みとどまる理由がどこにあるのでしょうか。

ところがカナンの女性は一步も引かなかったのです。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」(15・27) イエスはこのカナンの女が一步も引かないであろうということを知っていたのでしょうか。一步も引かないのであれば、彼女の中に深く研ぎ澄まされた信仰を植え付けようと考えておられたのかも

しれません。厳しい質問のやり取りの中で、カナンの女の信仰は研ぎ澄まされていきました。そして、イエスの期待にふさわしい信仰へと変わっていったのでした。

自分たちが異邦人であって、イエスが言う「子供たちのパン」にあずかれない立場であっても、それでもイエスに依り頼む以外に道が無い。どんなに狭い入口であっても、イエスによってしか道は開けない。彼女はイエスの突き放すような言葉を受けても、決して希望を失わず、かえってイエスへの信頼を増していったのでした。

「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」彼女はイエスによって十分に訓練を受け、信仰が研ぎ澄まされたのでした。そして願いをかなえてもらうのにふさわしくしていただいたのです。ここに、わたしたちが今週見習うべき点があると思います。

イエスさまとカナンの女とのやり取りの中で一つの特徴を見つけました。イエスさまはご自分の立場を一步も譲りませんでした。イスラエルの民の救いが先にあり、異邦人の救いはそのあとだったからです。けれどもカナンの女も一步も引きませんでした。最初は利己的な願いを持っていたかもしれませんが、最後はイエスのどんな訓練にも一步も引かなかったのです。

ここから、わたしたちがイエスに「あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」と言ってもらうためには、わたしたちに一步も引かない覚悟が必要なのだと分かります。イエスは誰かの信仰をさらに高めるために必要なことは、一步も譲らない方なのです。そのイエスに合格点をいただくためには、わたしたちも一步も引かない覚悟が必要なのです。

信仰を次の世代に何とか受け継いでもらいたい。信仰教育を何とか実らせたい。悩ましい願いがあり、思い通りにいかない現実があるかもしれません。イエスが試練を通してわたしたちの信仰を鍛えようとするとき、一步も譲らないでしょう。

わたしたちも、願いをかなえてもらうために一步も引かない。その覚悟で毎日の信仰の歩みを進めていきましょう。一步も引かない姿を見て、イエスはきっと「あなたの願いどおりになるように」と答えてくださると思います。



## 年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

信仰を言い表す人を神は支えてくださる

年間第 21 主日は、「ペトロ、信仰を言い表す」という場面が選ばれました。「弱さを抱えながらも信仰を言い表す人を、神は支えてくださる」とまとめたいと思います。

19 日に、楽しみにしていたものを受け取りました。それは司祭になった時に愛宕のレデンプトリスチン修道院で制作した絹織物の祭服で、22 年お世話になっていたものの修繕がようやく仕上がったのです。特別な管理もせずに着続けた絹織物の祭服は、全体的に黄ばみが出てしまい、裏地が破れ、糸がほつれ、染みも目立ってきていました。

制作してくださった修道院には「修繕をお願いします。費用はいくらかかっても構いません」とだけ伝えて祭服を届けました。担当のシスターからは、例えて言えば大手術が必要で、費用も相当かかると言われました。でも、22 年愛用してきた祭服を、さらに 10 年 15 年着続けるためと思い、できることはすべて施してくださいと言いました。

おかげで立派に仕上がりました。無事に修繕を成し遂げてくださった修道会の姉妹たちに心から感謝したいと思います。さっそく、21 日に行われた福見教会での葬儀ミサに使用しました。浜串教会では 9 月以降の白の祭服を使用する日にお披露目できると思います。

さて福音朗読の学びに入りましょう。今週の朗読箇所は、うっかり聖母被昇天の説教の前置きとして話してしまった箇所なのですが、初めて向き合ったつもりで与えられた箇所を読み返してみました。なぜ、イエスはペトロを使徒の頭、教会の礎となさったのでしょうか。

まず、ペトロの信仰告白を読み返してみましよう。「あなたはメシア、生ける神の子です」(16・16)と答えたペトロにイエスは、「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」(16・17)と言われました。天の父がペトロを選び、信仰告白へと導いたことを伺わせます。

さらにイエスご自身も、「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない」(16・18)とペトロを選んだことを明言しました。

そして、「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける」(16・19)と仰ったのは、これは聖霊を授けると受け取ってもよいのではないのでしょうか。聖霊が注がれて、地上でつないだり解いたりするための正しい判断ができるようになる。そのことを「鍵を授ける」と言っていると考えてみました。ここでは、ペトロが聖霊によっても選ばれたと考えることができると思います。

以上、ペトロは天の父によっても、イエスによっても、聖霊によっても選ばれ、教会の礎として用いられることになったと考えられます。ここで改めて、なぜペトロが選ばれることになったのでしょうか。わたしは、以後 2 千年以上続く地上の教会の姿が、ペトロに投影されている、

映し出されていると思いました。

ペトロはご存知のように、御父にも御子にも聖霊にも選ばれて使徒の頭とされたのですが、彼自身はイエスに叱られる行動を取ることもあり、イエスを否認する弱さもあり、言い伝えによると迫害のさなかにローマを離れ、逃避行している時に十字架を担いでローマに向かうイエスとすれ違い、「あなたがローマを離れようとしているから、もう一度わたしが磔にされに行くのだ」と言われ、思い直してローマに戻って殉教したと言われています。

人間的には弱さを抱えた人物でしたが、いつも自分の弱さを率直に認め、イエスに助けを求めて立ち直っていくのでした。弱さを抱えながらも、2千年もの長きにわたって三位一体の神に緊密に結び合わされて強められ、揺るぎないものとなっていく。そんな地上の教会の姿が、ペトロに投影されているのではないのでしょうか。

ペトロの信仰告白の場面は、信仰を立派に証しするためには、いつも神の支えが必要なのだよということを教えてくれていると思います。それは、わたしたち個人の信仰だけでなく、わたしたちが地上の教会を維持していくためにも、三位一体の神との緊密な絆が必要だということでもあるのです。わたしたち教会家族が、信仰を守り、信仰を伝え、信仰を証ししていくために、常に三位一体の神がわたしたちの心臓部にあって、わたしたちを生かしてくださる必要があるのです。

信仰を守り、伝え、証ししていくことは、キリスト信者の基本的な生き方です。わたしたちがこの生き方を維持し続けるためには、わたしたちの手足に、心臓が血液を送って十分な酸素が行き渡る必要があります。その心臓の働きは、三位一体の神と緊密に結ばれてはじめて可能なのです。ペトロの信仰告白もそのことを、わたしたちに示しているのだと思います。

ペトロと同じようにわたしたちも、どのようにして今の教会は2千年の長きにわたってこの地上に維持されてきたのかを証ししなければなりません。それは三位一体の神と緊密に結ばれ、三位一体の神の助けがあったからです。

わたしたちの信仰生活にも同じ証しが必要です。信仰を守り、伝え、証しするために、わたしたちの体に三位一体の神が酸素を送り続けてくれていることをいつでも思い出し、人々に証しできる準備を整えておく必要があります。

使徒信条を通して、わたしたちは何を信じて生きているかを証しできるようにいつも準備しておきましょう。同時に、わたしたちは三位一体の神と緊密に結ばれていて、この神がわたしたちの体の隅々にまで恵みという酸素を送り続けてくださっているので信仰生活を守り、伝え、証しできているのですといつでも告げ知らせることができる人でありたいと思います。そのための準備の恵みをミサの中で願い求めましょう。



## 年間第 22 主日 (マタイ 16:21-27)

十字架によってキリスト者はキリスト者になる

浜串小教区は9月初めに、歴代主任神父さまの追悼の意味を込めて主日のミサをささげています。今年は、8月31日に追悼ミサをささげることとしました。亡くなられた3人の歴代主任司祭は、小教区史によりますと、岩永四郎神父さまが12年、松本長太郎神父さまが15年、田原一男神父さまが4年務めてくださいました。

今週年間第22主日は、イエスが死と復活を予告する場面です。「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」という招きがイエスから与えられます。「十字架を手に入れてこそ、キリスト者はキリスト者になる」とまとめたいと思います。

さてわたしが夏休みに入る前の週、子供たちとプール遠足に行きました。毎年恒例ですが、毎年ちょっとした騒動があります。同じことをしている中でも面白いことは起こるのですね。

今年はプールを楽しんだ後に騒動がありました。たくさん泳いでお腹も空いたので、食べ放題の店に入りました。お寿司、麺類、焼き肉、揚げ物、デザート、いろいろなものが好きなだけ食べられる店です。

子供たちが焼き肉用の肉を選んできました。鉄板に載せ、当然焼けてから食べるわけですが、焼けたかどうかの判断をわたしに求めるのです。「神父さま、この肉もう焼けてますか？食べていいですか。」

最初はまじめに観察していましたが、8人の子供たちがかわるがわる尋ねてくるものですから、途中から面倒くさくなって、適当に「お立派に焼けてるぞ。食べてよし」と返事をして食べさせました。今日ミサに来ている子供は、少なくともお腹をこわしていない子供たちです。

夜はカトリックセンターに男の子用の部屋と女の子用の部屋を借りて泊りました。わたしは毎年、シーツを頭からかぶって女の子の部屋に「お化けだぞー」と言って侵入するのですが、今年は少々疲れていましたので夜9時になっても準備をしませんでした。

すると女の子の部屋の保護者から、「子供たちが『今年は神父さまのお化けは来ないのかなあ』と言っていますが？」というメールが来まして、「しょうがない。行ってやるか」という感じで出動しました。

同じ晩、カトリックセンターには外国人がたくさん宿泊していました。わたしがシーツをかぶって通路を移動していると、何やら騒がしくなっています。「シーツお化け」が外国人にひどく受けたようで、写真に収めていたのだそうです。さらにこの外国人の中に、わたしが出動した後、同じ格好をして子供たちをからかいに行った青年もいたと聞きました。ちょっとした国際交流でした。

福音朗読は、イエスがご自身の死と復活を予告することから始まります。イエスが担う自分の十字架を先に弟子たちに示して、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのた

めに命を失う者は、それを得る」(16・24-25)と言うのです。キリスト者は、十字架を手に入れてこそ、キリスト者となる」ということなのです。

地上に生きる多くの人が、ある意味で「全世界を手に入れる」そんな生き方を追い求めています。世界中から集められた食材の中から今日の食卓のおかずを選んでいきます。世界中から集められた洋服、装飾品、化粧品のうち、自分の気に入ったものを選んでおしゃれをします。

少なからずわたしたちは、自分の生活を世界中から集められた物で満たしているのです。物だけではなく、テレビ・新聞・ネットの情報も、わたしたちの時間を埋めるために世界中からかき集められています。

確かに生活は良くなったかもしれませんが、けれども手に入れた生活は、キリスト者として命に満ち溢れていると言えるのでしょうか。イエスの教えが生き方の物差しとなり、イエスの愛の掟が行動の基準となり、イエスの望みが語る言葉の端々に感じられる。そんな、イエスへの信仰が命の源となった生活になっているのでしょうか。

今週の浜串小教区のミサは、亡くなった歴代主任司祭の追悼のミサを兼ねています。小教区に赴任してくる主任司祭は、だれよりも自分を捨て、自分の十字架を背負ってイエスに従う人のはずです。人間の救いはイエスが選んだ十字架の道から来ることをだれよりもよく理解している人のはずです。先輩主任司祭たちは、キリスト者が十字架を背負ってキリスト者になっていく、その道筋を示してくださった方々だと思えます。

わたしたちも、キリスト者として命に満ち溢れた人生を選ぶ人になりましょう。たとえ全世界を手に入れても、キリスト者としての命が豊かでなければ、大切なものを失うことになってしまいます。十字架を担って復活されたイエスが、わたしたちの生き方の鏡です。

イエスの教え、イエスの愛の掟、イエスの望みを生活に写し取って、日々の生活に生じる十字架を担っていくことにしましょう。十字架を手に入れてこそ、キリスト者はキリスト者になるのです。そのための力を、ミサの中で願いましょう。



## 年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

迷い出た一匹の羊に接するように

年間第 23 主日は、相手に対して忠告するときの心構えを説いています。実は今週の朗読個所の直前には、「迷い出た羊のたとえ」が取り上げられていまして、百匹の羊のうち迷い出た一匹に接する心やさしい羊飼いのように、兄弟に忠告しなさいと促しているのだと思います。

もしかしたら、朗読を聞いた皆さんは、忠告がより厳しくなることに気を取られたかもしれません。二人だけで忠告して、聞き入れなければほかに仲間を連れて行って忠告して、それでも聞き入れなければ教会の権威に訴えて忠告してもらって、教会の言うことも聞き入れないなら、切り離すといった受け取り方です。

忠告がだんだん厳しくなって、相手を裁こうとしているのか、あらゆる形の忠告を使って、その人を教会の交わりに連れ戻そうとしているのか、用いる忠告は同じでも、忠告するときの心構えが違えば、願い求めていることは全く違ってきます。イエスが促す忠告はあくまでも、迷い出た一匹を捜しまわるためのものなのです。

ちなみに教会内部のことを調べてみました。現代の教会でも忠告が必要になった場面があったようです。一つは、教会の高位聖職者に問題行動が生じ、教皇さまが何とか教会内にとどまらせようと努力したケースがあります。しかし、教皇の個人的な説得も教会の公式な忠告も聞き入れませんでした。

もう一つ、第二バチカン公会議の方向性を拒否し、その後ヨハネ・パウロ 2 世教皇の説得を聞き入れなかった高位聖職者のケースがあります。どちらも、きっと個人的な忠告から始まり、公の使いを送って忠告したり、教会の公式な声明によって忠告したのです。それはじわじわと教会から追放するためではなくて、どうにかして、迷い出た状態から教会の交わりに連れ戻そうとする長い長い努力の積み重ねだったのです。

わたしたちも、忠告をしたり忠告を受けたりすることがあるでしょう。それはだれにでも起こりうることです。わたしたち人間は弱さがあるって、迷い出る一匹の羊と同じで自分一人で今いる場所から戻れなくなることがあるのです。もしかしたらこの世の知恵が豊かな立場の人ほど、引き返せなくなるものかもしれません。

そんなとき、何とかして教会の交わりに戻ってほしいと動いてくれる人がいるのは幸せなことだと思います。迷い出てしまうことは不幸なことですが、迷い出ている期間が生涯のすべてではないはずです。

もしだれかが、個人的にか、二人または三人でか、あるいは教会の権威に依ってか、いずれかの方法で心から忠告して、教会の交わりに戻れるように手を差し伸べるなら、不幸な時間を乗り越えて、その人の人生全体は幸せになるのではないのでしょうか。

今日わたしたちは、敬老者のためのミサをささげています。長い年月を重ねて、教会の交わりにとどまることの大切さも十分知っておられ

ます。もし、できますなら、これからの与えられた時間の中で、迷い出た一匹の羊のような信徒をご存知でしたら、教会の力になっていただきたいと思います。

個人的に忠告して、教会の交わりに呼び戻せる人を、もし御存じでしたら、働きかけていただきたいのです。教会との絆を取り戻すのにさらに力が必要でしたら、協力者を教会役員で見つけてお手伝いしたいと思います。もし、それ以上の大きな働きが必要でしたら、教会のあらゆる権限を用いて、教会の交わりに戻れるように主任司祭も力を貸したいと思います。

今日お祝いを受けている敬老者の皆さんは、「行って二人だけのところで忠告しなさい」（18・15）というイエスの招きに、年齢も経験も最もふさわしい方々だと思います。どうか、信仰に土台を置いて生きる今だからできるイエスの協力者に名乗り出てほしいと思います。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（18・21）迷い出た一匹の羊を教会の交わりに連れ戻すことは、今日お祝いを受けている高齢者をはじめ、すべての信徒にできる尊い働きです。教会の交わりにすべての人が結ばれるよう、わたしたちの中におられるイエスの力に依り頼みましょう。ミサを通して、わたしたちをイエスの手足としていただけるようお願いしましょう。

十字架称賛(ヨハネ 3:13-17)



## 十字架称賛 (ヨハネ 3:13-17)

十字架を背負って、生き方でイエスを称える

今週は9月14日の「十字架称賛の祝日」が日曜日と重なったため優先して祝っています。イエス・キリストの祝祭日と、その他の重要な祝祭日の場合は、日曜日であっても優先されることになっています。聖人の記念日にはほとんど日曜日のほうが優先され、その年の典礼暦から消えてお休みになります。ただし、ある場合は日曜日に重なってしまう祝日を、月曜日に繰り越して祝うこともあります。

わたしは、十字架称賛の祝日で忘れられない思い出があります。前任地の伊王島で、「遠見岳（「遠く」を「見る」と書きます）」と呼ばれる山の頂上にある個人の土地に、馬込教会信徒の力を借りて十字架を建ててもらい、祝福したのです。浦上教会に所属する辻地区にも、十字架山と呼ばれる場所がありますが、同じような場所を伊王島に設置することができて、深い喜びを味わったのでした。

当時は、遠見山の頂上まで登る山道は大変険しく、人通りも少なかったのです。けれども十字架を設置しようという計画が本決まりになったことで、滑りやすかった山道は歩きやすくなり、周囲の草払いも進み、立派な十字架も信徒の協力で制作され、十字架称賛の祝日に合わせて土地と十字架を祝福したのでした。

十字架を設置した当初は、長崎の大波止と伊王島港の間を船で行き来するときに遠見岳頂上に十字架が見えて、たいへん誇らしかったのを覚えています。もし、馬込教会の信徒がこの説教をメルマガかブログで読まれたら、今の様子を聞かせてほしいなあと思っています。

さて、十字架称賛の祝日にあたり、福音の学びを「十字架を背負って、生き方でイエスを称える」としたいと思います。十字架称賛の祝日は、イエスが磔にされた十字架を思う日ですが、それは当然、十字架上で最期を遂げられたイエスの生き方を思う日でもあります。

選ばれた朗読箇所「天から下って来た者」(3・13)に目を向けてみました。十字架の姿と重ね合わせて考えることができると思います。十字架が、地面にしっかり立つためには、十字架の縦の木が地面に深く下ろされる必要があります。ただ単に十字架を立てるわけではなく、人が磔にされた上でしっかり立つためには、深く穴を掘り、地面に埋める必要があるからです。

イエスは、ご自身が言われている通り「天から下って来た者」です。天から下って、人となられ、この世界に深く根を下ろしました。仮住まいではなく、完全な人として、人間が体験するすべてを体験されたのです。この、世界に深く根を下ろした姿が、イエスのご生涯の始まり、出発点になります。

そしてイエスは、ご自分の使命を完成させます。「信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得る」(3・15)という使命です。これは、十字架の横木に当たるのではないのでしょうか。神が御子を世に遣わし、御

子は天から下って来て、御自分を信じる者に永遠の命を得させてくださいました。しかもこの救いのわざは、十字架の上で完成されました。わたしたちはこの十字架を今日称えているのです。

イエスの十字架を称えることは、十字架によってご自分の計画を完成されたイエスのご生涯を称えることでもあります。その生き方とは、この世に深く根を下ろし、御自分を信じる者に永遠の命を得させるという生き方でした。

そこでわたしたちも、イエスの生き方に倣い、この世に深く根を下ろし、イエスを信じるものに永遠の命を得させるための働きかけをしましょう。きっとわたしたちは、この世に深く根を下ろすことについては教会で何も言われなくても十分に実行できていると思います。それを、十字架の縦の木として、出会う人々にキリスト者としての証しをすれば、わたしたちが担う自分の十字架は完成です。

お一人お一人が根をおろしている場所は、一つとして同じ場所はないと思います。司祭は、ここに集まっているお一人お一人ともまた違った場所に根をおろしているわけです。

わたしが置かれている場所を痛感した出来事がありました。先週の月曜日、上五島地区の司祭たちと浦桑のお店で食事を共にしていました。わたしの携帯に、知らない電話番号で電話がかかり、ワイワイ騒いでいる中で電話を取ってみると、もうこれ以上生きていけないといった深刻な電話でした。決して死んではいけない、今日一日、明日一日がんばれば十分だからと返事をしました。

わたしの携帯電話の番号をどうやって知ったのか分かりません。教会の留守番電話には、緊急の時に携帯にかけるようにと番号が録音されているので、そこから知ったのかもかもしれません。けれども、ふだんの生活の中であって、生きるか死ぬかの瀬戸際の電話がかかる。そういう場所に自分は根をおろしていることを痛感したのです。

イエスは御自分の救いの計画を十字架の上で完成されました。わたしたちは、生き方でイエスの十字架を称えましょう。生活に深く根を下ろす中で、自分にできる証しをしましょう。証しを見た人が、証しの向こうにあるイエス・キリストに導かれるように、このミサの中で願い求めましょう。



## 年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

まことの主人であるイエスの気前の良さを学ぶ

年間第 25 主日は「ぶどう園の労働者のたとえ」が選ばれました。「ぶどう園の主人のもとで一日を過ごす喜び」について考えてみたいと思います。

果物を栽培する農家が、収穫時期にどれくらい忙しいのか、詳しいことは分かりませんが、いくらか想像することはできます。果物の収穫時期は一瞬も遅らせることができず、農園が広ければ広いほど、それこそ猫の手も借りたいほどの忙しさになるのだと思います。

そんな中で、たとえ話のぶどう園の主人は労働者を雇いに広場に出かけました。夜明けと、九時ごろ、十二時ごろと三時ごろ、最終的には五時ごろにも労働者を雇いに行きました。電気のある時代ではありませんから、夕暮れになれば作業ができなくなるので、残り一時間でも働いてくれる人はありがたかったのでしょう。

もちろんこのたとえ話は、「労働時間と適正な賃金」という問題を取り扱うたとえ話ではありません。むしろ、「ぶどう園で一日過ごすことができた、ぶどう園の主人のもとで今日一日過ごせた。そのことを喜んでいるかどうか」この点が問われているのだと思います。

最初に雇われた人たちの中には、「労働時間に対する適正な賃金」を求めてぶどう園の主人に不平を言う者がいました。しかし、この人たちもぶどう園の主人が雇ってくれなければ働けなかったはずで、この日広場で雇ってもらったすべての人が、主人に雇われたから、ぶどう園で過ごすことができたのです。

わたしはこのたとえ話を読み返しながら、羊飼いと羊の関係と重ねて考えてみました。羊は、方向感覚がとても弱い動物だそうです。ですからすぐに道に迷い、ほかの羊からはぐれ、見失う危険があります。広場で雇ってもらおうと待っていた人々というのは、雇ってもらわないと自分では働き口を得られない人々なのですから、自分一人では本来いるべき場所にとどまれない羊のようなものではないでしょうか。

そこへぶどう園の主人がやって来て、「あなたたちもぶどう園に行きなさい」(20・4,7)と声をかけるのです。主人の招きは、迷い出た羊を連れ戻す羊飼いと同一働きではないでしょうか。自分では働き口を得られず広場にいる人々を、ぶどう園の主人が本来いるべき場所に置いてくれるのです。

すると、最初に雇われた人たちが不平を言っているのは筋違いであることがよくわかります。ぶどう園の主人は、朝早くから広場に行って、この人たちが本来いるべき場所に招いてくれたのです。

そして主人は時間を変えて何度でも、自分ではあるべき姿にたち帰れない人々を招いて、主人と共に過ごすチャンスを、最後の最後まで与えようとしているのです。長く本来の場所にいること、長く主人と共に過ごさせていることを、感謝こそすれ、不平を言うのは主人の思いを誤解

しているのです。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちも、早くから本来あるべき場所に置かれていながら、不平不満を述べていないでしょうか。ある身分に置かれている人、たとえば司祭とか、修道者とか、それぞれ一定の身分に置かれている人々です。その身分に置かれている時間が長くなっていくうちに、不平や不満が増して来ていないでしょうか。

本来は、イエスによって早くからこれらの身分に置かれていることを喜ぶ必要があるのに、「まる一日、暑い中を辛抱して働いている」そのことを声高に叫んではいけないでしょうか。早くから、主人のもとで一緒に過ごしていることへの感謝は、どこへ行ってしまったのでしょうか。

同じようなことは、信徒の中でも起こりえます。長く信仰生活を続けている中で、感謝の気持ちよりも不平不満を口にすることが増えているとすれば、もう一度生活を見つめ直す時だと思えます。早くから永遠の命の中に置いてもらい、早くから秘跡の恵みに養われてきたのです。もっと、イエスが喜ぶ言葉をたくさん思い浮かべることにはしましょう。

わたしたちは、神の計らいによって置かれている身分があります。神が招いてくださったからそこに置いてもらった身分です。決して自分ではそこへたどり着けなかった身分です。神の計らいに早くから身を置かせてもらったことを、今まで以上に有難くいただきましょう。

もし神の招きにあずかって日が浅い人々を見て、良くない思いが湧いてきたとしたら、わたしが思うべきこと、口にすべきことはほかにあると考えましょう。わたしたちのまことの主人であるイエスの気前の良さを深く学ぶことができるように、ミサの中で恵みを願いましょう。



## 年間第 26 主日 (マタイ 21:28-32)

父である神は二人の息子共に待っておられる

今週選ばれた福音朗読箇所は、「二人の息子のたとえ」です。福音の学びとして、「父である神は、二人の息子共にぶどう園に戻る日を待っておられる」としたいと思います。

その前に、今年の司祭団ソフトボール大会が明後日 30 日（火）と迫ってきました。去年は高校球児並みに練習を積みましたが、今年はそのまでの練習はできませんでした。「練習は嘘をつかない」と言います。練習が少なかったので、けがに注意して、チームのために尽くしたいと思います。欲を言えば、ホームランをお土産に一本打って帰りたいです。

福音の学びに入りましょう。まず「二人の息子」に声をかけた父親の心境から考えてみましょう。父親は二人の息子の性格をよく知っていたはずですが、ですから、二人の息子がどのように反応するか、そのあとでどのように行動するか、ある程度予想できたのではないのでしょうか。

兄に「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」（21・28）と言った時、「いやです」と拒んだことに驚いたかということ、案外予想していたのではないかなと思っています。つまり、「この子は最初は自分の考えを通そうとするけれども、後で考え直してくれる子だ」と理解していたのではないのでしょうか。

次に弟に同じように声をかけたとき、弟が「お父さん、承知しました」（21・30）と答えたときには「色よい返事だが、本当だろうか」と身構えたのではないかと思うのです。父親の目はそんなに節穴ではありません。何かを感じ取って、「悪い結果に終わらなければよいが」と心配していたと思うのです。

すると、このたとえは懐の広い神のご計画をたとえていることが分かります。「いやです」と最初は自分の主張を貫く人々がいます。そうした人々はいったん父である神に背を向けるわけですが、あとで父なる神に心に向け直すのです。

たとえ話の中では、出来事は「今日」になっていますが、このたとえが言い表している地上の世界では「いやです」と背を向ける期間は長いかもしれません。それでも、父なる神はこの人々が「後で考え直して」心を入れ替えてくれることを信じて待つのです。「いやです」と言った人々が立派だったから向き直ったのではなく、最後まで信じ続ける父なる神の思いがそうさせたのです。

いっぽうでこの世界には「お父さん、承知しました」と即座に返事する人々もいます。その中には悪意のない人々もいるでしょうが、明らかに父なる神の意に背いて返事をする人々もいるはずですが、父なる神は、同時にそのすべての人々が、御自分が命を与えたわが子であることを忘れないのです。

父なる神の期待などまるで意に介さない人であっても、その人に命を授けたのは父なる神です。その人が「お父さん、承知しました」と言

ったことの重大さを知ってほしいと願っています。たとえ最後まで理解しなかったとしても、わが子として見守り続けるのです。

「いやです」と言っはみたものの後で考え直した人々よりも時間がかかったとしても、最終的に時間切れとなったとしても、それでも父なる神は立ち返ることを待ち続けるのです。

最後にイエスは祭司長や長老たちを厳しく叱責していますが、これも彼らを裁こうとしているのではなく、どれだけ時間がかかっても心を開くのを待つ、父なる神の思いを知らせようとしているのです。

「お父さん、承知しました」と答えた弟は最終的にどうなったのでしょうか。父親はその息子をゆるしてあげたのだと思います。たとえこの部分は、イエスの救いの御業と関係しています。愛深い父なる神に最後まで心を開こうとしない人々のために、イエスは十字架の上で命をささげ、神と人との絆を取り戻してくださったのでした。

今週の「二人の息子のたとえ」は、わたしには「二人の息子共にぶどう園に戻る日を待っておられる父なる神の姿」として映ります。「いやです」といったん断った人々は、人生のどこかで思い直して神に立ち返りました。それだけでも十分に待っていてくださっていますが、神は「お父さん、承知しました」と言ったきりとうとう戻って来なかった人々さえもわが子として愛する道を探し続けたのです。ですからこのたとえ話は、現在進行中のたとえ話と言えるのではないのでしょうか。

わたしたちではとても信じられない長い間神は待ち続け、すべての人がぶどう園に戻ることを願っておられます。わたしは今、ぶどう園の中にとどまっているのでしょうか。「いやです」と拒んでいるのでしょうか。今日のみことばを、後で考え直す機会としてはいかがでしょうか。

または「お父さん、承知しました」と言っ、それっきりでしょうか。もしかしたらぶどう園の中にいるけれども、「お父さん、承知しました」と色よい返事だけを返して何もしないで立っていないのでしょうか。何もしないまま、人生が終わっても、「お父さん、承知しました」と返事をした責任は残ると考えるべきです。いつ責任を果たすのでしょうか。

イエスのたとえ話がまだ進行中のたとえ話であれば、わたしたちは一刻も早く、神のぶどう園で働き始める必要があります。子どもは子どもなりに、大人は大人の身分で、収穫の手伝いをして、父なる神と喜びを共にする必要があります。

一人ひとり、「わたしはあなたのぶどう園でどんな働きができますか」と問いかけてみましょう。すべての人が現状を考え直して一歩を踏み出す時、このたとえ話は完成し、神の国は見える形で実現するのです。



## 年間第 27 主日 (マタイ 21:33-43)

一致協力しなければ収穫を喜び合えない

司祭団のソフトボール大会を終えて帰ってきました。当日長崎佐世保では朝からひどい雨が降って、試合も 30 分遅らせて開始しました。司祭の中には独断で試合は不可能と判断して会場まで来なかった方々もいました。そのため地区対抗の公式戦ではなく、順位を付けない交流試合という形での開催となりました。

五島チームは何人か佐世保平戸チームから選手を借りて、長崎チームを相手に二試合することができました。試合は一試合目が十何対一の大差で負けました。五島チームの虎の子の一点は、わたしのランニングホームランです。二試合目は大接戦をものにして逆転サヨナラで長崎チームに勝ち、去年のドラマの再現となりました。

個人的な成績も悪くはなかったと思います。一試合目はわたしのホームランがなければ完封試合でしたし、二試合目もサヨナラホームインしたのはわたしですから、気分はいいです。ただ、二試合目センターオーバーを打って欲張ってホームまで突っ込んだら、キャッチャーが余裕で待っていてせっかくの長打をダメにしたことと、あとで観ようと思って撮影したビデオカメラに、一試合目は映ってなくて二試合目だけ映っていたことがショックでした。

さらに追い打ちをかけたのは、映像が残っていた二試合目の、わたしのバッティングフォームが無茶苦茶だったことです。本人は絶好球を打ったつもりでしたが、顔の高さのボールを大根切りしていました。よくまああれで外野深くまで飛ばせたと、呆れて物も言えませんでした。

ビデオの映像を見て思ったことがあります。チームのメンバーに手伝ってもらって何度も何度もバッティング練習したのは何だったのだろう。わたしが打撃練習している時に、仲間には「そこはボールよ。手を出さないで」とか、「バットが下から出ているよ」と口酸っぱく言ってもらったのです。それが全く活かされてない。本当にショックでした。

チームの中でわたしが機能するように、どれだけ後輩たちは気を遣ってくれていたことでしょう。たまたま遠くまで飛ばす力が優れているわたしに、試合で最もボールを飛ばせる高さをくどいほどに覚えさせてくれたのに、それを無駄にしてしまったのです。申し訳なく思いました。

さて、今週の「ぶどう園と農夫のたとえ」ですが、農夫に焦点を当てると、彼らはぶどう園を任せようとする主人の思いを踏みにじています。主人は、ぶどう園というある種の「チーム」の中で、農夫たちが最も機能するようにとあらゆる手はずを整えて、これを農夫に貸し与えたのです。見込み通りであれば農夫は最高に整えられたぶどう園でその能力を発揮して、主人が戻って来たときに収穫を受け取れるはずでした。

今、「ぶどう園」を、「ある種のチーム」と言いました。ぶどう園にかかわる人がたくさんいるからです。ぶどう園の所有者がいます。ぶどう園で働く農夫たちがいます。収穫を受け取りに行く僕たちがいます。

そしてぶどう園の跡取り息子がいます。

いろいろな人が関わって、互いに協力してぶどう園からたくさんの収穫を得て、みんなが喜ぶことができます。だからこのぶどう園はある種のチームだと思うのです。チームワークが良ければ結果も期待できますが、チームワークが取れなければどの役割の人にとってもマイナスの結果になるのです。

農夫たちは、ぶどう園の収穫を喜ぶためにはどの役割の人にもチームワークを大切にしなければならなかったのに、そのことを忘れてました。すべての準備を整えてぶどう園を貸し与えた主人、そこで丹精込めてぶどうを育て、収穫する農夫、収穫を受け取る僕、皆が一致協力して初めて、皆で喜びを分け合えます。それなのに、収穫を独り占めにしようとして、却ってすべてをダメにしてしまいました。

独りよがりな行動が全体をダメにすることは、今年のソフトボール大会で痛いほど分かりました。先頭バッターで長打を打ったのに、ホームでタッチアウトになった。これはチームのことを全く考えていない証拠です。三塁で止まっていれば、後の3人のうちだれかが自分を返してくれたかもしれません。仲間を信頼せずに暴走して、得点チャンスをダメにしたのです。成功を独占しようとして、チームに迷惑をかけました。

ぶどう園の主人は、協力を拒む農夫に最後の協力を求めようと自分の息子をぶどう園に送りました。これは御父が人間世界に送ってくださった御子イエス・キリストのことです。

ぶどう園の主人が一人息子を送ってくださった。父である神が、御子イエス・キリストを送ってくださった。これはどういう意味があるのでしょうか。わたしは、収穫の喜びを決して無駄に終わらせたくないとの強い思いを感じます。父なる神が、御子イエス・キリストを送ってでも神の救いの恵みに人類をあずからせようという強い思いを感じます。

今まさに、独りよがりな行動でぶどう園の主人の思いを無駄にしようとしている農夫、神の救いの恵みを無駄にしようとしている人類を何とか喜びに招こうというのが、一人息子を送る姿ではないのでしょうか。

「自分さえよければ」そんなちっぽけな考えを捨てて、ぶどう園の収穫の喜びが最大になるように一致協力する。同じように神の救いの計画が最大の実りをもたらすよう、自分にできる協力を惜しまない。独りよがりな行動を捨てる時、わたしたちは神の救いの計画に最大の貢献をする働き手になるのだと思います。



## 年間第 28 主日 (マタイ 22:1-14)

見かけた人はだれでも婚宴に連れて来なさい

年間第 28 主日は「婚宴のたとえ」が朗読に選ばれました。王が家来たちに、「見かけたものはだれでも婚宴に連れて来なさい」と指示を出す様子から学びを得たいと思います。

先週水曜日は天気も良くて、皆既月食を楽しむことができました。ですが同じ場所で見学した人たちの中には違う楽しみ方をした人もいたようです。わたしの後ろに立っていた人が、「おかしいなあ。月が2つ見える」と言っていました。そして 30 分くらいすると今度は、「おかしいなあ。上にある月はだんだん欠けてくるのに、下の月は全然欠けない」と言いました。どんな楽しみ方をしていたのでしょうか。

さて王が王子のために催す婚宴は、どれくらい価値のあるものなのでしょうか。おそらく、王が催す行事の中で、最大のイベントなのではないのでしょうか。王子が次の王として即位するまでは、ほかにこれ以上のイベントはないはずです。

王子の婚礼がこれほど重大な価値があると言うのに、婚宴に招いておいた人々は何をしていたのでしょうか。彼らは招待を無視し、ひどい人は招待した人を乱暴したり殺したりして、王を侮辱したのです。

それは、自分たちの暮らしは王が執り行おうとしていることと無関係であるという、王に対する明確な意思表示です。つまり、「わたしは毎日畑を耕したり商売に出たりしなければ生きていけない。王子の婚宴とわたしの日々の生活に、何の関係があるのか」と言っているのです。

本当に、彼らの言い分は正しいのでしょうか。日々の暮らしを平穩に迎えることができるのは、国の平和と安定を守ってくれている王のおかげではないのでしょうか。王子の婚宴は、これからも国の平和と安定が約束されるしるしのはずです。そうであれば、招いておいた人々の暮らしが滞りなく進んでいることへの感謝を表すために、何を置いても出席すべきだったと思います。王と喜びを共にしなかったこの人々は、高い代償を払わされることになりました。

王は、招かれていた人々に見切りをつけ、家来たちに新たな指示を出します。「町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。」(22・9) これは先程の考えに沿って捉えると、「あなたもあなたも、王のおかげで日々平穩な暮らしができていますよ。どうぞ王子の婚宴に来てください」そういうことだと思えます。

むしろ最初に招かれていなかった人々のほうが、自分たちと王とは日々の生活で十分つながりがあると理解したのです。このたとえを、イエスから直接話を聞いている人々がいたわけですが、招かれていた人々とはおそらくユダヤ人のことで、通りで見かけた人とは、異邦人、罪びと扱いされている人々、見捨てられた人々のことでしょう。王として現れている父なる神が、王子として紹介されている御子イエス・キリストの宴を催す時、出来事の重大さやわたしたちの日々の生活とのつながり

を理解できるかできないかは、恵みにあずかるかあずからないかの大きな分かれ目になるのです。

さてわたしたちに「婚宴のたとえ」はどのように結びつくのでしょうか。父なる神が御子イエスのために用意する宴はどこでしょうか。それはミサ、この祭壇上で行われる祭儀だと思います。御父が御子イエスを祭壇のささげものとして食事の用意を整え、わたしたちとすべての地上の人々を招いているのです。

そしてわたしたちは、招かれている人であると同時に王の家来でもあると思います。招かれた人として、毎日の生活と父なる神が御子イエスを通して招くミサには深い関わりがあることを認め、宴に参加します。同時に、「見かけた人はだれでも婚宴に連れて来なさい」との王の言葉を携えて、見かけた人はだれでも、この聖体祭儀に連れて来るのです。

「あなたの生活も、御子イエスが人類の救いのためにささげものとなっているこの祭儀と関わりがあります」そう伝えて、見かけた人はだれでも、悪人でも連れて来てよいのです。

今日丸尾の体育館で女性部のミニバレー大会が開催されます。金曜日の練習の様子からすると、かなり上位を狙えるような気がします。わたしたちが出かけて行って多くの人とミニバレーで交流を持つのは、スポーツによっても見かけた人はだれでも声をかけて教会同士のきずなを確かめ合うためだと思います。ぜひ、ここで出会った人の中で、もう一度ミサの宴に戻ってくる人を一人でも二人でも見つけていただきたいと思います。

父である神は、祭壇上でささげられる御子イエスの宴の意味と価値を理解するわたしたちに、「見かけた人はだれでも婚宴に連れて来なさい」と呼びかけています。この呼びかけに誠実に答えることが、わたしたちに求められている礼服なのではないかなと思います。



## 年間第 29 主日 (マタイ 22:15-21)

返すべきものを返すべきお方に返す

年間第 29 主日、年間の主日も残り少なくなってきました。それはつまり、教会の暦も終わりに近付いているということです。今週与えられた福音朗読は、「皇帝への税金」を取り上げて、ファリサイ派の人々がイエスと対決しています。今週の学びとして、「返すべきものを返すべきお方に返す」としたいと思います。

先週は女性部のミニバレー大会でした。わたしたち浜串チームはBブロックで熱戦を繰り広げ、優勝を勝ち取ってきました。中田神父はこれといって活躍していませんが、足でボールを拾ってチームのピンチを救った場面がありました。来週壮年のソフトボール大会なので、ここでも何とかお役に立ちたいと思っています。

ようやく台風が明けて、久しぶりにボートで釣りに行きました。手のひらくらいの鯛が 2 枚釣れて、あと 30cm くらいのキジハタが 1 匹釣れました。もっと沖に出ればまた違うのかもかもしれませんが、急病人などで呼び出されることも考え、船を港につながまで 30 分以内で戻れる場所を自分のいるべき場所と考えています。

さて、与えられた福音はファリサイ派の人々がイエスを罾にかけようとたくらむ悪意に満ちています。「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」(22・17) 質問する人々は、ただイエスを罾に陥れたいのです。イエスがどちらの返事をして、罾にかけることができたのです。

イエスはこの問題に直接答えることをせず、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」(22・21) と答えました。心ではローマによる支配を苦々しく思っているが、日常生活では皇帝の肖像と銘が刻まれた貨幣を平気で使用しているのだから、皇帝の要求にも応じたらよいではないか。だが神のものは神に返しなさいと釘を刺したのでした。

ここでは特に、「神のものは神に返しなさい」ここに込められた思いを探りたいと思います。皇帝がその支配する領土で税を要求する権利があるのであれば、なおさら、神がわたしたちに要求する権利は当然のことです。神も、御自分の肖像と銘が刻まれたものから要求できるのです。

この世にあって、神の肖像と銘が刻まれたものとは何でしょうか。それはわたしたち人間そのものです。神は御自分に似せて人をお造りになったと、旧約聖書の創世記にあります(創 1・26 参照)。わたしたちは神に似せて造られたもの、そして神のものなのです。ですから機会を見ては、自分を神にお返しする必要があります。

一人の修道女を紹介したいと思います。15 年くらい前から関わりのあるシスターで、わたしが出会った時はまだ大変活発に奉仕活動をしていました。しかし体調を崩され、脳梗塞も患い、病氣療養を続けたのですが回復せず、今は寝たきりで延命治療を 3 年も受けています。話しか

けても反応はなく、ただ見守ることしかできない状態です。

わたしは、このシスターが長いこと関わってきた視覚障害者のためのボランティアの代表を引き継ぎました。引き継いでみて、このシスターが今何を思っているかが分かるような気がしたのです。

ボランティア団体の代表を引き継いだ時点では、まだシスターとも意思疎通ができていました。わたしがボランティア団体のことを心配するのは半分くらいで済んだのです。ところが全く意思疎通ができなくなったときに、わたしの心配は半分ではなく、すべてとなりました。

おそらくこのシスターも、何もないところから立ち上げたボランティア団体と会員の行く末を、今も心配しているのだと思います。直接顔を出して様子を見ることができない分、一日 24 時間すべて、会員のことを心配する時間になっているはずです。

それは言いかえると、病室で延命治療を受けながら、「神のものは神に返しなさい」とのイエスの言葉に懸命に答えようとしているのだと思います。わが子のように大切に育ててきたボランティア団体を、身動き一つできない状態のまま思い続け、まさに命を削って見守ってくれている。これは、神から与えられたいのちを、今置かれている形で神にお返ししている姿なのだと思います。

ときどき、もうこんなに長く苦しい思いをしなくても、と思うことがあります。ですが、延命治療の中で日々ののちを削って会員のことを思う姿は、神の似姿として造られた人間の価値が、一日で咲いてはしぼむ花とは違うということ、苦しみの中で教えてくれているように思います。自分の時間は自分のものだけれども、何かの奉仕を通して人にお返しする、人への奉仕を通して神にお返しする。そういう生き方が会員皆に浸透するようお願いながら、今もいのちを削り続けているのだと思います。

わたしたちはどのようにして、「神のものを神に返す」のでしょうか。今日こうして礼拝に集まっている皆さんは、少なくとも 1 時間を、神さまにお返しできているのだと思います。その中でも、何もしないで 1 時間ここにいる人よりは、聖歌を歌い、祈りを唱え、みことばに真剣に耳を傾けるなら、よりよい状態で 1 時間をお返しできていると思います。ほかにも、お返しができない人に親切を施したり、救し難い人を救したりすることは、自分を神にお返しする立派な行いになります。

わたしたちは、「神のものは神に返しなさい」とのイエスの呼びかけに答える神の民です。「自分のものを自分の好きなようにしてはいけないか」という主張が横行する社会の中で、全く違う生き方を世に示していく民です。カトリック信者の生き方を通して、「わたしたちはどのようにしたらよいのでしょうか」と、神に心に向ける人が現れるよう、主に願いましょう。より多くの人々が、「神のものを神に返す生き方」を見いだして歩めるよう、ミサの中で願い求めましょう



## 年間第 30 主日 (マタイ 22:34-40)

掟にある最も重要な精神を示すイエス

年間第 30 主日の福音朗読として、「最も重要な掟」に関する律法の専門家とイエスとのやり取りが選ばれました。この箇所をわたしは、イエスが掟の精神について律法の専門家に答えていると理解しました。「掟にある最も重要な精神を示すイエス」について、学びたいと思います。

説教の前に、司教協議会からの通達に少し触れたいと思います。ミサの奉献文に「聖ヨセフ」の名を加える通達です。教皇庁典礼秘跡省は 2013 年 5 月 1 日（労働者聖ヨセフの記念日）付の教令で、ミサの奉献文の取り次ぎの祈りに、聖ヨセフの名を挿入することを発表しました。

これに伴い、日本語で唱えるための式文を日本の司教協議会は準備して、2014 年 6 月 23 日付で教皇庁典礼秘跡省から認証を得ました。そして日本のすべての教会で、11 月 1 日から正式に聖ヨセフの名を加えた形で奉献文を唱えるように、教令を發布しました。

実は一週間くらい前から、聖ヨセフの名を加えた形で奉献文を唱えています。祈祷書に載っている第二奉献文をよく見ながら奉献文に耳を傾けますと、「なお、わたしたちをあわれみ、神の母おとめマリアと聖ヨセフ、使徒とすべての時代の聖人とともに永遠のいのちにあずからせてください。」この部分が祈祷書と違っていることに気付くと思います。

わたしはこの聖ヨセフの名を奉献文に加える決定について、ずいぶん時間がかかったなあという印象を持っています。イエス・キリストの養父である聖ヨセフが、毎日のミサの中で唱えられてこなかったというのは、もっと早くに対応して良かったのではないかなあと思うのです。

けれども別の見方もあります。本年 10 月 5 日から 2 週間、バチカンでは「家庭についての臨時シノドス」が開催されていました。このタイミングで「聖家族」の柱であった聖ヨセフに光を当てたという見方もできます。家庭について全世界の代表者がバチカンに集まって討議しているので、神が奉献文に素敵な贈り物を用意してくださったのかもしれない。司祭は奉献文を唱えるとき、今まで以上に注意深く唱える必要が出てきましたが、いずれにしても画期的なことだと思いました。

福音に入りましょう。律法の専門家が、「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」（22・36）と尋ねました。律法は神がモーセを通してイスラエルの民に与えた掟で、生きる基準でした。「モーセを通して与えた」律法は、「イスラエルの民が、神の前にどのように生きるか」ということと切り離すことはできません。ところが律法の専門家は律法だけを抜き出して、その優劣をあれこれ議論していたのでした。

イエスはそこで、すべての律法が「民が神の前にどのように生きるか」を抜きにしては語れないことを思い起こさせるために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（22・37）これが最も重要な第一の掟であると答えたのです。

それはすべての掟が、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、

神を愛することにぶら下がっているということです。どの掟も、掟が授けられた精神をたどっていくと、掟がぶら下がっているもの、すなわち心を尽くして神を愛することに行きつくのです。

掟が依って立つ精神を知れば、掟を通してますます神に心を開き、神に近づく生き方を望むようになります。すると神の思いにも触れることとなります。神の思いは、隣人をないがしろにしない、隣人に背を向けない深い憐れみです。わたしたちは掟を通して神の思いに触れ、そこからしぜん隣人を自分のように愛する人に造りかえられていくのです。

どのような思いで掟が授けられたのか。これが掟を守る上で大切なことです。掟を守るために掟があるのではないのです。掟を守ることで、神をますます愛する人になる。これが掟の精神です。

そして、人が掟を通して深く神を愛するようになれば、神が隣人を深く憐れむ方であることを知り、同じように隣人を自分のように愛するようになるでしょう。イエスは掟の精神、その最も重要な部分を示して、すべての掟に調和をもたらし、掟が神に向かうように完成されたのです。

わたしたちにも、旧約時代から受け継がれている掟があります。それは十戒です。十戒には神を心から愛し、隣人を自分のように愛する掟の精神がはっきり刻まれています。わたしたちが十戒を大切に守るなら、わたしたちはより神の望みに適った生き方に導かれますし、隣人を自分のように愛する人に育つのです。

ほかに、教会の五つの掟があります。教会が求めているのは、これらの掟を通して、より深く神を愛する人になることです。なぜ日曜日にミサにあずかるのだろうか、なぜ少なくとも年に一度、告白し、御復活祭のころに聖体を受けるよう命じられているのだろうか。これらの掟に疑問が生じたときに、掟の精神にもう一度目を向けて欲しいのです。

掟を守ることで神を心から愛し、隣人を自分のように愛そうというのは、画期的な方法とは言えないかもしれません。とても地味で、どちらかと言えばやりたくない方法かもしれません。けれどもこの道は、心を尽くして神を愛するために確実に一歩進めるための道です。確実に一歩進むことは、いつになるか分からない二歩三歩よりも大切なことです。

昨日よりも今日、イエスが示してくれた掟の精神に近づく生活を積み重ねましょう。一歩進む、一点積み上げる、一墨先に進むことが本当に大切な場面はどこにでもあります。イエスが示された最も大切な掟を、すでに与えられている掟の中に認める力を、ミサの中で願いましょう。



## 死者の日 (ヨハネ 6:37-40)

すべての人が終わりの日に復活する

11月に入りました。教会の暦では死者の月です。今生きている人と死者の違いを今週考えてみたいと思います。そして、すべての人が終わりの日に復活することについて考えることにしましょう。

最近よくキジハタが釣れているのですが、前回出かけたときはいちばん釣れるだろうと思っていた時間帯にまったく釣れませんでした。どうしたことだと思っていたのですが、それらしい原因が見つかりました。イルカが四頭、悠々と泳いでいるのです。

わたしのボートから20mくらいしか離れていないところを、しばらく泳ぎ回っていました。おそらくイルカを警戒して、すべての魚がじっとしていたのではないのでしょうか。人間は何と鈍感なのでしょう。イルカが呼吸をするために水面に出てきて初めてその存在を意識したのです。水中で魚を追い回している間、魚はたまったものではないはずです。

というわけで釣り始めた場所をあきらめ、1kmくらい場所を移動しました。ここなら大丈夫と思ったのに、場所を変えてしばらくしたらまたイルカがやってきました。しつこいにもほどがあります。ただ、その後1kgくらいのキジハタを立て続けに釣ったので、イルカに追われたのがかえって幸運を呼び寄せることになり、悪い気はしませんでした。

今日の典礼に移りましょう。今生きている人と死者の違いをまず考えてみたいと思います。手足があるかないか、わたしの考えるところそういう点は大した違いではありません。むしろ、どれくらい神を意識しているかという違いが大きいとわたしは思っています。

つまり、生きている人はそれほど神を意識しなくても生きていくことができますが、死者は常に神を意識しています。この違いは大きいのです。実際、この世にあって神を忘れて生きている人、神がいることすら認めずに生きている人もいますが、死者は死後にすぐ第一の審判である私審判を受け、天国か、煉獄か、あるいは地獄のいずれかに置かれ、神の存在を常に感じているのです。

わたしたちは、神の存在を避けることもあるでしょうし、神から遠く離れて逃げることもあるでしょう。いつも神を意識して生きることは、心から願っている人であってもそう簡単なことではありません。

しかし、死者の置かれている状態は、言わば神と向き合っている状態です。死者は神の存在を片時も忘れません。神を避けることも、神から逃げることも不可能なのです。天国に迎えられている人は、神の愛を常に感じていますし、煉獄にいる人は神の深い憐れみを感じています。地獄にいる人が神をどのように感じるのかは分かりませんが、もしかしたら神の裁きは正しくまことであると感じているのかもしれない。

地上の人間も、徐々に神を意識するようになります。年齢を重ねながら、また人生のいろんな場面で病気を経験するたびに、あるいは罪のゆるしを受け、償いを果たすうちに、神を避けては生きられないことを

徐々に意識するのです。

すると、今日の福音朗読のみことばが誰のためのものであるかが分かってきます。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」(6・39) 復活の希望へと導く人を一人も失いたくないと願っているイエスの思いは、ほかでもないわたしに向けられているものなのです。

死者も、最後の審判と言われる公審判がまだ控えています。この公審判によって、煉獄にいる人々がすべて天国に迎えられます。天国に入るまでの間、煉獄にいる人々は神の憐れみを一瞬も忘れずに過ごしています。なぜなら彼らは疲れることも眠ることもないので、片時も神の愛の内に招かれる日を忘れないのです。

地上にいる人が片時も神の存在を忘れずに生きることは困難ですが、ミサに参加しているこの時間は、ほかのどの時間よりも神と向き合っていることを意識できる時間です。罪を抱えて神と向き合っているかもしれないかもしれません。または生活上の悩みや不安を抱えて神と向き合わなければならないかもしれないかもしれません。それでも、何とかここに集うことで、神を避けることなく、逃げることもしないひと時を作っているのです。

これはかけがえのない時間です。「たしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(6・40) 「子を見て信じる」という態度は、何よりもミサの中で果たすことができる姿なのです。

ミサに集い、神と向き合うなら、より深く神の存在を意識している身近な死者に思いを向け、わたしたちも神を間近に感じる時を過ごせます。死者の日のミサを通して、神を近くに感じる生き方を遠ざけない、むしろ喜んで受け取る勇気を願いましょう。



## ラテラン教会の献堂 (ヨハネ 2:13-22)

新しい神殿、新たな時代の幕開け

ラテラン教会の献堂の祝日を迎えました。ローマを巡礼したことがないので実際のラテラン大聖堂を見たことがないのですが、コンスタンチヌス帝によってローマのラテランに建てられたこの聖堂の記念は、十二世紀から11月9日に行われたと伝えられています。

この聖堂はローマ司教区の司教座聖堂ですから、初めはローマ司教区だけで祝われていました。わたしたち長崎教区も、浦上教会を司教座聖堂としていまして、献堂の記念は諸聖人の11月1日に長崎教区だけで祝うわけですが、「ローマと世界のすべての教会堂の母であり頭」「全カトリック教会の司教座聖堂」と呼ばれたラテラン大聖堂をたたえるために、全世界のローマ典礼の教会で祝われるようになりました。この日を共に祝うことで、ペトロの座に対する一致と親愛のしるしを表します。

福音朗読に入りましょう。今日のラテラン教会の献堂の祝日と関連付けて、わたしたちの教会のあるべき姿について考えてみたいと思います。イエスは神殿から商人たちを追い出しました。神殿の境内には、牛や羊や鳩を売っている者たちと、両替をしている者たちがいました。

当時の神殿での礼拝は、収入に応じていけにえをささげ、神殿税を納めていました。いけにえは、各自が持ち寄ってささげることも可能でしたが、遠方からはるばる礼拝に来る人たちにとっては、神殿でいけにえの動物を調達できるほうがはるかに便利でした。また神殿税は、当時一般に流通していたローマ皇帝の肖像が刻まれたデナリオン銀貨ではなく、神殿専用の古い貨幣で納める必要があったので、両替をする人もおのずと幅をきかせていたのです。

イエスはこれらの人々を追い出し、強い口調で立ちほだかります。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」(2・16) 神殿で売り買いをすることがイエスの神経に触ったのでしょうか。

それだけでは、「縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し(た)」(2・15) 行動が説明できません。イエスが腹立ち紛れにこのようなことをするとは考えられないからです。二度とこのようなことは行われぬ。今後、従来への礼拝に立ち戻ることは決してない。その決意の表れが見て取れます。

イエスは何を知らせようとしたのでしょうか。イエスはこの日の出来事で、「新しい神殿、新たな時代の幕開け」を知らせようとしたのです。動物のいけにえをいくらささげても、人間の罪が償われ、救いが完成することはありません。もはや後戻りすることのない救いの完成、イエスによって救われる新たな時代が到来したことを、はっきりさせるためにイエスは神殿から商人を追い出したのでした。

犠牲の動物をいくらささげても救いは完成しませんが、イエスがご自身を犠牲としてささげるなら状況は一変します。神は御子の犠牲を受

け入れられ、人類を救ってくださいます。わたしたちは御子が十字架の上で完全な犠牲をささげてくださったことを知っており、この犠牲は今もカトリック教会の祭壇の上で繰り返し行われていると理解しています。

祭壇で行われるミサを通して、動物の犠牲では果たせなかった完全ないけにえがささげられます。そして今日は、ラテラン教会の献堂を祝い、全世界の祭壇でミサをささげることで、一致してこの世界には新しい神殿が建てられていて、新たな時代が到来していることを世に示しているのです。

ところで、イエス・キリストという「新しい神殿」でご自身を犠牲としてささげた唯一の礼拝はすでに完成していますが、この唯一の礼拝は、世の終わりまで受け継がれる必要があります。イエスはご自分をいけにえとしてささげる礼拝を、ミサという形で弟子たちに残し、「記念として行いなさい」と命じました。

ミサ聖祭は、イエス・キリストの身分において祭儀を執り行う司祭と、祭壇を囲む信徒によって行われます。司祭はここにいますが、祭壇を囲む信徒とは誰のことでしょうか。わたしは、今日堅信の秘跡を受けて大人の信徒の仲間入りをする受堅者が、祭壇を囲む信徒なのだと思います。

つまり、堅信の秘跡を受けるまでに長い準備を行い、堅信の秘跡によって聖霊の七つのたまものを受けた信徒が、これからも教会に与えられなければ、イエス・キリストによる唯一のいけにえ、唯一の礼拝は続けていくことができないと思うのです。

もちろん司祭は必ず必要ですが、たとえ司祭がいても祭壇を囲む信徒がいなければ「主は皆さんとともに」「また司祭とともに」というミサ聖祭は豊かさを失ってしまいます。洗礼の恵みを強められ、信仰を強く表す聖霊のたまものを受けた信者が、これからの教会に必要なのです。

中田神父が考える教会のあるべき姿は、堅信の秘跡を受けた大人の信者が常に与えられ、祭壇を囲む姿です。信仰に反する考え方や態度に勇敢に立ち向かい、祭壇を囲んでくれる姿です。イエス・キリストの唯一の礼拝であるミサに集い、共にささげる信徒が絶えない教会です。

堅信の秘跡を受けた信徒がこれからもミサ聖祭にたえず集まる教会は、自分たちが受けた聖霊のたまものによって、信徒同士の活動と、宣教活動にも照らしを与えられ、教会は活動していくでしょう。

今年も、堅信の秘跡を受ける子供たちが上五島地区にたくさん与えられました。イエス・キリストという新しい神殿による唯一の礼拝はすでに始まり、新たな時代が幕を開けています。今年受堅者にも豊かに聖霊の恵みが与えられ、「わたしを教会の中で使ってください」と勇気をもって答える人に育っていけるよう、わたしたち皆で願い求めることにしましょう。



## 年間第 33 主日 (マタイ 25:14-30)

この一年の清算は人生全体の総決算にもつながる

年間第 33 主日、来週の「王であるキリスト」を迎えると典礼暦も終わりを迎えます。僕たちの主人が、僕に預けたお金の清算を始める場面は、わたしたちにこの一年どのように過ごし、どのように結果を出したか問いかけているようです。「この一年の清算は人生全体の総決算にもつながる」こうした点について考えてみたいと思います。

たとえ話の主人は、僕たちにお金を預けています。細かい指示は出さず、僕たちが思い思いに活用して儲けを出すことを期待しているのが分かります。もし、このたとえが主人にどれくらい忠実に仕える僕であるかを測るたとえであるなら、細かい指示を出して、その指示にどれくらい忠実であったかを判断材料にするでしょう。

そうではなく、このたとえは主人が自分を信頼してお金を預けてくれたことを喜びと感じ、どれくらい積極的に活用するかを見ようとしているのだと思います。そしてこのたとえから天の国について考えるなら、規則や指示から右にも左にも逸れなかったことが天の国で評価されるのではなく、信頼されていることを喜びと感じて、どれくらい積極的に動いたかが評価されるということです。

皆さんは、積極的に動いてみなさいと言われてお金を預けられたとき、どのように行動するのでしょうか。タラントンという単位は 6000 ドラクメ、何かの仕事に就いてほしい 20 年間働いて稼ぐお金です。年間 300 万円の稼ぎがある人なら、20 年分で 6000 万円ということになります。これが 1 タラントン。5 タラントンと 2 タラントンは、それぞれの倍数になります。

金額がピンと来なければ、少し金額を下げてみましょう。一人には 500 万円、一人には 200 万円、一人には 100 万円預けた。これくらいの金額でしたら、実感が湧くかも知れません。さてこれだけのお金を主人から預かって、みなさんはどのような積極策に打って出るのでしょうか。

たとえ話の主人は、銀行に入れればよかったのにと、主人を恐れている僕を叱りつけていますが、今の時代、銀行の利子は当てになりません。100 万円銀行に入れても、金利 0.1% と仮定して 1000 円しか利子は付きません。主人に利子 1000 円を返すくらいなら、今の時代だったら非課税枠の投資に回したほうがましだと思います。

200 万円預けられたら何を考えますか。わたしは半分は非課税枠の投資、半分は教会の絵葉書を販売します。これで別に 200 万円生み出そうと思います。もっと預かる、500 万円預かる立場なら、半分は投資と絵葉書の販売、残る半分で鮮魚店を開店します。仕入れも自分でします。これで別に 500 万円を手に入れる目論見です。

「神父さまは働いたことがないから簡単に考えている」と笑うかもしれません。また、違う計算を立てる人もいるでしょう。いずれにしても、主人が僕に期待することは、任せられたことを喜びと感じてくれる

ことです。任せられたことを重荷と感じ、わたしに任せただけが悪いのですよというような態度を、主人は最も嫌うのです。

主人は僕の報告を聞きながら、こんなことを言いました。「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」(25・21,23) 主人にとっては、預けたお金は大した問題ではないのです。わたしたちには大きな金額に見えるかもしれませんが、主人が見ているのは任せてもらった僕が、任せられたことを喜びに感じているかどうかなのです。

わたしたちも、まことの主人に人生という限られた時間の中で預けられたものがあり、それを元手に積極的に行動することを期待されています。ある人は優れた頭脳を預けられているかもしれませんが。ある人は、友達づくりの才能を預けられているかもしれませんが。またある人は音楽やその他の芸術、または運動の才能が与えられているかもしれませんが。それらを積極的に活用して、まことの主人である神を喜ばせるような最終報告を待っているのです。

考えてみると、わたしたちが与えられた才能は「少しのもの」に過ぎないとも言えます。わたしの才能が人類の運命を握っているわけでもありませんし、わたしの芸術活動が歴史を塗り替えるわけでもないと思います。たとえそうであっても、才能を与えられたことは喜びと感じてほしいし、結果を報告するわたしたちを神は喜んでくださるのです。手放しで喜んでくれる神が待っておられるのに、それに答えられない理由がどこにあるのでしょうか。

神はわたしたちに、さまざまな才能を預けました。神が最も恐れているのは、それらの才能を重荷に感じて使わないことです。神がわたしに友達をつくる才能を与えてくれた。それなのに家に閉じこもってだれとも友達にならない。芸術やスポーツの才能を与えられたのに、それを使って人に感動を与えようとしない。こうして神に報告するものを何も準備しないことを、神は最も恐れているのです。

典礼暦は一年の終わりに近づいています。教会の暦を過ごす中で、「御覧ください。積極的に動いて、こんな結果を出しました」と、この祭壇を囲みながらまことの主人に報告をしましょう。こうして典礼暦の終わりを迎えるたびに、祭壇でわたしたちを待っておられる主に報告できるなら、それはそのまま、人生全体の総決算にも生きてくると思います。

人生のいろいろな時期で、わたしたちが任せられるものの量や質は変わってくることでしょう。それでも、任せられたことをつねに喜びと思い、誇りに思い、任せられたものに応じた報告を「御主人様、御覧ください」と声を上げることができるよう、ミサの中で照らしを願ひましょう。



## 王であるキリスト (マタイ 25:31-46)

最も小さな者に駆け寄り、癒す共同体に

王であるキリストの祭日を迎えました。典礼暦を振り返りながら、今年の典礼暦、どのようにキリストを王として認め、受け入れてきたか確かめることにしましょう。キリストを王と認める具体的な行動は「最も小さな者のためにどんな行動をしたか」を問うことでもあります。

恥を忍んで逃がした魚の話をしてします。浜串漁港からまっすぐ700mほど沖に出るとキジハタやアコウが釣れるのですが、ついこの前ここで大きな魚をかけた。直前に1.5kgの鯛を上げていたのですが、ドラッグ調整は問題ないはずだったのですが、ジャーっと音を立てたまま糸が出て行き、リーダーが瀬に当たったのか、あっという間にサヨナラでした。

この魚は針を口に差したまま今も泳いでいるはずですが。針はケイムラ真鯛鈎のSサイズです。オサダの釣具コーナーのレジ寄り、いちばん右端に並んでいた針です。もし、この針を2本口にくわえた魚を釣り上げましたら、それはわたしが一度かけた魚です。ぜひわたしのところに持ってきてください。

では典礼暦を振り返りながら、最も小さな者のために続けてきた行動を思い起こしてみましょ。教会の暦である典礼暦は、待降節から始まります。待降節の準備を経て、わたしたちは救い主イエス・キリストの誕生を喜び合います。待降節と降誕節の中で、わたしたちは「最も小さな者」のために一つのことを欠かさず実行しています。上五島の中心部にある商業施設の周辺で行う「街頭募金」と、クリスマス当日に行う「クリスマス募金」です。

特に街頭募金は、時には寒さ厳しい中で、その年にさまざまな災害に遭った被災者のために全くのボランティアで呼びかけをしています。この募金は確実に、最も小さい人々を助ける力になります。

償いの季節である四旬節には、カリタスジャパンの呼びかけに応じて「四旬節愛の献金」を実施しています。これは自分たちの生活の中から、四旬節の犠牲の意味も含めて、それぞれが可能な範囲でおささげをするものです。この献金も、日本全体で集められてたくさんの方々に充てられています。

キリストの勝利をたたえる復活節・年間を通しては、たとえば長崎教区では女性部のいのちの募金や、教区全体で取り組む一菜募金などが、最も小さな人々の支援のために活かされています。ここまでは、募金や献金を通しての最も小さな人々に対する配慮でした。

今年長崎教区は、大きな方針を立てようとしています。それは教区シノドスでまとめようとしている提言案です。来月発行される長崎教区の教区報「カトリック教報 12月号」に、現時点でまとめられた最終提言案の全文が掲載されています。その中で「教会から遠ざかっている、また遠ざけられている兄弟姉妹への配慮」を第一の課題として掲げ、共に連れ立って『父の家に帰ろう』と呼びかけています。長崎教区は「『最

も小さな者』とは教会から遠ざかっている人々、教会から遠ざけられている人々である」という結論にたどり着いたわけです。

ここで福音朗読に目を留めてみたいと思います。すべての民族を裁く王として来られるイエスは、右側にいる人たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」(25・34-36)

イエスは王座にどっかり座って最も小さな者に意識が向かない王ではありません。最も小さな者が叫びをあげれば、飛んで行ってその叫びに耳を傾け、癒す王です。長崎教区民もそうでなければならぬと、今年の教区シノドスの方針を決めたわけです。

共に連れ立って「父の家に帰る」その道筋として3つの具体策が示されました。「①司教・司祭・修道者・信徒の回心と霊的養成②祈りと信仰教育を再興し、カテキスタ養成、司祭・修道者召命に力を注ぐ③よき隣人として、傷ついた人たちを癒やす教会共同体であること」です。

とくに3つ目の項目「よき隣人として、傷ついた人たちを癒やす教会共同体であること」は、今週の福音朗読の呼びかけと呼応しています。「最も小さな者」を心にかけて、その人々にとって癒しとなることが長崎教区の教会共同体の歩むべき道になります。イエスが最も小さな者を見てそのもとに駆け寄ったように、わたしたちも同じ生き方を求められているのです。

福音朗読の中に登場する王は左側にいる人たちに言います。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。」(25・41-43)

たとえば長崎教区の司祭たちは、「最も小さな者」の痛みに関心でなければならぬ立場にあります。それなのにこれまで鈍感であったことを率直に認め、ゆるしを願わなければなりません。今まで声も出さずに司祭の鈍感さを忍耐し、自分の痛みをこらえていたかもしれません。

過ちのゆるしを請い、再び司祭たちが最も小さい人々に敏感になり、教区民みなで最も小さな者をイエス御自身と受け止めてお世話する。そのような教区に新しい典礼暦年から歩み出すことができるように、ミサの中で恵みを願いたいと思います。



## 待降節第 1 主日 (マルコ 13:33-37)

救い主を待ち望む心と呼び覚ます

待降節、新しい典礼暦年が始まりました。「救い主を待ち望む心」を呼び覚ましましょう。「目を覚ましていなさい」という主の呼びかけに答えて、去年の待降節と何か違う心構えを準備できるようにしましょう。

この前調子に乗っていっぱい根魚を釣り上げましたという話を入れようと思っていたら、福見教会出身の岩本繁幸神父さまから 24 日のクリスマスイブから 25 日クリスマス当日にお休みを取って帰省しますと電話がかかってきました。

ミサの時間は何時ですかと言われたので、思い切って 24 日福見の夜 7 時のミサと、25 日朝 9 時の高井旅のミサをしてくれとお願いしましたら、いいですよとすぐ承諾してくれました。そういうわけで、福見と高井旅のミサは岩本神父さまがささげてくださいます。

今、岩本神父さまは教区会計という重い務めを果たしながら、カトリックセンターで日々人間関係に苦労しているだろうなあと思っています。ですから、今回は巡回教会の皆さんとミサをささげて大いに慰められるに違いないと思っています。

わたしたちはどうかすると、クリスマスも毎年のこととしてその年その年のクリスマスの違いを意識しないで迎えることがあり得ます。けれども各自よく考えると、毎年何かしらの違う環境の中で待降節を過ごし、クリスマスを迎えるのではないのでしょうか。

たとえば、子供たちがいる家庭であれば、子供たちの成長に応じて、去年と今年では違った待降節、違った降誕節を迎えているはずです。上の学校に行くことになり、県内県外に子供がでることになれば、家族みんなを迎えられるのは今年までかもしれません。就職していよいよ離れた場所で住み始めるとなればなおさらです。家から離れる子供たちも、今までとは違った環境で待降節・降誕節を迎えることになります。

ある人は結婚し、新しい家庭の中で今までと違った待降節を過ごし、クリスマスを迎えます。子供に恵まれれば、今まで存在しなかった全く新しい命と、この季節を迎えるわけです。赤ちゃんの声がある環境で迎えるクリスマスは、聖家族の雰囲気味わえる特別な時期です。

ある人は家族を見取る時期が来ています。今年の待降節とクリスマスは、来年は見取っている家族がこの世を旅立ち、一緒に祝うことはできないかもしれません。すると今年の待降節とクリスマスは特別なものになります。一日一日、大切に過ごしたいと思える日々になるでしょう。

中田神父は「浜串小教区の皆さんと過ごす 5 回目の待降節だなあ」と思っています。やはり 5 回目ともなると、この先そう長くは皆さんとこの季節を過ごせないだろうなあと思うわけです。司祭は常に異動が付きまといまうから、今年も浜串小教区の皆さんとこの時期を迎え、クリスマスを迎えられるなあと感謝するのです。本当にありがたいことです。

何らかの、目の付けどころを持って、これからの待降節を過ごしてほしいと思います。準備したり待ったりという営みは、つつい単調なものになりがちです。環境の違いがあるかもしれないし、心境の違いがあるかもしれませぬ。立場の違いもあるだろうし、楽しみの度合いも、緊張の度合いも毎年違う人がいるはずです。

そうした違いを見つけて心に留め、待降節を実りあるものとしていきましょう。今週選ばれた福音朗読には、「目を覚ましていなさい」という呼びかけが繰り返されています。朗読では主人の帰りを、目を覚まして待っているようにとありますが、わたしたちは救い主の到来を、目を覚まして待ちます。

神の御子イエス・キリストの到来が、待降節を心して過ごす唯一の理由です。イエスはわたしたちを救いへと引き上げてくださる唯一の希望です。イエス・キリストが与えられるという喜びには何物も代えられない。かたい希望のうちに、これからの待降節を過ごすことにいたしましょう。

待降節第 2 主日(マルコ 1:1-8)



## 待降節第 2 主日 (マルコ 1:1-8)

主の道を整える生き方を現代に

待降節第 2 主日は、洗礼者ヨハネが登場する場面が福音朗読に選ばれます。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という叫びに、わたしたちはどのように応じたらよいのかを今週考えることにしましょう。わたしたちが相応しく洗礼者ヨハネの叫びに答えるなら、現代に洗礼者ヨハネの叫び声を生きたものにする事ができます。

ここ数週間で、記憶に残る興味深い人と出会いました。先月お会いしたのは一組の若いカップルで、先祖に中田藤吉・中田藤太郎神父さまを持っている人でした。わたしも中田姓ですから当然この 2 人の中田神父さまは先祖がつながっていきまして、初めてお会いした若い青年なのに、先祖の話で話し込んですっかり打ち解けてしまいました。現在平戸で病院勤務ということなので、将来また会うこともあるでしょう。

もう一人は、曾根の巡回地から来た人でした。この方も全く知らない人ですが、親同士が兄弟で福見に住んでいる人を訪ねてみたがその時は会えず、せつかく福見教会の近くに來たから主任神父さまに挨拶してから帰ろうと浜串の司祭館を訪ねてくれたのでした。

その人は話をしているうちに声が詰まり、福見を訪ねて行った人のことを、もっと早くから親しくしておくべきだった、このまま疎遠になりはしないかと心を痛めている様子でした。訪ねに行くまでにこんなに時間がかかってしまったと、初対面のわたしの前でさめざめと泣くのでした。わたしは昼ごはんの真っ最中だったので、涙ながらに話すその人の話をおかずにご飯を食べたのでした。

この二通りの出会い、何がわたしの心に響いたかという点、信仰にまっすぐ生きているという点です。先祖をたどって五島までやって来て、共通の先祖がいるわたしに信仰に生きた先祖の話を目を輝かせてしている。福見のおじさんが生きている時に世話になって、今おじさんに恩返しができない分、何十年も会っていないとこの人に会って、おじさんの分まで恩返しをしたいと涙ながらに話している。この人たちには一本筋が通っていると思ったのです。

筋が通っている人の話、信念を曲げずに貫いている人の話は心を打つものです。なぜでしょうか。その人の中に、まっすぐに通った道があるからです。カトリック信者にとってそれは主の道です。主が通られる道筋がその人の中にまっすぐにひかれています。こういう人の話はいつも人の心を打つのではないのでしょうか。

わたしは、最近出会ったこの二通りの人たちは、すでに洗礼者ヨハネの叫びに耳を傾け、その呼びかけに答えて生き始めている人々だと思いました。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」(1・3) 主のために道を整え、自分の生き方に主を迎えることを最上の喜びとし、その他のことを横に置ける人々です。

今回出会った人々が、その生き方を貫いてくれたらと願っています。

先祖の信仰を目を輝かせて語る生き方。親の信仰を誇りに思い、いとこ  
と思ひ出話を語り合いたいと涙ながらに切望する生き方。それで十分で  
す。どちらも、語ろうと思えば自分の成し遂げたことを語れるでしょう。  
それをあえて横に置いて、信仰にまつわる話を最優先に語る。こういう  
人は、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」この洗礼者ヨハネ  
の叫びを現代によみがえらせている人だと思ふのです。

主をお迎えする道をまっすぐに通すため、他のものを横に置ける人  
は誰でも、現代に洗礼者ヨハネの叫びをよみがえらせる人です。この生  
き方は、現代に対する挑戦でもあります。現代は、「物質的繁栄」「経  
済最優先」という道をまっすぐに通すために、他のものを横に置く生き  
方が幅を利かせています。誰かの受け売りみたいですが、「この道しか  
ない」と言っています。

では経済最優先で信仰を横に置いて、わたしたちは救い主を本当に  
お迎えできるのでしょうか。信仰の話は、時として声を詰まらせるほど  
の深みがありますが、経済の話で声を詰まらせることが果たしてあるで  
しょうか。救い主をお迎えする準備をなさいと叫ぶ洗礼者ヨハネの声  
を、荒れ野に閉じ込めてしまってよいのでしょうか。むしろ、経済最優先  
と叫んでいる社会の中心で、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせ  
よ」と響かせるべきではないのでしょうか。

わたしの生き方には、信仰のまっすぐな道がひかれていますか。経済最優先で、信仰の道は石だらけの歩きたくない道となっ  
ているのでしょうか。救い主をお迎えし、救い主に確実にお会いするためには、  
「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という声に耳を傾ける必  
要があります。

これからの約三週間、救い主を迎えようとしている人なのだと周り  
の人にも感じさせる生き方を工夫しましょう。主を迎えることが何より  
大事なのだと周りの人に感じさせることができれば、あなたもまた洗  
礼者ヨハネの叫びを現代によみがえらせている人なのです。



## 待降節第 3 主日 (ヨハネ 1:6-8,19-28)

あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる

待降節第 3 主日、今年 B 年の福音朗読は洗礼者ヨハネに与えられた役割「使命」について紹介されています。わたしたちも、洗礼者ヨハネのように神から「使命」を託されていると思います。洗礼者ヨハネの使命に学びながら、わたしたちの果たすべき使命について思い巡らし、使命を果たす方法を考えてみましょう。

国政選挙当日を迎えました。大切な一票を無駄にしないように、誠実に投票して来てください。わたしはすでに期日前投票を済ませておりますが、クリスマス会を邪魔されたことと、多額の費用を使って何のための選挙なのかという疑問はどうも拭えませんでした。

さてヨハネ福音記者は、洗礼者ヨハネのことを「彼は光ではなく、光について証しをするために来た」(1・8)と紹介します。決して自分が光であると言ったりせず、光について証しすることに徹しています。これは、洗礼者ヨハネが、自分に託された使命をはっきりと自覚しているしるしだと思います。

自分の使命を十分に理解している人は、自分に託されていることを完全に果たすことに力を注ぎ、そこに集中するものです。たとえば野球では監督が場面によって打者に送りバントを命じることがあります。かつてバント職人と言われた川相昌弘選手は、ギネス記録となる通算 533 本の送りバントを決めました。

彼がバントをすれば、相手投手がどんなに難しい球を投げても、簡単にボールを転がしました。簡単ではなかったはずですが、観ている人にはいとも簡単にこなしているように見えたのです。自分に託された仕事を完璧に果たすために、常に集中していたからこそできる業です。使命に徹し、使命に生きる人の姿です。

洗礼者ヨハネは、「光であるイエス」について証しをすることに徹しました。まだイエスの働きはベールに包まれていましたが、自分は「荒れ野で叫ぶ声」(1・23)となり、「主の道をまっすぐに」(同)して舞台から去り、イエスに場を譲ったのでした。その時点ではイエスよりも洗礼者ヨハネのほうが評判を得ていましたが、彼が自分の使命を取り違えることは決してなかったのです。

洗礼者ヨハネはなぜ、自分の使命を正しく理解できたのでしょうか。実は洗礼者ヨハネの証しは今週選ばれた朗読箇所と、そのあとに続く二つの証しがセットになっていて、三日連続の証しが行われています。今日の朗読では、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である」(1・23)が中心になっています。

二日目は、自分のほうへイエスが来られるのを見て「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ」(1・29)と証しします。三日目は、「水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人で

ある』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである」（1・33-34）とあって、三日間の証しのどこかに、自分の使命を正しく理解した鍵があるはずです。

わたしは「わたしをお遣わしになった方が・・・であるとわたしに言われた」この部分が鍵だと考えました。「これこれの様子を見たら」と、洗礼者ヨハネは自分に対する声を聞いたのです。声を聞いたことで、自分の使命は「荒れ野で叫ぶ声」であり、声の持ち主は自分ではなく、これから出会う方であると理解したのです。使命を与える方の声ははっきりと聞こえたので、使命を取り違えることもありませんでした。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちにも、神は使命をお与えになっていると思いますが、その声は聞き違えたり、間違えたりしないほどはっきりしているのでしょうか。

わたしは、一人ひとりが自分に都合のいいように聞こうとしない限り、使命をお与えになる神の呼びかけははっきり伝わっていると思っています。そのことを考えさせるのは、洗礼者ヨハネが彼のもとに集まったファリサイ派に属する人々に言った言葉です。「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。」（1・26）

これは文字どおりには、ヨハネのもとに遣わされたファリサイ派に属する人々の間に、あなた方の知らない方がおられるという意味ですが、わたしは踏み込んで、「わたしたち一人ひとりの心の中に、あなたがたの知らない方がおられる」と考えてみました。

つまり、わたしたちに使命を授ける方は、わたしたちの中にとどまってくださって、その使命を間違いなく実行できるように導いてくださると考えたのです。ですから、わたしたち一人一人に与えられる使命は、都合のいいように聞こうとしない限りははっきりと響いていて、常にその使命に生きる生き方から逸れないように、イエスが共にいて導いてくださると思うのです。

与えられた使命は、それぞれ違いがあるでしょう。生活全体をささげておこなう使命もあるでしょうし、家庭の中で、職場の中で果たしてほしい使命もあるでしょう。ぜひその使命をこの待降節に心の中で確認し、反芻してください。やがてお迎えする救い主の成長と共に、自分の使命を確実にまっとうして神の国の完成のために働くことができますように、このミサの中で取り次ぎを願ひましょう。



## 待降節第 4 主日 (ルカ 1:26-38)

神の計画に一步身を引いてみる

待降節第 4 主日、天使のお告げでマリアにイエスの誕生が予告される場面が福音朗読に選ばれました。マリアは人間の知恵では完全に把握できない出来事を受け入れようとします。人間が知恵を巡らせても把握できないとき、どのようにして出来事を受け止めるのか、マリアは教えてください。

12月19日、エコー検査のために奈良尾診療所に出向きました。障子紙を張り替えるときの糊みたいなものをお腹に塗って、機械を当てて診察するのですが、肝臓を脂肪がぐるぐる巻きにしている、写真を見せられてもどこが肝臓なのか分かりませんでした。

「脂肪肝です。内臓脂肪でいっぱいです。」わたしには脂の脂肪ではなくて、心臓が止まるほうの死亡に聞こえました。もはやわたしの内臓は死亡しているのだ、そんな死亡宣告を聞いた感じがしました。

「中田さん。このままでは肝硬変になって、取り返しがつかなくなります。」先生の話では、脂肪肝は健康体に戻る可能性があるけれども、肝硬変を発症したら決して戻らないという話でした。かわいい女医さんなのに、恐ろしいことを言うなあと思って聞いていました。

あきらめる前に、一步引いて考えてみることにしました。考えようによっては、手遅れとは言われなかったのですから、後戻りできる、健康を取り戻す可能性は残っているということです。だったら、つべこべ言わずに内臓脂肪を落とす努力を始めればよいわけです。

そこで、ありきたりなことですが、時間を見つけて歩く。これ以上に確実な方法はありません。もはや言い逃れできなくなったので、カレンダーに印をつけながら、できるだけ歩くようにしたいと思います。

今週はイエスの誕生が予告される場面が福音朗読に選ばれました。天使ガブリエルが、特別なメッセージを携えてマリアのもとに遣わされます。天使ガブリエルは、神から託されたメッセージをそのまま届けますが、マリアは出来事の大きさに戸惑います。自分が身ごもって男の子を産み、その子はいと高き方の子、ダビデの王座につき、永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがないと言うのです。

マリアは、天使のお告げが何のことか分かりません。天使は、続けて説明してくれるかもしれないので、「どうして、そのようなことがありますでしょうか」(1・34)と問いかけます。天使は、マリアの理解を超えるこの出来事は、聖霊の働き、いと高き方の力に包まれて起こることだと説明しました。

ここで、マリアが人間的な理解力に頼って判断しようとしていたら、判断を誤っていたかもしれません。出来事は人間の理解を超えることだったからです。人間が正しく判断できる事柄は、人間の理解が及ぶ出来事に限られます。それ以上のことを正しく判断するのは、人間には不可能なのです。

そこで、マリアは一步引いて考えました。自分は主のはしため、主の召し使いではないか。主人が自分をよいように計らってくださるはずではないか。それなら、自分の考えの及ばないことまで考えておられる主に信頼して委ねよう。

考えの及ばないことを示された時、一步引いて考えるとよい判断にたどり着くことがあります。騙されようとしている人は、自分だけで判断しようとして却って騙されるのです。もし一步身を引いて、近親者や第三者にひとこと相談すれば、大金を騙し取られる人ももっと少なくなるでしょう。そのように、一步引いて考えるときに、目の前だけでなく、もう少し広く見渡せるようになったり、もう少し遠くを見通せるようになったりするわけです。

マリアは一步引いて考えました。一步引いたとき、主なる神が出来事を中心にいて、導いていることを知りました。出来事がどのように進んでいくのかは分からなくても、主なる神が中心にいて働かれるのだから信頼して受け入れよう。そう決断したのです。一步引いて、見えなかったことが見えるようになり、恐れに囚われていた心が解放されました。

人間が知恵を巡らせても把握できない場面で、どのようにして出来事を受け止めるのか、マリアは教えてください。それは一步身を引いて考え、観察することです。思い通りにならないこと、いくら言っても理解してもらえないことなど、わたしたちの生活にはなぜと言いたくなるいろいろなあつてしょう。

それら難しい出来事に、マリアはお手本を示してください。あなたの立っている場所から、一步引いてみなさい。そうすることで、見えなかったものが見えるはず。マリアは人類に与えられる救い主の母となる場面で、率先してお手本を示してください。 「いや待てよ」とか「ちょっと待てよ」と立ち止まったり一步引いたりすることは、本当に必要なことを見極めるために必要な時があるのです。マリアがそれを教えてくださいました。

マリアが一步引いて考えてくださったことで、神が人を救う計画がいよいよ実現しようとしています。神が歴史の中心に置かれて、歴史が動こうとしています。わたしたちも、神の計画の前に一步身を引くことを学びましょう。人間が一步引くことで神が出来事を中心にいて、出来事は最高の結果をもたらす、わたしたちは喜びに満たされます。



## 主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

天の大群が加わり、神を賛美した

主の降誕おめでとうございます。今日は全世界の教会と、主の降誕を祝ってミサをささげています。ふだんわたしたちが全世界の教会とのつながりを意識することは少ないかもしれませんが、今日は全国津々浦々、全世界の地の果てまで、救い主の誕生を喜び合うのです。

まず、マリアが救い主イエスを産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた馬小屋に目を注ぎましょう。どんな家族にとってもそうですが、新生児が夫婦に与えられると、その家庭の中心に置かれるものです。場所的な意味合いというよりも、生活が、幼子中心に回っていくようになるわけです。

このだれもが理解できる自然な姿は、わたしたちに救い主を迎える最後の準備を促します。わたしたちも、救い主・幼子イエスを迎える場所を、わたしたちの生活の中心に用意しなければならないのです。

ここでも、場所的な意味合いというよりも、生活と関わっています。今日わたしが喜んで受け入れた救い主は、生活の中心に置かれようとしているのでしょうか。日曜日の過ごし方を考えるときに、お迎えした救い主を中心に置いて、過ごし方を考えようとしているのでしょうか。それとも最初から、生活の中心に救い主は置かれてなくて、宿屋の外、家畜小屋にしか救い主は置かれられないのでしょうか。

そうではなく、喜んで生活の中心に、救い主イエス・キリストを迎え入れましょう。救い主が必要としていることを優先に生活を組み立て、喜んで幼子イエスのために自分の都合を横に置きましょう。その最初の取り組みは、新生児が安らかに留まることができるための心の温かさや心の静けさを取り戻し、わたしたちがしばしば好む社会の騒がしさから一歩身を引くことだと思います。

さらに、今日の福音朗読の最後には「突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った」（2・13）というくだりがあります。天の大群は数十万、数百万だったのでしょうか。しかしわたしたちキリスト者は、カトリック教会だけでこの地上に12億人とも言われています。すべてのキリスト者を合わせれば、天使の大軍に勝るとも劣らない数なのではないのでしょうか。

そのわたしたちが、全世界地の果てまで「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」（2・11）と賛美の声を上げるなら、わたしたちの信仰の証しは世界を包むと思います。病気や老齢、戦争や迫害などで教会から遠く離れている人もいます。これらの人々にも、今宵御降誕の喜びが身近に感じられるよう、ミサの中で願い求めましょう。



## 主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

イエス・キリスト、恵みと真理に満ちておられる方

あらためて主の降誕おめでとうございます。明けてクリスマス日中のミサを祝う今日の福音朗読は、ヨハネ福音書が選ばれています。「イエス・キリスト、恵みと真理に満ちておられる方」とまとめたいと思います。

今年、クリスマス夜半ミサをささげ終わって、「プレゼント」について考えてみました。皆さんの家庭でもクリスマスプレゼントの習慣があるかもしれません。わたしは今年ケーキも買わず、これといった品物も準備しませんでした。クリスマスプレゼントは実は神さまが用意してくれるものなのだと思える経験をしました。

それは、神さまが遣わして下さった人、わたしからは探そうと思っても出会えない人との出会いです。その人とは、クリスマスでなければ会うこともなかったかも知れません。わたしはその人と短い間でしたが心を通わせる会話ができました。神さまは素敵なプレゼントを用意してくださるなあ、素敵な演出だなあと感謝しました。

もちろん、イエス・キリストの誕生こそが、クリスマスの最上のプレゼントです。朗読された福音にあるように、わたしたちに与えられた救い主は「恵みと真理とに満ちていた」（1・14）のです。

「恵みと真理」実社会ではほとんど聞かれない言葉かも知れません。学校で恵みについてだれも教えてくれませんかし、社会が真理と受け止めるものは「数が多ければ何でもできる。数こそ真理だ」こんな風潮です。

恵みを語ってくれる人がいない社会で、また数によって真理が押し付けられる社会にあって、救い主誕生の出来事はゆるぎない「恵みと真理」とに満ちているのです。

社会が恵みと真理から遠ざかっている中で、わたしたちは夜半のミサに続いて、今朝も恵みと真理である救い主に近づこうとしてここに集いました。恵みと真理は目の前にありますが、わたしたちが恵みと真理にあずかるだけでなく、恵みと真理が何かを見失っている人々にイエス・キリストを示してあげる必要があると思います。

たとえば、わたしたちは毎日目が覚めることを当たり前のように思っていますが、日本に同世代の人が百万人いるとして、この人たちが明日必ず目が覚めるという保証はどこにもないのです。朝、目が覚めた。それは神によって生かされているということです。

そのこと一つ取っても、わたしたちは神に感謝する理由があります。そしてわたしたちは感謝する相手を知っています。「あなたは今日を生きていることを恵みと思いませんか。そのことを感謝する相手を知っていますか。」これだけでも十分に、イエス・キリストを告げ知らせるきっかけにできます。イエス・キリストの中に、恵みと真理とが満ちています。わたしたちの言葉は拙くても、恐れずに告げ知らせましょう。わたしたちが恵みと真理はイエス・キリストにあると告げるなら、もっと

多くの方がクリスマスを本当の意味で喜び合うことができます。

聖家族(ルカ 2:22-40)



## 聖家族 (ルカ 2:22-40)

神の言葉にしっかり立って生きる

聖家族の祝日を迎えました。マリアとヨセフが神殿に幼子イエスを献げるためにやって来ると、シメオンが幼子を抱きます。このシメオンに焦点を当てて、糧を得たいと思います。

御降誕のミサが終わって一息という感じですが、ただ木曜日にはまた神の母聖マリアの守るべき大祝日が回ってきますので、まだ気を緩めることはできません。あとひと踏ん張りといったところです。

徒歩巡礼に向けて練習のために歩き出しました。毎日歩くところまではいっておりませんが、今は中ノ浦教会まで、片道1時間ちょっと、往復2時間ちょっとの道のりを歩いています。坂道なので、良い姿勢で歩くことにも役立っています。時々見晴らしの良いところで海が見えて、「海のほうがいいなあ」と心が揺れますが、それでも頑張っています。

福音朗読は、幼子イエスが神殿で献げられる場面が選ばれています。神殿にはシメオンという預言者がとどまっていた。彼は「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」(2・26)とのお告げを聖霊から受けていました。

おそらく年老いていただろうシメオンが生きていたのは、聖霊によるお告げに支えられてのことでした。「生きている」という姿を「立っている」と置き換えると、シメオンは聖霊によるお告げにしっかり立っていたのでした。

そこへヨセフとマリアが幼子イエスを神殿奉獻のために連れてきます。シメオンは心の中で、何度も何度も繰り返して自分が会うことになっているメシアを思い描いていたのでしょう。初めて幼子イエスを見ただけで、自分の願いがかなえられたことが分かりました。

シメオンは幼子を抱き、喜びの声を上げます。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(2・29-32)

これまでシメオンは、聖霊によるお告げにしっかり立って生きていたのですが、今幼子イエスを抱いて、新しい生き方になりました。救い主を信じて、神の救いを確信して生きる人になったのです。今まではやって来るはずの約束に固く立っていましたが、今はその約束の実現の上にしっかり立って生きる人になったのです。

シメオンの姿は、わたしたちにもあるべき生き方を示していると思います。わたしたちは誰でも、何かの上にしっかり立って生きているわけですが、そのしっかり立つ場所はイエス・キリストであるべきだということです。

健康に注意して、健康の上に生活を成り立たせている人もいます。健康に注意して、健康の上に生活を成り立たせている人もいます。仕事上の成功や、名声の上に生活を成り立たせている人もいます。

しょう。けれどもそれらを土台にして生きていると、いつかその土台が不安定になり、根こそぎ奪われることもあるのです。わたしたちがしっかり立って生きるべきは、不安定にならない土台、決して奪い取られることのない土台でなければなりません。それは神の言葉ではないでしょうか。

神の言葉は今や人となってわたしたちの間に住まわれました。救い主がいつかおいでになるという未来の約束は終わり、今や目の前に神の言葉が、神の約束が与えられています。この人となった神の言葉こそ、わたしたちがしっかり立って生きる土台です。わたしたちが神の言葉にしっかり土台を置いて生きるなら、人となった神の言葉を通して、わたしたちも「たくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれて」生きることができます。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)